

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 247

岡山城二の丸跡

警察本部庁舎車庫整備事業に伴う発掘調査

2019

岡山県教育委員会



1 道路検出状況（北西から）



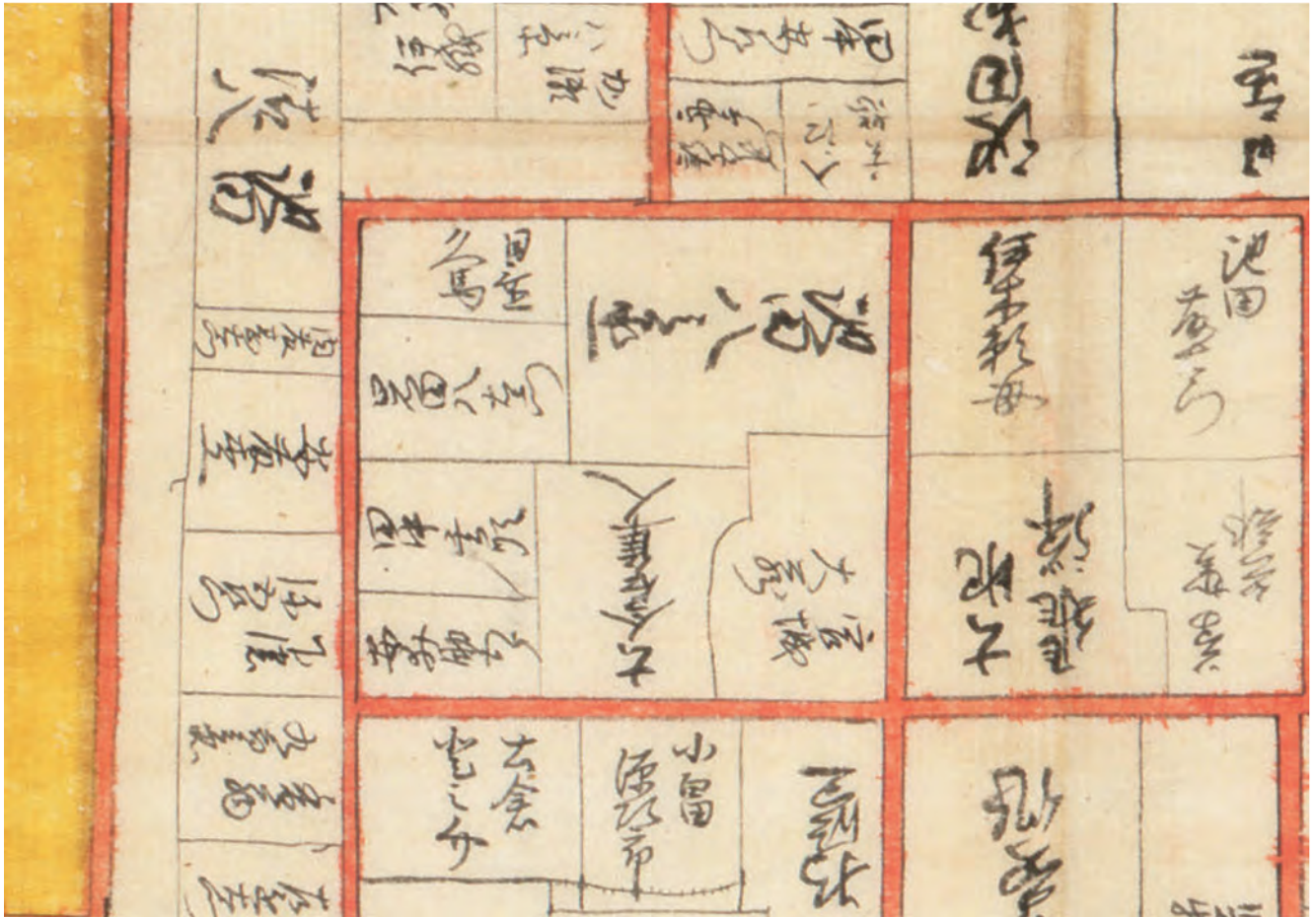
2 銅製品製作関連遺物



1 「岡山古図」(寛永9年)



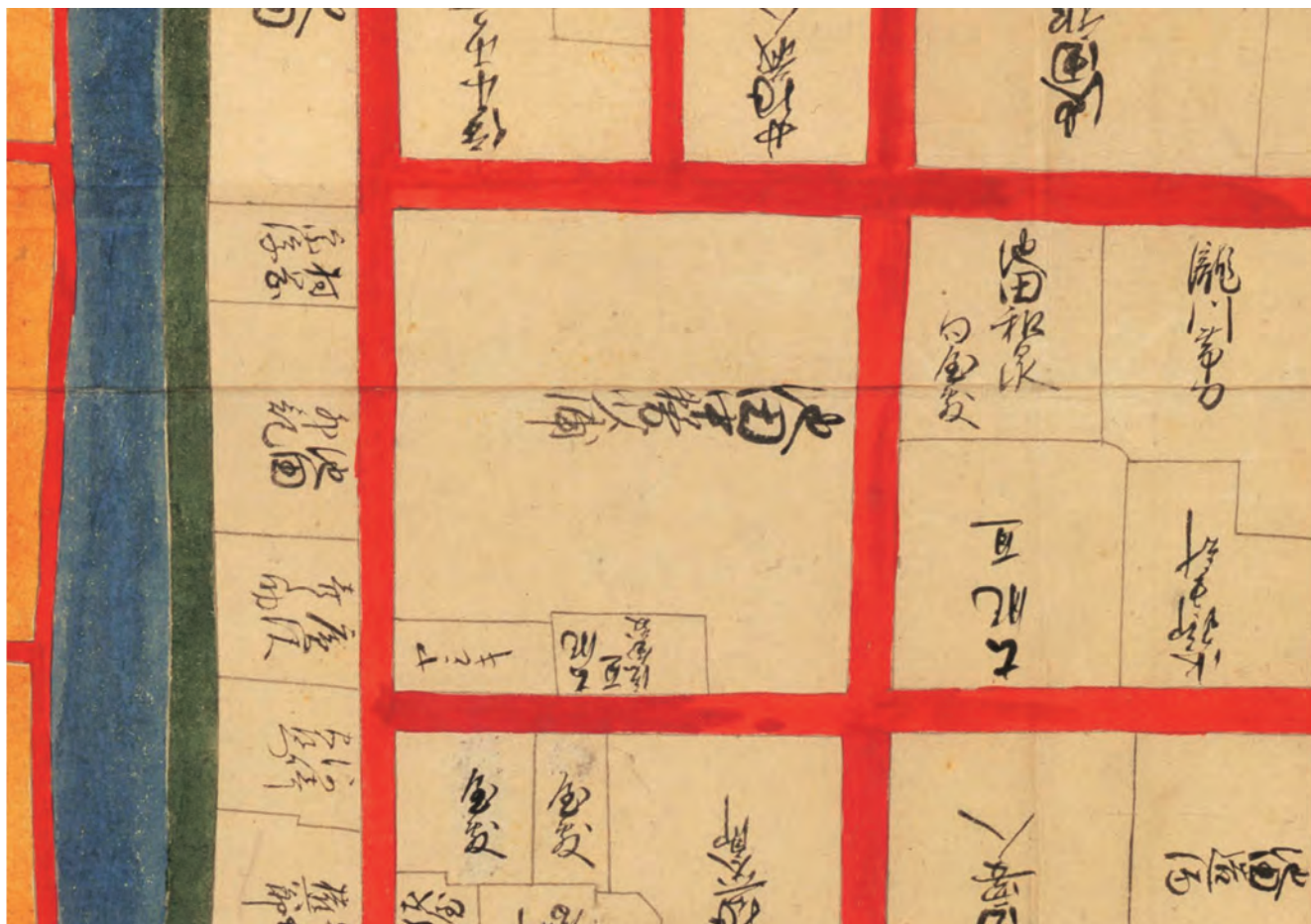
2 「備前国岡山城下図」(年未詳)



1 「岡山古図」(寛政12年)



2 「岡山内曲輪絵図」(宝永5年)



1 「備前岡山地理家宅一枚図」(年未詳)



2 「備前岡山地理家宅一枚図」(文久3年)

序

本書は、警察本部庁舎車庫整備事業に伴い発掘調査を実施した、岡山城二の丸跡の発掘調査報告書です。

このたび、警察本部庁舎車庫整備が計画されたことから、岡山県教育委員会では計画地内に所在する遺跡の取扱いについて関係部局と協議を重ねてまいりました。その結果、現状での保存は困難であり、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなりました。

岡山県庁の西約200mに位置する発掘調査地は、寛永9（1632）年頃の岡山城下の様子を描いた『岡山古図』によると、重臣や上級武士の屋敷地が配された岡山城二の丸の一角に当たります。また、宝永5（1708）年頃の『岡山絵図』には岡山藩の支藩の一つである生坂藩の藩主屋敷地であったことが見え、以降幕末までこの地に藩主が居住していたようです。

調査の結果、近・現代の造成により藩主屋敷地の様子は分かりませんでした。16世紀後半から17世紀末までの遺構・遺物が重層的に確認されました。特に17世紀前半までの屋敷割りやその変遷が明らかになったことは、岡山市の発展の様子を伝える貴重な成果です。

本書が、岡山城をはじめとする近世城郭研究に寄与し、また市街地の下に残る城郭遺構の保護・保存のために活用されるならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施や報告書の作成に当たりましては、警察本部をはじめとする関係各位から多大な御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成31年3月

岡山県古代吉備文化財センター
所長 向井重明

例 言

- 1 本書は、警察本部庁舎車庫整備事業に伴い、岡山県教育委員会が岡山県警察本部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センター（以下、文化財センター）が実施した、岡山城二の丸跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査を実施した岡山城二の丸跡は、岡山市北区内山下1-5-5に所在する。
- 3 確認調査は、平成28年度に文化財センター職員岡本泰典が担当して実施した。調査期間は平成28年7月25～29日、調査面積は48㎡である。本発掘調査は、平成29年度に文化財センター職員尾上元規・小嶋善邦が担当して実施した。調査期間は平成29年6月1日～10月31日、調査面積は780㎡である。
- 4 本書の作成は、平成30年4月2日～8月31日にかけて小嶋が担当し、文化財センターにて実施した。
- 5 本書の執筆は、第2章第1節を文化財センター職員大橋雅也が行い、その他は小嶋が担当した。
- 6 本書の作成にあたり、遺物に関する鑑定・分析を下記の諸氏に依頼して有益な教示を受けた。記して厚くお礼申し上げる。

金属加工関連遺物の分析	伊藤幸司（公益財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所）
人骨の鑑定	坂上和弘（独立行政法人 国立科学博物館）
動物遺存体の同定	富岡直人（岡山理科大学）
陶磁器の鑑定	家田淳一・大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）
石材の同定	鈴木茂之（岡山大学）
種子の同定	那須浩郎（岡山理科大学）
- 7 遺物写真の撮影については、江尻泰幸の協力と援助を得た。
- 8 本書に収載した遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本書に記載した高度は、海拔高である。
- 2 遺構全体図・遺構図が示す北方位は、平面直角座標第V系（世界測地系）の座標北である。
- 3 遺構全体図・報告書抄録に記載したグリッド値・経緯度は、世界測地系に準拠している。
- 4 本書に掲載した第2図の周辺遺跡分布図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「岡山北部」・「岡山南部」を複製・加筆したものである。
- 5 土層と遺物の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修）、『新版 色の手帳』（永田泰弘監修 小学館 1986）に準拠している。
- 6 遺構配置図では、次の通り遺構名の略称を用いる場合がある。
掘立柱建物：建 礎石列：礎 石列：石 柱穴列：柱 土坑：土
- 7 各遺構・遺物実測図の縮尺は、個々に明記した。
- 8 遺構番号は、遺構の種類ごとに通し番号を付している。
- 9 遺物番号は、陶磁器・土器類を除いて、その材質を示すため番号の前に次の略号を付した。
瓦類：R 木製品：W 金属製品：M 石製品：S
角・貝製品：B 土製品：C
- 10 土器実測図の中軸線左右の白抜きは、小破片のため口径復元に不確実性があることを示す。
- 11 本書で用いる時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分や世紀を併用した。

目 次

卷頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 発掘調査及び報告書作成の経過	5
第3節 発掘調査及び報告書作成の体制	6
第4節 日誌抄	7
第3章 発掘調査の成果	8
第1節 調査の概要	8
第2節 近世の遺構・遺物	11
第3節 中世以前の遺構・遺物	43
第4章 自然科学的分析	45
第1節 岡山城二の丸跡金属加工関連遺物の自然科学分析	45
第2節 岡山城二の丸跡出土人骨について	51
第3節 岡山城二の丸跡出土動物遺存体	59
第5章 総括	63
遺構一覧表・遺物観察表・種子同定表凡例	69

図版

報告書抄録

目 次

第1図	遺跡位置図 (1/1, 500, 000) …… (目次)	第36図	土器 2 (1/4) …… 34
第2図	周辺遺跡分布図 (1/35, 000) …… 2	第37図	埴埜 (1/4) …… 35
第3図	岡山城と調査位置図 (1/9, 000) …… 4	第38図	軒丸瓦 (1/4) …… 36
第4図	調査地位置図 (1/500) …… 6	第39図	軒平瓦・棟込瓦 (1/4) …… 37
第5図	調査区北壁 (1/100) …… 8	第40図	木製品 1 (1/4) …… 38
第6図	調査区東壁 (1/100) …… 9	第41図	木製品 2 (1/4) …… 39
第7図	調査区西壁 (1/100) …… 10	第42図	金属製品 (2/3・1/2・1/3) …… 40
第8図	近世IV期遺構配置図 (1/200) …… 11	第43図	石製品 (1/3) …… 41
第9図	溝 1・柱穴列 1～5 (1/150) …… 12	第44図	角・貝製品 (1/3) …… 42
第10図	柱穴列 1～5 (1/150) …… 13	第45図	土製品 (1/3) …… 42
第11図	井戸 1・土坑 1～3 (1/30・1/60) …… 14	第46図	中世遺構配置図 (1/200) …… 43
第12図	近世III期遺構配置図 (1/200) …… 16	第47図	溝16出土遺物 (1/4) …… 44
第13図	礎石列 1 (1/60) …… 17	第48図	近世造成土及び遺構出土の中世以前の 遺物 (1/4) …… 44
第14図	柱穴列 6 (1/80) …… 17	第49図	エックス線透過写真 1 …… 49
第15図	土坑 4～6 (1/60) …… 17	第50図	エックス線透過写真 2 …… 50
第16図	溝 7 (1/60) …… 18	第51図	岡山城二の丸跡出土人骨 …… 53
第17図	近世II期遺構配置図 (1/200) …… 19	第52図	偏差折線図 …… 55
第18図	石列 1 (1/60) …… 20	第53図	第 2 及び第 3 主成分における 主成分得点のプロット図 …… 55
第19図	柱穴列 7 (1/60) …… 20	第54図	顔面部の損傷骨 …… 58
第20図	土坑 7～9 (1/60) …… 20	第55図	頭頂部の刀創の全景その 1 …… 58
第21図	土坑10～18 (1/30・1/60・1/120) …… 21	第56図	頭頂部の刀創の全景その 2 …… 58
第22図	土坑19～21 (1/30・1/60) …… 22	第57図	刀創の前方端の拡大図 …… 58
第23図	近世 I 期遺構配置図 (1/200) …… 23	第58図	刀創の後方端の拡大図 …… 58
第24図	掘立柱建物 1 (1/60) …… 24	第59図	刀創部の X 線画像 …… 58
第25図	井戸 2・3 (1/60) …… 25	第60図	側頭部の打撃痕 …… 58
第26図	土坑22・23 (1/60) …… 25	第61図	埴埜の内径と深さ …… 64
第27図	土坑24～28 (1/60) …… 26	第62図	『岡山古図』(寛永 9 年)における 調査区位置 (推定) …… 67
第28図	土坑29～32 (1/60) …… 27	第63図	『岡山内曲輪絵図』(宝永 5 年頃)に おける調査区位置 (推定) …… 67
第29図	土坑33 (1/120) …… 27		
第30図	溝 8～14・石列 2 (1/30・1/60) …… 28		
第31図	輸入磁器 (1/4) …… 29		
第32図	国産磁器 (1/4) …… 30		
第33図	国産陶器 (1/4) …… 31		
第34図	炆器 (1/4) …… 32		
第35図	土器 1 (1/4) …… 33		

卷頭図版目次

卷頭図版 1

- 1 道路検出状況（北西から）
- 2 銅製品製作関連遺物

卷頭図版 2

- 1 「岡山古図」（寛永9年）
- 2 「備前国岡山城下図」（年不詳）

卷頭図版 3

- 1 「岡山古図」（寛政12年）
- 2 「岡市内曲輪絵図」（宝永5年）

卷頭図版 4

- 1 「備前岡山地理家宅一枚図」（年不詳）
- 2 「備前岡山地理家宅一枚図」（文久3年）

図版目次

図版 1 1 柱穴列 1～5・溝 1（南から）

2 溝 1 石積み（北東から）

図版 2 1 溝 1 石積み（南東から）

2 溝 2・3 断面（南から）

3 礎石列 1（南東から）

図版 3 1 土坑 6（東から）

2 溝 7（北東から）

3 溝 7 断面（北から）

図版 4 1 近世 I・II 期全景（北から）

2 石列 1（北西から）

3 土坑 15 断面（西から）

図版 5 1 土坑 17 断面（北西から）

2 土坑 20 桶出土状況（南から）

3 井戸 2（北から）

図版 6 1 井戸 3（東から）

2 土坑 24（南西から）

3 土坑 30（南から）

図版 7 1 土坑 31（北から）

2 土坑 33（東から）

3 溝 8（北から）

図版 8 1 溝 8 東肩部石列（北西から）

2 溝 9 東半（南から）

3 溝 12・石列 2（北西から）

図版 9 1 溝 15 出土人骨（南から）

2 造成土敷石（北から）

3 造成土敷粗朶（南西から）

図版 10 1 溝 16・17（西から）

2 東壁断面（北西から）

3 道路造成土及び屋敷地造成土
〈北端〉（西から）

図版 11 1 北壁断面 〈東側〉（南から）

2 西壁断面 〈北側〉（東から）

3 西壁断面 〈中央〉（南東から）

図版 12 1 輸入磁器

2 国産磁器

図版 13 1 国産陶器

図版 14 1 銅製品製作関連遺物

図版 15 1 炆器

2 土器 1

図版 16 1 土器 2

2 軒丸瓦

図版 17 1 軒平瓦、棟込瓦

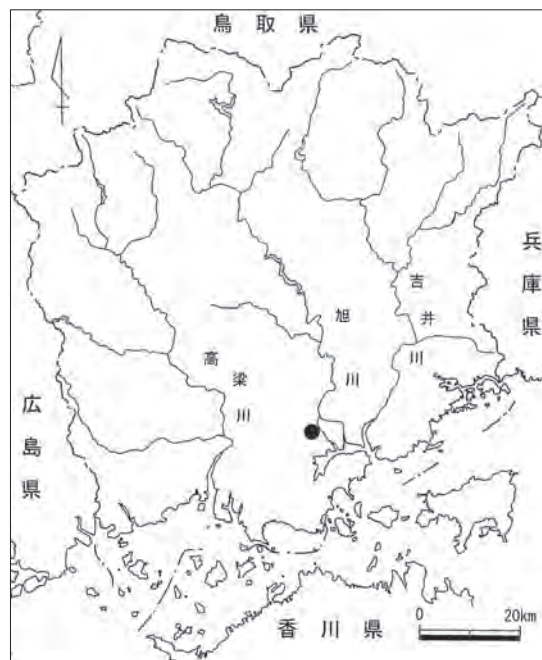
図版 18 1 木製品

図版 19 1 金属製品

図版 20 1 石製品、角・貝製品、土製品

表目次

表1	文化財保護法に基づく文書一覧……………	7	表6	主成分分析の結果……………	56
表2	対象資料一覧……………	45	表7	出土動物遺存体リスト……………	59
表3	埴塙分析結果一覧……………	47	表8	遺構及び包含層別の動物遺存体出土状況……………	61・62
表4	地金分析結果一覧……………	47	表9	銅製品製作関連遺物出土点数……………	64
表5	頭蓋計測値……………	52			



第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

岡山平野は、中国山地に端を發し瀬戸内海へと注ぐ旭川、吉井川、高梁川の運んだ土砂により形成された沖積平野である。岡山城が位置する現在の岡山市街地はこの岡山平野の中央部に広がり、北を烏山、半田山、龍ノ口山、西を京山、東を操山などの丘陵に囲まれている。また、現旭川は市街地西側を南北に貫流するが、これは宇喜多期に遡る城下整備と一体として行われた流路の固定によるもので、平野形成期には扇形に広がる小河川が複雑な微高地を形作っていた。

第2節 歴史的環境

1 岡山城築城前史

岡山平野における人類の活動痕跡は旧石器時代に遡り、操山山塊でナイフ形石器が採集されている。続く縄文時代には、前期の羽島下層式土器が出土した朝寝鼻貝塚の形成が始まる。朝寝鼻貝塚はダイミ山南麓に位置し、縄文時代後期の遺物も出土している。同時期の土器や遺構は、操山北麓に広がる百間川沢田遺跡や半田山南麓に広がる津島岡大遺跡でも検出されており、沖積化の進行が窺われる。縄文時代晩期には引き続き、百間川遺跡群や津島岡大遺跡で生活跡が確認されている。

弥生時代に入ると、津島岡大遺跡や津島遺跡、北方下沼・地蔵・横田遺跡で水田が形成されるなど、微高地縁辺部の低湿地を利用した本格的な稲作が開始されたことがわかる。弥生時代中期には、やや南に下った南方遺跡を中心に集落が営まれ、微高地上で竪穴住居・掘立柱建物が検出されたほか、河道から精巧に加工された木製品が多数出土している。弥生時代後期に入ると沖積化がより進行し、拡大した微高地上に集落群が展開し始める。津島遺跡では多数の竪穴住居のほか、河道内から建築部材をはじめとする多数の木器が出土している。南方遺跡では土坑墓や土器棺が検出されている。そのほか、伊福定国前遺跡では古墳時代前期まで継続する集落跡が検出されている。また、当時の海浜部と考えられる鹿田遺跡では製塩土器が出土しており、製塩にかかわる集落と考えられる。

弥生時代後期末から古墳時代初頭には、平野北部の半田山に都月坂2号墳丘墓を端緒として、七つ坑1号墳、都月坂1号墳が造られる。一方、平野南東部の丘陵上には操山109号墳と網浜茶白山古墳が築かれ、各集団の発展が窺われる。その結実として、古墳時代前期末～中期初頭には平野中央部に全長150mを測る神宮寺山古墳が出現する。古墳時代後期には、平野東部の竜ノ口山塊や操山山塊に群集墳が営まれる一方で、西部では矢坂山のみ古墳が築かれる。

古代以降、旭川西岸地域は、御野郡域に含まれる。津島遺跡では、条里に関係すると想定される溝が検出されている。また、鹿田遺跡周辺は奈良時代末に成立して室町時代まで継続した、殿下渡領の一つである「鹿田荘」の故地に比定されている。



第2図 周辺遺跡分布図 (1/35,000)

- | | | | |
|-----------|--------------|-----------------|------------|
| 1 朝寝鼻貝塚 | 2 百間川沢田遺跡 | 3 津島岡大遺跡 | 4 津島遺跡 |
| 5 南方遺跡 | 6 伊福定国前遺跡 | 7 鹿田遺跡 | 8 都月坂2号墳丘墓 |
| 9 都月坂1号墳 | 10 七つ坑1号墳 | 11 操山109号墳 | 12 網浜茶白山古墳 |
| 13 神宮寺山古墳 | 14 岡山城・岡山城下町 | 15 百間川一の荒手及び背割堤 | 16 百間川二の荒手 |

2 岡山城史

現在の岡山城主要部に南北朝時代から城があったとする説もあるが、近世岡山城に直接関連するのは室町時代後期に金光氏が城主となってからで、江戸時代の編纂物である『備前軍記』に金光与次郎宗高の名が見える。備前国西部で覇権を確立しつつあった宇喜多直家は、この宗高を謀略によって滅ぼした。そして直家は城地の拡張を行い、天正元（1573）年に岡山城に入城する。この時、岡山の南麓にあった蓮昌寺や岡山寺、三社明神を移転させたといわれる。天正10（1582）年、直家が没すると、その跡目を子の秀家が継いだ。秀家は羽柴（豊臣）秀吉の天下統一事業に従い、備中高松城攻めの後、備前・美作・備中半国からなる57万石の所領を認められた。天正19（1591）年、秀家は秀吉の助言に従い岡山城の本格的な城郭整備に乗り出し、慶長2（1597）年に竣工した。その城郭整備は、本丸を石山から岡山に移して南に大手を構える縄張りとするもので、城地北側に旭川の流路を固定して天然の堀とするとともに、丸の内を取り巻く三重の内堀を設けた。

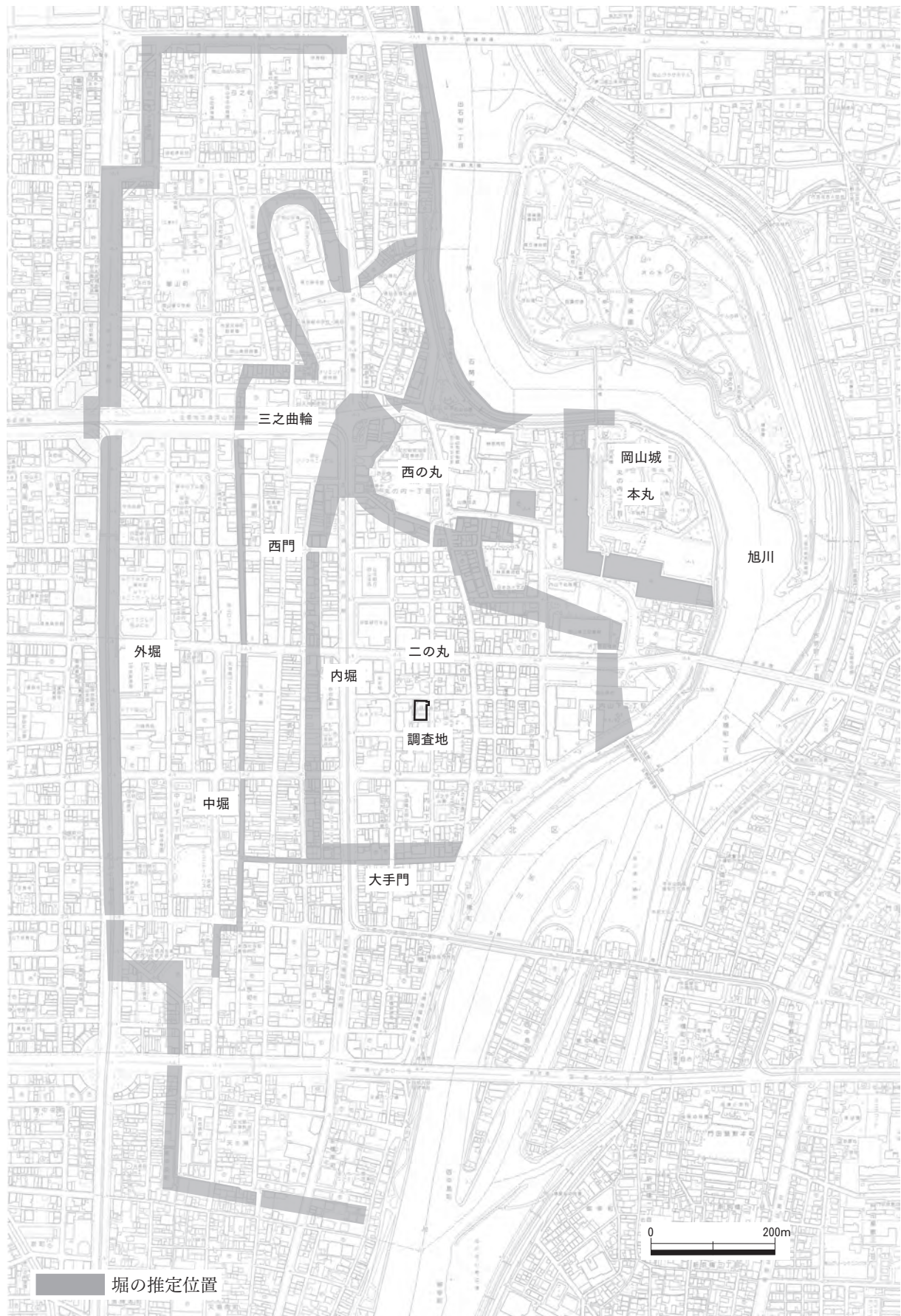
慶長5（1600）年、関ヶ原の戦いにおいて敗北した秀家に代わって、小早川秀秋が入城した。秀秋は、外堀（二十日堀）を掘削して三之外曲輪を新設するなど積極的に西側外郭の整備を図るなどしたが、在城二年にして病没する。継嗣がなかったため、代わって姫路城主池田輝政の次男忠継が備前一国を継承した。しかし幼年であったため、兄の利隆が監国として岡山城に入城することになった。忠継は慶長19（1614）年に岡山城に入ったが、翌年、17歳で病没した。そのため忠継の実弟、忠雄が岡山城主となった。忠雄は月見櫓や小納戸櫓などを築造し、近世城郭としての岡山城を完成させ、さらには西川を掘削して岡山城下の整備も行っている。忠雄時代に制作された最古の岡山城下絵図である『岡山古図』は後の城下図と重なる部分が多く、城下町もこの時点でほぼ完成を見ていたようである。

寛永9（1632）年、忠雄は江戸藩邸で死去し、嫡子の光仲が跡を継いだ。だが、幼少であることを理由に因幡・伯耆へ国替えとなり、代わって鳥取城主であった池田光政が岡山城に入る。光政治世下の承応3（1654）年、岡山城下で侍屋敷439軒流出、溺死者156名という甚大な被害を出した大洪水が発生した。この洪水を受け、光政は寛文9（1669）年に百間川の築造工事を開始し、貞享3（1686）年に完成を見た。これは熊沢蕃山の『川除の法』に基づくもので、荒手と呼ばれる越流堤と放水路を組み合わせて旭川の溢水を誘導・放水するというものであった。

光政入城以降、幕府の統制が厳しくなり、岡山城では縄張りの改造や櫓の新設などは一切行われず、明治維新を迎えている。明治2（1869）年、藩主であった池田章政は版籍奉還を行い、岡山城二の丸より内側は兵部省（後の陸軍省）の所管となった。以後、明治15（1882）年までには天守・月見櫓・西丸西手櫓・石山門など一部除いて建物が廃棄された。その後、岡山城二の丸一帯は岡山県病院や県立商業高校等の用地となったほか、一般宅地化が進み、武家地としての姿を徐々に失っていった。

昭和20（1945）年6月の岡山大空襲により天守と石山門が焼失し、城郭建築は月見櫓と西丸西手櫓を残すのみとなった。戦後、本丸周辺は都市公園として本格的な整備がなされ、昭和41（1966）年には天守を含むいくつかの建物が復元された。一方、二の丸跡では岡山県庁舎が昭和32（1957）年に同地へ移転してきた。

※本文は、高田恭一郎編「岡山城二の丸跡－警察本部庁舎整備事業に伴う発掘調査－」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』245 岡山県教育委員会 2018 収載の「第1章 地理的・歴史的環境」に加筆修正したものである。



第3図 岡山城と調査位置図 (1/9,000)

第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

県民の安全・安心を確保するために、これまで各所に分散していた警察本部機能を集約し、拠点となる新本部庁舎を岡山県庁敷地内に建設する整備基本計画策定が平成25年度に着手された。県庁敷地は岡山城二の丸跡にあたり、その重要性から、警察新本部庁舎建設にあたって埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて、慎重に教育庁文化財課と関係各機関で協議、調整を重ね、平成29年1月～4月にかけて記録保存調査を実施した⁽¹⁾。

ところで、この警察新本部庁舎を整備することによって、新たに警察関係車両を集約する車庫の確保が必要となり、平成27年に県庁西側近隣地において立体車庫の建設が計画された。この計画地も岡山城二の丸跡にあたることから、本部庁舎建設とあわせて埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて事業関係機関との協議を行った。計画地は既に市街地化しており、過去の建築物の基礎工事等により、大きく遺構が破壊され、残存していないことも考えられたことから、事前に確認調査を実施し、その結果に基づいて、適切な対応を検討することとした。そして、平成28年7月に確認調査を実施し、江戸時代の屋敷地に関連する遺構面を確認したことから、引き続き対応についての協議を進めた。こうした経緯を経て、警察本部庁舎に伴う発掘調査終了後、平成29年6月から10月まで記録保存調査を実施することとした。

文化財保護法に基づく手続きは、保護法第94条に基づく発掘の通知を平成28年9月に提出を受け、発掘調査の勧告を行った。

註

(1) 高田恭一郎編「岡山城二の丸跡－警察本部庁舎整備事業に伴う発掘調査－」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』245 岡山県教育委員会 2018

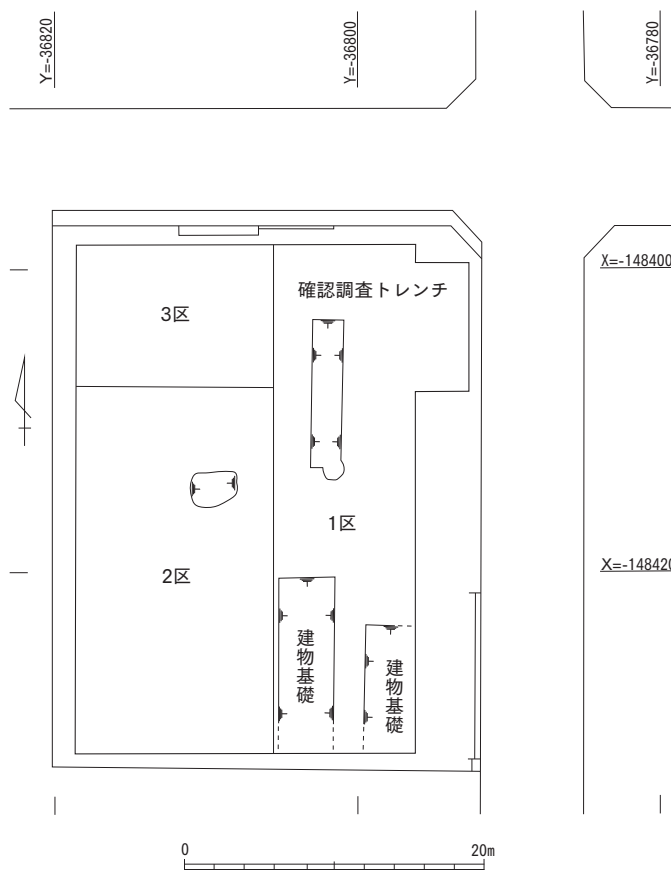
第2節 発掘調査及び報告書作成の経過

発掘調査は、調査排土を場内で処理する関係から、調査区を1～3区の3つに分け、東側の1区から取り掛かり、順次2区、3区と調査を進めた。現表土から約1mの厚さで堆積している近・現代造成土は、調査開始前に除去及び搬出されていたが、既存建物の基礎等が調査区南半に残され、特に1区南半は強固なコンクリート基礎により調査を断念せざるを得なかった。調査は6月1日から始め、厚さ約1.1mを測る近世造成土は、一定の海拔まで水平に掘り下げたのち、遺構の検出及び掘削を行うことを繰り返して掘り進めた。この掘り下げ中に近世の遺構・遺物が重層的に検出されたことから、複数の生活面が存在したと思われる。中世の遺構は、近世造成土の下層の厚さ0.6m前後の細砂～シルト層を挟んで海拔約1.9m付近で検出されることが確認調査で判明していたため、この層を重機により除去した後、調査を行った。なお3区は、調査工程上、人力による近世造成土の掘削を断念し、

第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

これまでの調査成果から対象となる遺構面の高さまで重機で掘り下げ、その後遺構の検出や掘削を行うことを繰り返しつつ調査を進めた。

報告書の作成は、文化財センターにて調査員1名が従事し、遺物の復元、実測、写真撮影と平行して、遺構・遺物の浄書を進めた。この期間中に、陶磁器については、佐賀県立九州陶磁文化館の家田淳一氏と大橋康二氏に、石材鑑定については岡山大学の鈴木茂之氏に、動物遺存体の同定については岡山理科大学の富岡直人氏に、種子の同定については岡山理科大学の那須浩郎氏に教示を仰ぎ、金属加工関連遺物の調査指導とX線撮影及び蛍光X線分析を大阪文化財研究所の伊藤幸司氏に依頼した。また、国立科学博物館の坂上和弘氏には、出土人骨の鑑定を依頼した。



第4図 調査地位置図 (1/500)

第3節 発掘調査及び報告書作成の体制

平成28年度

岡山県教育委員会

教育長 竹井 千庫

岡山県教育庁

教育次長 内田 広之

文化財課

課長 小見山 晃

参事(文化財保存・活用担当) 横山 定

総括参事(埋蔵文化財班長) 大橋 雅也

主幹 杉山 一雄

主任 平井 健太

岡山県古代吉備文化財センター

所長 宇垣 匡雅

次長(総務課長事務取扱) 成本 俊治

〈総務課〉

総括主幹(総務班長) 金藤 賢史

主任 浦川 徳子

主任 山内 基寛

〈調査第一課〉

課長 亀山 行雄

総括副参事(第一班長) 尾上 元規

主 幹

岡本 泰典
(調査担当)

平成29年度

岡山県教育委員会

教育長 竹井 千庫

岡山県教育庁

教育次長 日比謙一郎

文化財課

課長 小見山 晃

参事(文化財保存・活用担当) 横山 定

総括副参事(埋蔵文化財班長) 柴田 英樹

主幹 平井 健太

主任 上梶 武

岡山県古代吉備文化財センター

所長 宇垣 匡雅

次長(総務課長事務取扱) 高田 亮

参事(文化財保護担当) 大橋 雅也

〈総務課〉

総括副参事(総務班長) 金藤 賢史

主任 浦川 徳子

主任 東 恵子

第3節 発掘調査及び報告書作成の体制

〈調査第二課〉		主 幹	上 梶 武
課 長	高田恭一郎	主 任	原 珠見
総括副参事（第二班長）	尾上 元規 （調査・整理担当）	岡山県古代吉備文化財センター	
主 幹	小嶋 善邦 （調査担当）	所 長	向井 重明
平成30年度		次 長（総務課長事務取扱）	高田 亮
岡山県教育委員会		参 事（文化財保護担当）	大橋 雅也
教育長	鍵本 芳明	〈総務課〉	
岡山県教育庁		総括主幹（総務班長）	甲元 秀和
教育次長	日比謙一郎	主 任	浦川 徳子
文化財課		主 任	東 恵子
課 長	大西 治郎	〈調査第二課〉	
参 事（文化財保存・活用担当）	横山 定	課 長	亀山 行雄
総括副参事（埋蔵文化財班長）	柴田 英樹	総括副参事（第一班長）	澤山 孝之
		主 幹	小嶋 善邦 （整理担当）

第4節 日誌抄

平成28年度		10月23日（月）	2区調査終了
平成28年7月25日（月）	確認調査開始	10月24日（火）	3区調査開始
7月29日（金）	確認調査終了	10月26日（木）	3区調査終了
平成29年度		10月31日（火）	発掘調査終了
平成29年6月1日（木）	1区調査開始	平成30年度	
7月28日（金）	1区調査終了	平成30年4月2日（月）	報告書整理作業開始
7月31日（月）	2区調査開始	8月31日（金）	報告書整理作業終了

表1 文化財保護法に基づく文書一覧

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

文書番号 日付	周知・ 周知外	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	包蔵地 の有無	報告者	担当者	期間
岡吉調 第53号 H28.8.5	周知	城館跡 岡山城二の丸跡	岡山市北区内山下 1-5-5	48㎡	警察駐車場 整備事業	有	岡山県古代吉備文化 財センター所長	岡本泰典	H28.7.25～ H28.7.29

埋蔵文化財発掘の通知（法第94条）

文書番号 勧告等の日付	遺跡の名称 時代・種類	所在地	目的	通知者	通知日	主な勧告事項
教文埋第796号 H28.9.13	岡山城二の丸跡 中世・近世 城跡	岡山市北区内山下 1-5-5	その他建物 (県警察本部車庫)	岡山県知事	平成28年9月9日	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

文書番号 日付	周知・ 周知外	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	期間
岡吉調第19号 H29.6.1	周知	城館跡 岡山城二の丸跡	岡山市北区内山下 1-5-5	780㎡	警察本部庁舎車庫整備	岡山県古代吉備文化財 センター所長	尾上元規・ 小嶋善邦	H29.6.1～ H29.10.31

埋蔵文化財発見通知（法第100条第2項）

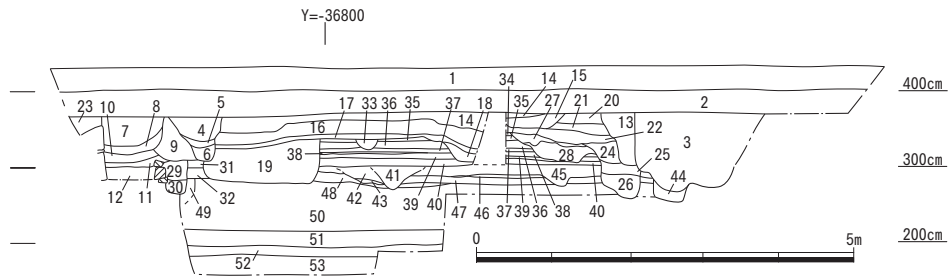
文書番号 日付	物件名	出土地・名称 時代・種類	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文埋第570号 H28.7.29	陶磁器・瓦 計 整理箱1箱	岡山城二の丸跡 中世・近世 城館跡	H29.7.25 ～H29.7.29	岡山県教育委員会 教育長	岡山県	岡山県古代吉備文化財 センター
教文埋第1015号 H29.10.31	須恵器・土師器・陶磁器・瓦・ 金属製品・木製品ほか 計 整理箱80箱	岡山城二の丸跡 近世 城館跡	H29.6.1 ～H29.10.27	岡山県教育委員会 教育長	岡山県	岡山県古代吉備文化財 センター

第3章 発掘調査の成果

第1節 調査の概要

岡山県庁から約200m西に位置する調査地は、江戸時代では岡山城二の丸の中央やや西よりに当たる。江戸時代の岡山城下の絵図面（巻頭図版2～4）によるとこの地点は、武家屋敷地の一角を占め、宝永年間以降には岡山藩の支藩である生坂藩の藩主屋敷地内に含まれていたようである。

調査地の土層は、大きく上から近・現代造成土層、近世造成土層、中世以前の自然堆積層に分かれる。バラストや煉瓦を含む近・現代造成土は現地表から海拔約3.6m前後まで認められ、これらを除去すると近世造成土が現れる。この近世造成土を掘り下げ中に順次遺構が検出され、それらには屋敷地に伴う掘立柱建物、礎石列、柱穴列、井戸、土坑、柱穴などのほかに、東西両側に溝を伴う道路遺構などがある。近世造成土の最下面の海拔高は、一番高い調査地東側で約2.8m、低い調査地西側中央部で約



- | | | |
|---|--|---|
| 1 バラスト | 20 におい黄色 (2.5Y6/3) 細砂 | 36 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粗砂とシルトの互層
…東壁14層 |
| 2 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘性粗～細砂 (レンガ含む) | 21 黄灰色 (2.5Y5/1) 細～粗砂
シルトブロック含む | 37 褐色 (7.5YR4/4) 粗砂～小礫 (非常に固く締まる)
…東壁15層 |
| 3 角礫等を多量に含む土 | 22 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘性粗～細砂 | 38 灰色 (5Y5/1) 粗砂～細砂 (瓦片を多く含む)
…東壁17層 |
| 4 黒褐色 (10YR3/1) 粘性粗～細砂…近代溝埋土 | 23 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘性粗砂 | 39 褐色 (7.5YR4/4) 粗砂～細砂～小礫 (固く締まる)
…東壁18層 |
| 5 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘性細砂…近代溝埋土 | 24 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘性粗砂 (瓦片含む)
…溝4埋土 | 40 灰白色 (5Y7/2) 粗砂～小礫 (グライ化した真砂土)
…東壁21層 |
| 6 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘性細砂…近代溝埋土 | 25 灰色 (5Y5/1) 粘性粗～細砂 (真砂土混じり)
…溝4埋土 | 41 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘性粗砂…溝8新段階埋土 |
| 7 黒褐色 (10YR3/1) 粘性細砂…溝1埋土 | 26 灰色 (5Y4/1) 粘性粗砂…溝4埋土 | 42 灰オリーブ色 (5Y6/2) 粗砂…溝8古段階埋土 |
| 8 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト～微砂…溝1埋土 | 27 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘性粗砂…溝5埋土 | 43 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘性粗砂…溝8古段階埋土 |
| 9 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘性細砂…溝1埋土 | 28 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト (粗砂混じり)
…溝5埋土 | 44 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂…柱穴埋土 |
| 10 褐色 (10YR4/1) シルト～細砂…溝1埋土 | 29 灰色 (5Y5/1) 粘性細砂…溝6埋土 | 45 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘性粗砂…東壁22層 |
| 11 灰オリーブ (5Y4/2) シルト (粗砂混じり)
…溝1埋土 | 30 オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘性細砂…溝6埋土 | 46 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) シルト…東壁23層 |
| 12 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト (粗砂混じり)
…溝1埋土 | 31 オリーブ灰色 (10Y5/2) 粗砂～小礫
(グライ化した真砂土)…溝1か6埋土 | 47 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 粘性粗砂…東壁24層 |
| 13 におい黄色 (2.5Y6/4) 細砂 (瓦片含む)
…遺構埋土 | 32 黒色 (5Y2/1) 粘性粗砂 (瓦片含む)
…溝1か6埋土 | 48 オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト～粗砂～小礫 |
| 14 黄褐色 (2.5Y5/6) 細砂 | 33 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘性粗砂 (瓦片多量に含む)
…遺構埋土 | 49 オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト…遺構埋土 |
| 15 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土…遺構埋土 | 34 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粗砂～小礫
(非常に固く締まる)…東壁12層 | 50 オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘性微～細砂…東壁26層 |
| 16 黄褐色 (2.5Y3/1) 細砂 (瓦片多量に含む)
…溝2埋土 | 35 黒褐色 (10YR3/1) 粗砂～小礫
(非常に固く締まる、瓦片を含む)…東壁13層 | 51 オリーブ黒色 (7.5Y3/2) シルト…東壁27層 |
| 17 におい黄色 (2.5Y6/3) 細砂…溝2埋土 | | 52 灰色 (7.5Y4/1) シルト…東壁29層 |
| 18 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘性細砂 (瓦片含む)
…溝2埋土 | | 53 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト…東壁30層 |
| 19 におい黄褐色 (2.5Y5/3) 微砂～シルト
(底面付近に瓦片多量に含む)…溝3埋土 | | |

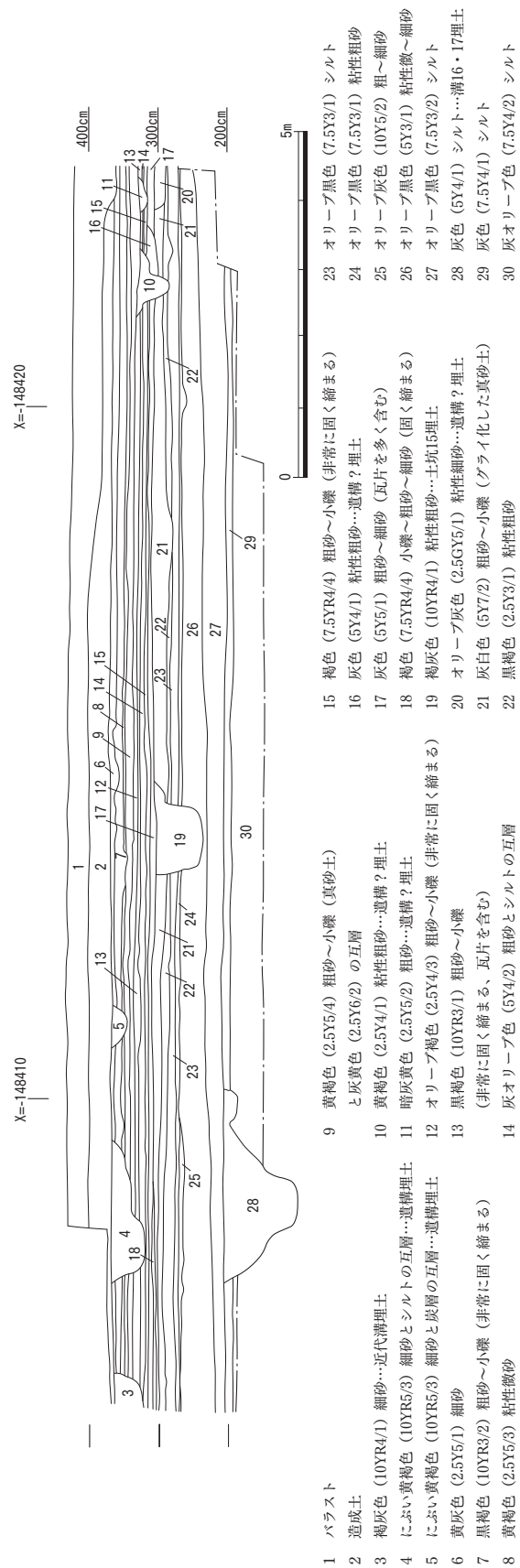
第5図 調査区北壁 (1/100)

2.4mを測り、造成以前には東から西に向かって地形が低くなっていたようである。近世造成土より下は細砂～シルトの沖積層で、中世の遺構は海拔約1.9m付近で検出される。

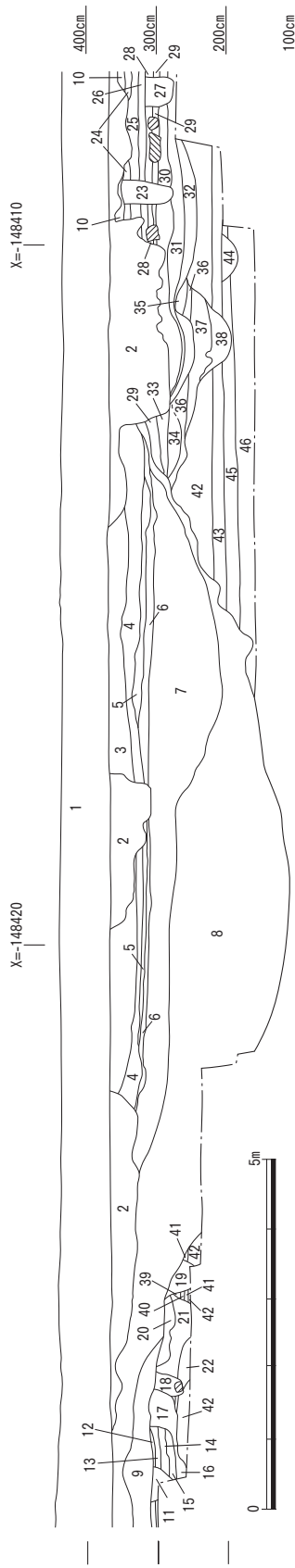
さて、第7図第3～9層に示されているとおり、調査地中央部の近世造成土は大きく削平されている。詳細は次節で述べるが、この削平は承応3（1654）年の洪水によるものと思われ、第9層がいわゆる洪水砂に対応すると考えられよう。また、調査区の東壁で確認された道路造成土上に堆積している砂層（第6図第6層）や西壁の第10層も洪水由来の砂層と思われる、平面的には確認することができなかったものの、海拔3.6m付近がその当時の生活面もしくは洪水による削平面となるかもしれない。

近世造成土には、いわゆる真砂土の純層もしくは真砂土が多く含まれる層が複数認められる（第7図第25・26・29・30層など）。これら真砂土層は、第26層に覆われた柱穴や第30層上面で礎石と想定される石が据えられていること、さらに遺構が重層的に検出されたことから、各層の上面が生活面であったと想定される。しかしながら、洪水によって広範囲が削平されていることや、遺構が重なり合っていることから、各造成土の面的な広がりを確認することが困難であった。そのため、洪水砂や各真砂土層上面の海拔を参考にして近世をI～IV期の4時期に分け、遺構の検出海拔高を基準としながら、遺構の重複・先後関係や、共伴遺物の年代を加味して、検出遺構を各期に帰属させた。

ちなみに各期のおおまかな年代観は、I期が16世紀後半～16世紀末まで、II期が17世紀前葉まで、III期が17世紀中葉まで、IV期が幕末までである。



第6図 調査区東壁 (1/100)



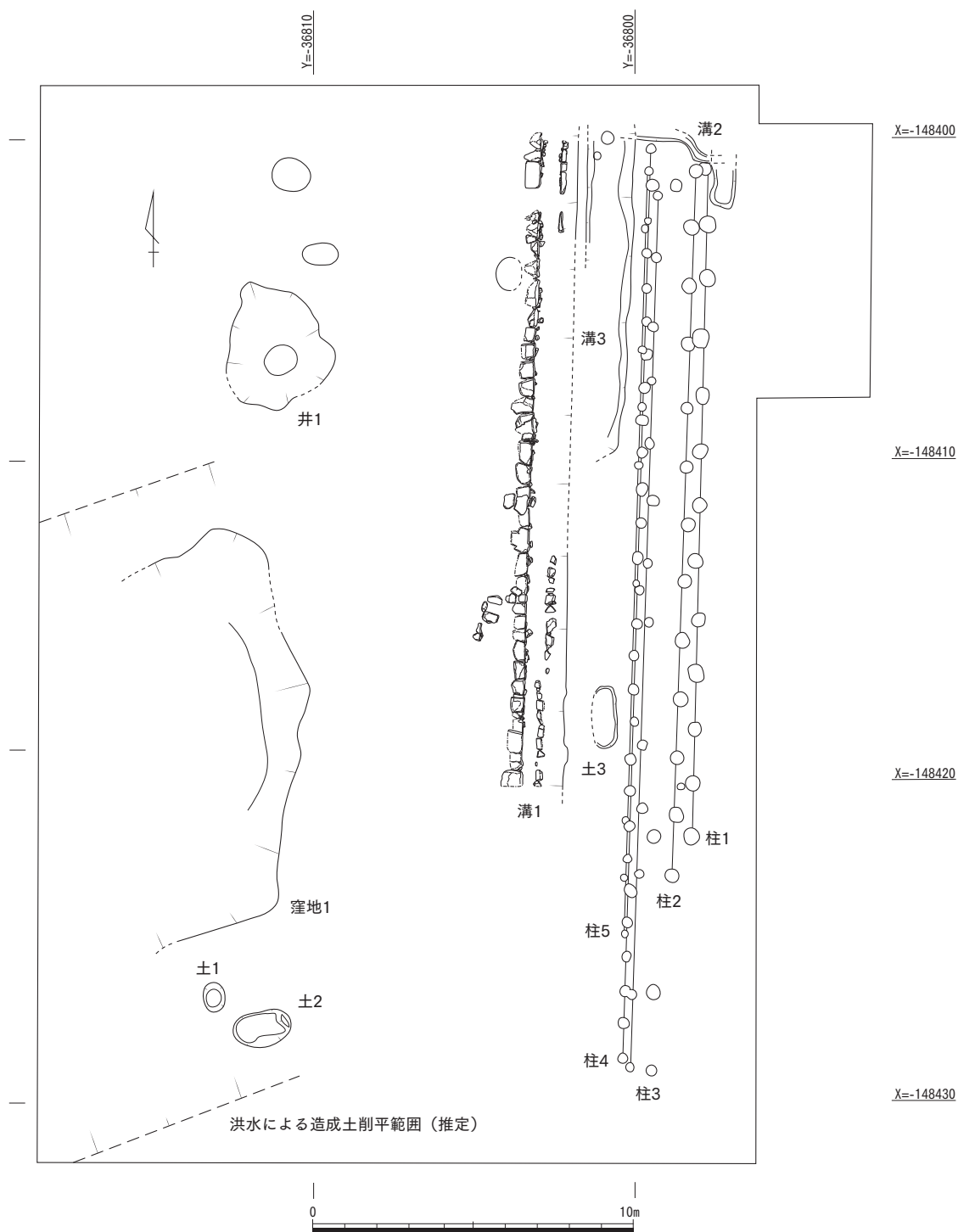
- | | | | | | |
|----|---|----|--|----|---|
| 1 | バラスト | 16 | 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘性粗～細砂…遺構埋土 | 33 | 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘性粗砂 |
| 2 | 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘性粗～細砂 レンガ含む | 17 | 灰色 (5Y4/1) 粘性粗砂…遺構埋土 | 34 | オリーブ黒色 (5Y2/2) 粘性粗～細砂 (下部に薄い有機物層) …溝15埋土 |
| 3 | にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性小礫～粗砂 (真砂土混じり) | 18 | 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘性細砂…遺構埋土 | 35 | オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 粗砂～小礫 (グラライ化した真砂土) …溝15埋土 |
| 4 | 黒褐色 (10YR3/2) 粘性小礫～粗砂 (真砂土混じり) | 19 | オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘性粗砂…遺構埋土 | 36 | オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘性粗砂…溝15埋土 |
| 5 | 黒褐色 (10YR2/2) 粘性細砂 (砂々細かい木片がラミアナ状に堆積) | 20 | 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘性粗砂…遺構埋土 | 37 | オリーブ灰色 (10Y5/2) 粗砂～小礫 (グラライ化した真砂土) …溝15埋土 |
| 6 | 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘性粗～細砂 | 21 | 灰色 (5Y4/1) 粘性細～粗砂…遺構埋土 | 38 | オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト…溝15埋土 |
| 7 | 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト～粘土
(上面に薄い有機物層、小礫や川砂層がラミアナ状に堆積) | 22 | 灰色 (7.5Y5/1) 粘性細砂…遺構埋土 | 39 | にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粗砂～小礫 (真砂土)
…整地土か、26か29層と対応するか |
| 8 | 黒褐色 (2.5Y3/1) シルトなどのブロック土が認められる) | 23 | 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘性粗砂…遺構埋土 | 40 | 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト～粘性細砂 |
| 9 | 褐色 (10YR4/6) 粗～細砂～微砂…洪水砂 | 24 | 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性細砂 | 41 | オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 粘性粗砂～小礫 (真砂土)
…整地土か、30層と対応するか |
| 10 | 褐色 (10YR4/6) 細砂～微砂…洪水砂に近似 | 25 | 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/2) 粘性粗砂～小礫 (真砂土混じり) …整地土か | 42 | 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト |
| 11 | オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 粘性細砂…遺構埋土 | 26 | オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘性粗砂～小礫 (真砂土混じり) …整地土か | 43 | 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト |
| 12 | 真砂土…遺構埋土 | 27 | オリーブ黒色 (5Y4/2) シルト～粘性細砂 | 44 | オリーブ黒色 (5Y3/1) シルト…溝17埋土 |
| 13 | 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土…遺構埋土 | 28 | 灰黄褐色 (2.5Y4/2) シルト～粘性細砂 | 45 | オリーブ黒色 (7.5Y3/1) シルト |
| 14 | 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘性粗砂…遺構埋土 | 29 | 黄褐色 (2.5Y5/4) 粗砂～小礫 (真砂土) …整地土か | 46 | 灰色 (10Y4/1) シルト |
| 15 | 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘性細砂…遺構埋土 | 30 | 緑灰色 (7.5GY5/1) 粗砂～小礫 (グラライ化した真砂土) …整地土か | | |
| | | 31 | 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘性粗～細砂 (細かい木片や板材を含む) …土坑25埋土 | | |
| | | 32 | 細かい木片堆積層…土坑25埋土 | | |

第7図 調査区西壁 (1/100)

第2節 近世の遺構・遺物

1 近世IV期の遺構

近世IV期は近・現代造成土除去後に検出された遺構を主体とし、調査地東部では道路造成土を掘り込む柱穴列や土坑など、西部では海拔約3.6m前後で検出された井戸などがある。なお、中央部には、



第8図 近世IV期遺構配置図 (1/200)

洪水によって大規模に削平された痕跡が認められる。

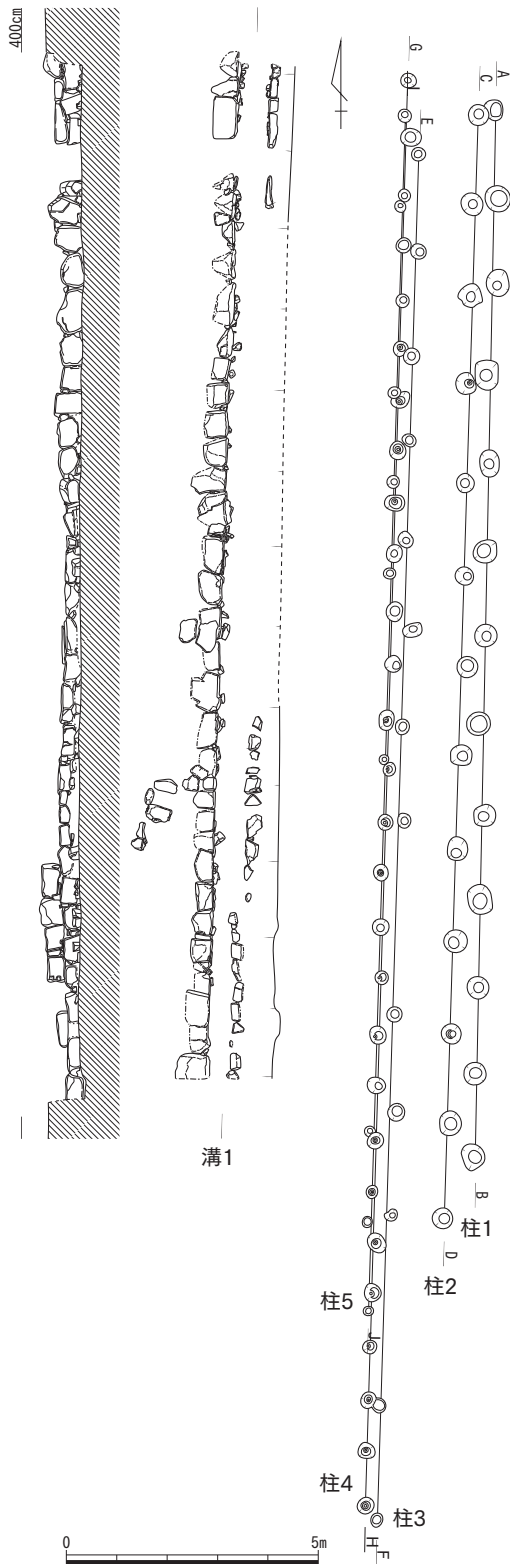
柱穴列（第8～10図、巻頭図版1、図版1）

調査区の東部に位置し、道路造成土を掘り込む柱穴列1～5は、いずれもN-2°-E前後の方向を指向している。柱穴列1・2の南端は、攪乱により検出出来なかったものの、柱穴列3～5と同様に調査地を南北に貫いていると思われる。

東端の柱穴列1は、検出長21.24mを測る。各柱穴の規模は径40～60cm、深さは一部浅いものも認められるが40～60cmを測る。柱間距離は168～182cmとほぼ一定している。柱穴列1の西側に隣接する柱穴列2は、検出長22.30mである。各柱穴の径及び深さは柱穴列1とほぼ差異がないが、柱間が172～200cmとやや広い。検出長27.40mを測る柱穴列3は、いくつか検出できなかった柱穴があるが14間であったと想定され、その場合の柱間距離は170～225cmである。柱穴の深さ及び径は30cm前後であり、柱穴列1・2と比べて小さくかつ浅い。柱穴列4と5は、ほぼ同位置に所在するものの、先後関係が判然としない。検出長28.62mで27間の柱穴列4は、各柱穴の径が30cm前後、深さが50～80cmである。柱穴底面には、径10cm前後の柱材の痕跡が認められるものが多い。柱間距離は94～114cmであり、柱穴列1～5のなかで一番短い。柱穴列1～5の西端に位置する柱穴列5は検出長23.94mで、推定12間と思われる。柱間距離は180～182cmと一定している。各柱穴の径は25cm前後、深さは30cm以下であり、柱穴列1～5のなかで一番小さい。

井戸（第8・11図）

調査区西部北側に位置している素掘りの井戸1は、長さ400cm、幅330cmを測る。安全上、検出面から約160cmまでしか掘り下げておらず、井戸底は確認していない。掘り方のほぼ中央に径約70cmを測る曲物の井筒が設置され、その中から肥前磁器の碗22・25、肥前陶器の椀、備前焼の徳利、土師器の皿81～83、鉄製の火箸M8などが出土している。土師器皿は図示した以外に少なくとも15点以上出土し、すべて灰白色の胎土で、糸切り痕と板目が底部に観察される。皿の口縁部に、煤及び油煙の痕跡が認められるものが少ない。

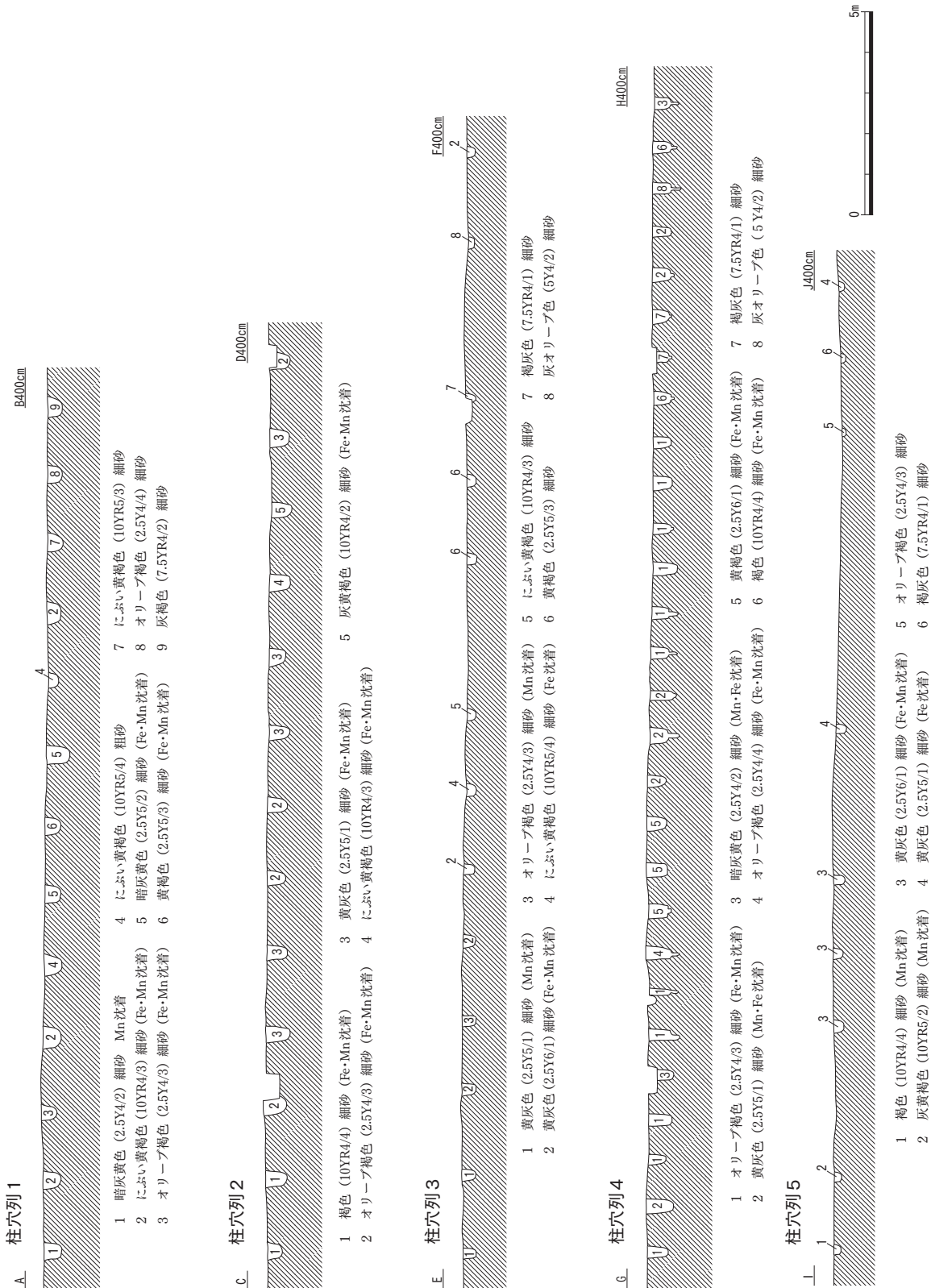


第9図 溝1・柱穴列1～5 (1/150)

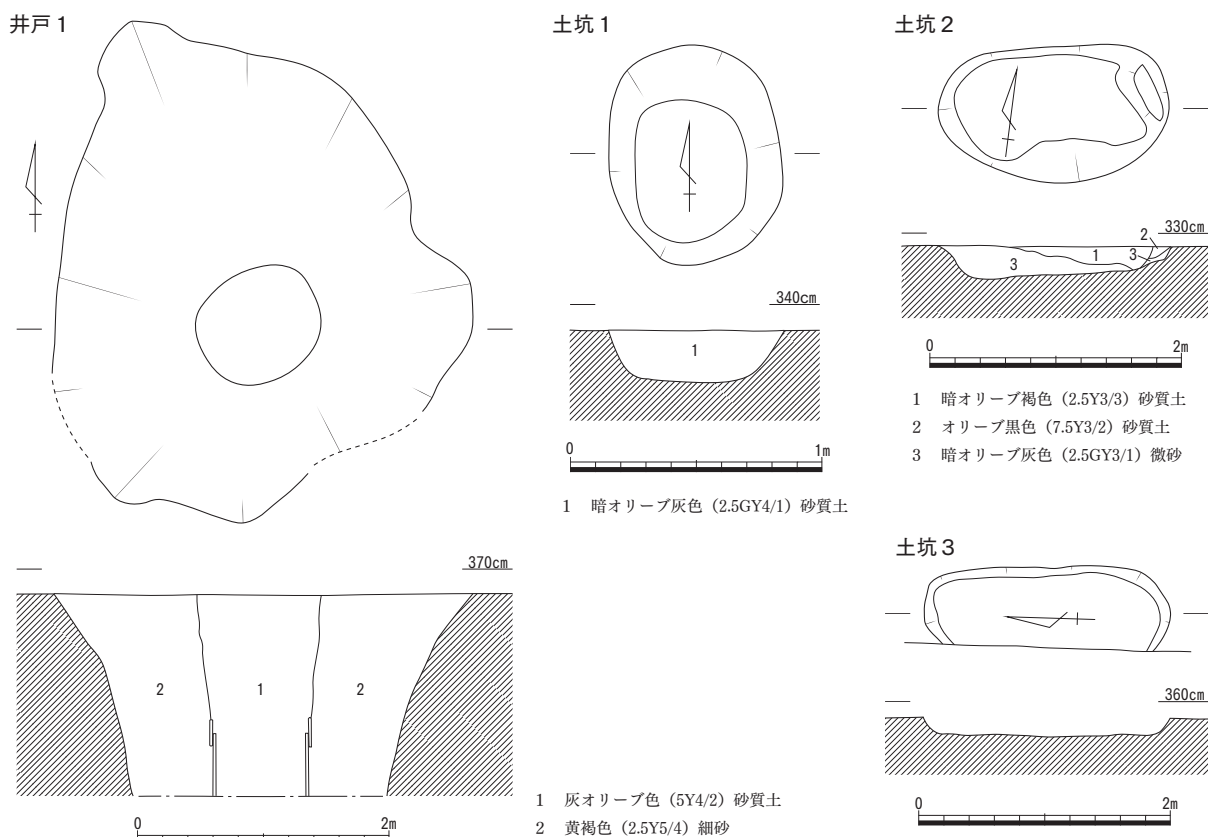
土坑（第8・11図）

平面楕円形の土坑1は、調査区西部南側に位置する。長さ86cm、幅67cm、深さ21cmを測り、肥前陶器の溝縁皿・小杯、備前焼の壺・鉢、軒丸瓦、軒平瓦、棟込瓦R20などが出土している。

土坑1の南西約50cmに位置する土坑2は、平面長楕円形を呈し、長さ184cm、幅108cm、深さ



第10図 柱穴列 1～5 (1/150)



第11図 井戸 1・土坑 1～3 (1/30・1/60)

26cmの規模を測る。出土遺物には、色絵が剥落した肥前磁器の色絵碗19、白磁小杯16・18、染付碗23・24、肥前陶器の呉器手椀、灰白色の胎土で口縁に煤痕が認められる土師器の皿・焙烙86・88・89、銅の板材M21、砥石S7、円板形土製品C10などがある。

道路造成土を掘り込む土坑3は、調査区の中央に位置する。長さ195cm、幅68cm、深さ13cmの長楕円形を呈し、肥前陶器の大皿39が出土している。

溝 (第5・8図、図版1・2)

溝1は調査区中央東寄りで検出され、調査区を南北に貫いている。溝の最大幅は約120cm、底面は最深部で海拔約2.8mを測る。当初は道路遺構の西側溝として掘削されたものの、道路廃絶後は単体の溝として幕末まで機能していたようで、幾度か掘り直しや改修等が行われている。西壁は、天端の海拔が約3.6mを測る2段の石積みによって補強されている。一方東壁には、溝底に石列が認められるものの、この石列は石積みの基底石であったとは考えにくい。出土遺物は、肥前磁器の碗・皿、肥前青磁の水差、肥前陶器の椀・皿、志野焼の椀33、備前焼の壺・鉢47、土師器の皿・焙烙、瓦質土器の火鉢、軒丸瓦R7、軒平瓦R12、棟込瓦R22、下駄W31、鉄製の鋸M9、銅銭M39・41などで、銅銭M39以外は17世紀代に比定されるものが多い。

調査区東部北端に位置し、東西に流走している溝2は、道路造成土を掘り込んでいる。南肩部のみの検出であるため、規模等は不明である。埋土(第6図第17層)の下半から瓦が多く出土した。

溝1の東側に位置し、南北に流走する溝3は、幅152cm、深さ56cmを測る。底面付近から、景德鎮の皿11、漳州窯の碗3、肥前磁器の碗、肥前陶器の皿34・大皿、瀬戸・美濃焼の天目椀・皿37、備前焼の鉢47、不明部材W18、銅製の柄M3、鉄釘、銅銭M44、土製品の人形C12などが出土し、特に軒

丸瓦R6・8・10、軒平瓦R14~17・19、丸瓦、平瓦などの瓦類が多く認められた。なお溝としているものの、道路造成土を削平し、埋土も洪水砂に近似した微砂~シルト（第6図第19層）であるため、洪水時の流路であったかもしれない。

窪地1及び洪水による削平地（第7・8図、図版11）

承応3（1654）年の洪水により、近世造成土が幅20m以上にわたり削平された痕跡で、その深さは調査区西部中央部では海拔約3.0~3.1m、調査区西端中央部ではさらに一段深く削平されており、その底面の海拔高は約1.1mを測る。第8図に図示した約5.8m×2.9mの窪地1の肩部は、海拔約3.0m付近で確認されたものである。この窪地1は粘土ブロックを含む土（第7図第7・8層）で海拔約3.2m付近まで一気に埋められたが、その後しばらく開放状態であったようで、その時に第7図第5・6層が堆積したと思われる。この堆積後、真砂土を含む土で埋め立てられている。ちなみにこの第5・6層は窪地1周辺のみならず、後述する礎石列1付近まで存在し、そこからは木製の蓋W22以外にも漆椀や板材の破片などの木製品が多く出土している。窪地1から出土した遺物には、景德鎮の小皿8、渦文や矢羽根文が描かれた肥前磁器の碗、肥前陶器の刷毛目椀・呉器手椀32・大皿38、瀬戸・美濃焼の皿、志野焼の向付、備前焼の壺・すり鉢、土師器の皿、瓦質土器の火鉢92、軒丸瓦、軒平瓦R18、棟込瓦R21、鉄釘M18、銅銭M47・49、銅塊M32、砥石S8などがある。

2 近世III期の遺構

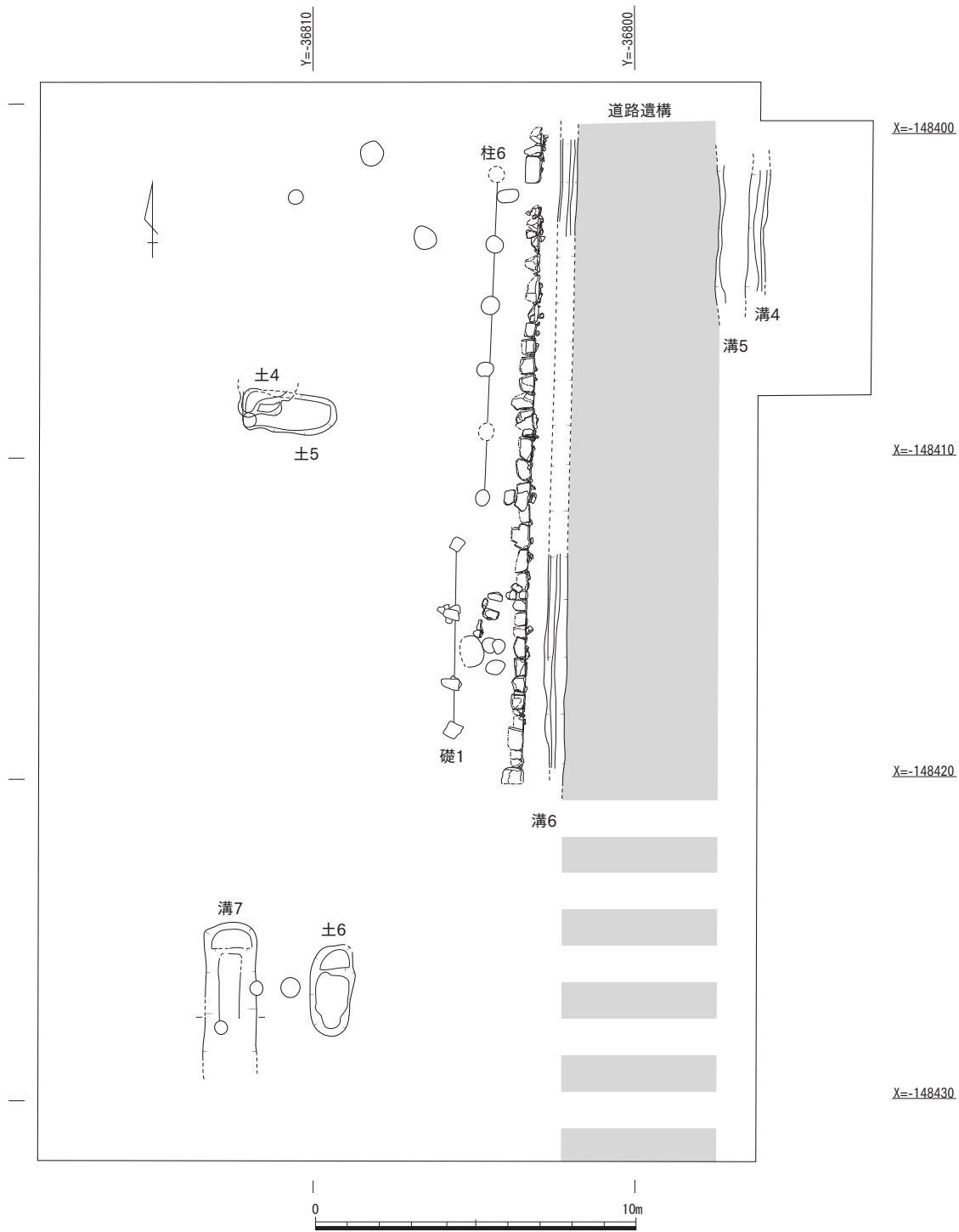
近世III期は、海拔3.5mから道路造成土最下層と想定している第6図第15層下面の海拔（約3.2m）までに検出された遺構を主体とする。調査区西部からは屋敷地に伴う遺構が、東部からは南北に延びる道路遺構が検出された。しかし先述のとおり、西部は洪水により大きく削平されている。

道路及び道路側溝（第5・6・12図、巻頭図版1、図版1・2）

調査区東部を南北に貫く道路で、その幅は最大5.2mを測る。第6図第6~15層（第10・11層除く）が道路造成土と思われ、各層とも非常に固く締まった真砂土と砂の互層からなる。道路機能面はこれらの層の上面のいずれかであったと思われるが、確定できない。ただし、第12層を切っている第10層の存在などから、第12層上面付近が機能面であった可能性を指摘できる。道路の東西両側には側溝として溝1・4~6が伴っているが、それらの対応関係は判然としない。溝1は先述したとおり西壁に石積みを築いた溝で、下層から17世紀前半の遺物が出土している。N-3°-Eの方向を指向している東端の溝4は、幅約50cm、底面海拔高約2.6mを測る。出土遺物には、内面に同心円の当て具痕を残す肥前陶器の鉢もしくは甕片、土師器の皿、土錘C7などがある。溝4に切られる溝5は、東肩部が攪乱により失われている。底面海拔高は溝4より高く、約3.1mを測る。遺物は、肥前磁器の碗、肥前陶器の溝縁皿、志野焼の破片、土師器の皿、唐草3転の軒平瓦、珠文が12個巡る三巴文の軒丸瓦などがある。溝6は、溝1東壁の石列を除去後に検出されたもので、その幅50cm、底面海拔高約2.6mを測り、溝4とほぼ同規模で同じ深さである。遺物は、肥前磁器の小杯・碗、土師器の皿、瓦質土器の火鉢、軒丸瓦、軒平瓦、碁石S1などが出土している。

礎石列（第12・13図、図版2）

調査区中央に位置している3間の礎石列1は、検出長約630cm、礎石間距離150cm~220cmを測る。50cm大の扁平な石を1もしくは2段積み重ねており、石の上面は海拔約3.3m、底面は海拔3.0m前後である。第7図第5・6層を掘り下げ中に検出されたもので、礎石列としているものの、洪水によっ

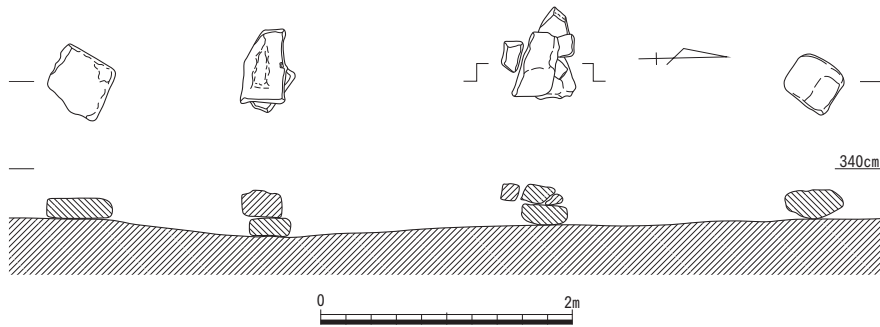


第12図 近世Ⅲ期遺構配置図 (1/200)

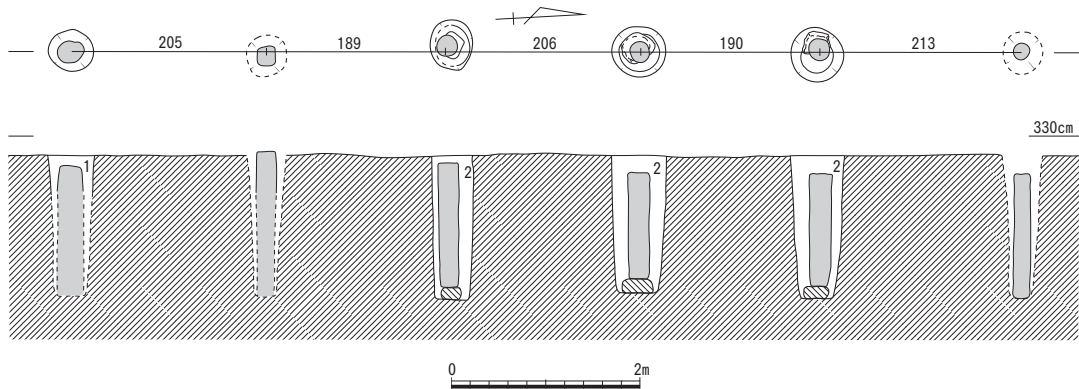
て柱穴掘り方が削平された柱穴底の根石の可能性も考えられる。なお、北端の石の下から寛永通宝が出土した。

柱穴列 (第12・14図)

柱穴列6は、N-2°-Eを指向し、道路とほぼ平行する。調査区北側のみで検出された。柱穴は径約60cmの円形で、検出面から150cm以上の深さを測る柱穴底面の海拔高は約1.5mである。径25cm前後の丸太の柱材が残存し、これらの中には柱穴底面に置かれた30~40cm大の扁平な河原石の上に据えられているものもある。柱間距離は189~213cmである。



第13図 礎石列1 (1/60)



1 オリーブ黒色 (5Y3/2) 粗砂 2 オリーブ黒色 (5Y3/1) シルト

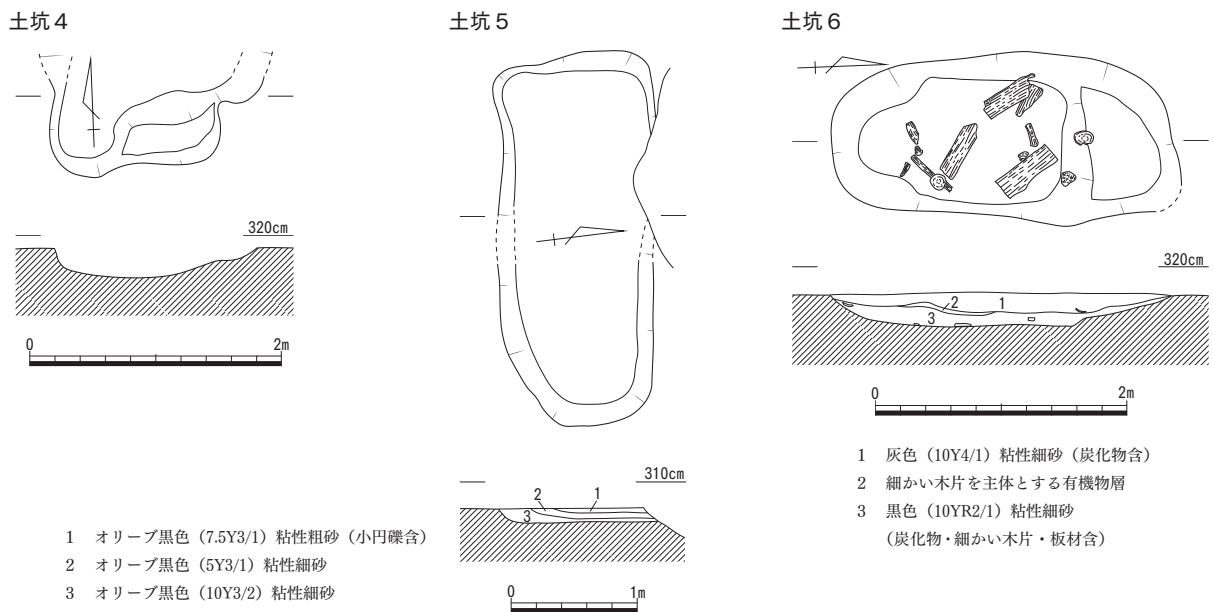
■ 柱材

第14図 柱穴列6 (1/80)

土坑 (第12・15図、図版3)

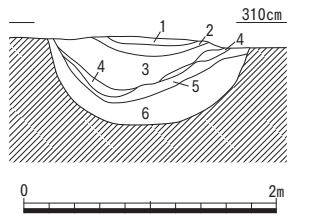
北半を井戸1により削平されている土坑4は調査区の北部に所在し、その規模は検出長171cm、幅96cm、深さ23cmを測る。肥前陶器の椀や小皿、備前焼の小壺、土師器の皿などが出土している。

土坑4とほぼ重なって検出された土坑5は、長さ298cm、幅124cmを測る平面隅丸長方形を呈している。底面の海拔高は2.70mである。景德鎮の碗、漳州窯の皿、肥前陶器の椀、備前焼の小壺、土師



第15図 土坑4～6 (1/60)

第3章 発掘調査の成果



- 1 灰オリーブ色 (5Y5/2) 細砂
- 2 オリーブ黒色 (5Y3/1) 細砂 (炭混じり)
- 3 黄灰色 (2.5Y4/1) 細砂とシルトの互層
- 4 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト
- 5 灰色 (5Y4/1) 細砂とシルトの互層
- 6 細かい木片堆積層

第16図 溝7 (1/60)

器の皿、鉄釘M17などが出土している。

溝7の約1.5m東側に位置する土坑6は、長さ270cm、幅133cmの長楕円形を呈し、検出面からの深さ28cmを測る。埋土には炭化物、板材、細かい木片を主体とする有機物が多く含まれている。遺物は肥前磁器の碗21・皿・香炉28、肥前陶器の椀・皿36・大皿、備前焼の大皿・すり鉢、土師器の皿77・79・80・焙烙・焼塩壺、鉄釘、砥石S5、箸や板材などの木製品、動物遺存体などが出土している。

溝 (第12・16図、図版3)

調査区西部南端で検出した溝7は、N-1°-Eの方向を指向している。規模は幅160cm、深さ70cmで、断面椀形を呈する溝底には、厚さ20cm以上の細かい木片堆積層が認められる。またこの堆積層より上層も細砂とシルトの互層堆積であり、滞水していた期間が長かったことを窺わせる。出土遺物には、景德鎮の小杯1・碗・皿14、肥前磁器の小杯17・碗20・26・27、肥前陶器の椀30・皿35・大皿40、瀬戸・美濃焼の天目椀、備前焼の小壺・大皿・すり鉢50、土師器の皿70~76・78・焙烙87、軒平瓦R13、漆椀W4・9・15、下駄W32・33、刷毛W28、不明木製品W24、蓋栓W25、砧W26、箸、小柄M1、鉄釘M13・14・16、銅銭M42・45・48、砥石S6、動物遺存体などがある。

3 近世II期の遺構

近世II期は、土坑15が切り込んでいる真砂土層 (第6図第21層) や西壁で確認された礎石と思われる石が置かれている真砂土層 (第7図第30層) の上面に相当する高さ (海拔3.0~3.1m) で検出された遺構を主体とする。

石列 (第17・18図、図版4)

調査区中央やや南寄りに位置している石列1は、北側に面を設けて東西に並んでいるもので、掘り方を伴わず真砂土上面に据えられている。おそらくさらに西側へ続いていたと思われるが、洪水による削平により消失している。この石列は、その背後に少なくとも海拔3.1m付近まで盛り土を行っており、土留めの役割を持っていたのであろう。

柱穴列 (第17・19図)

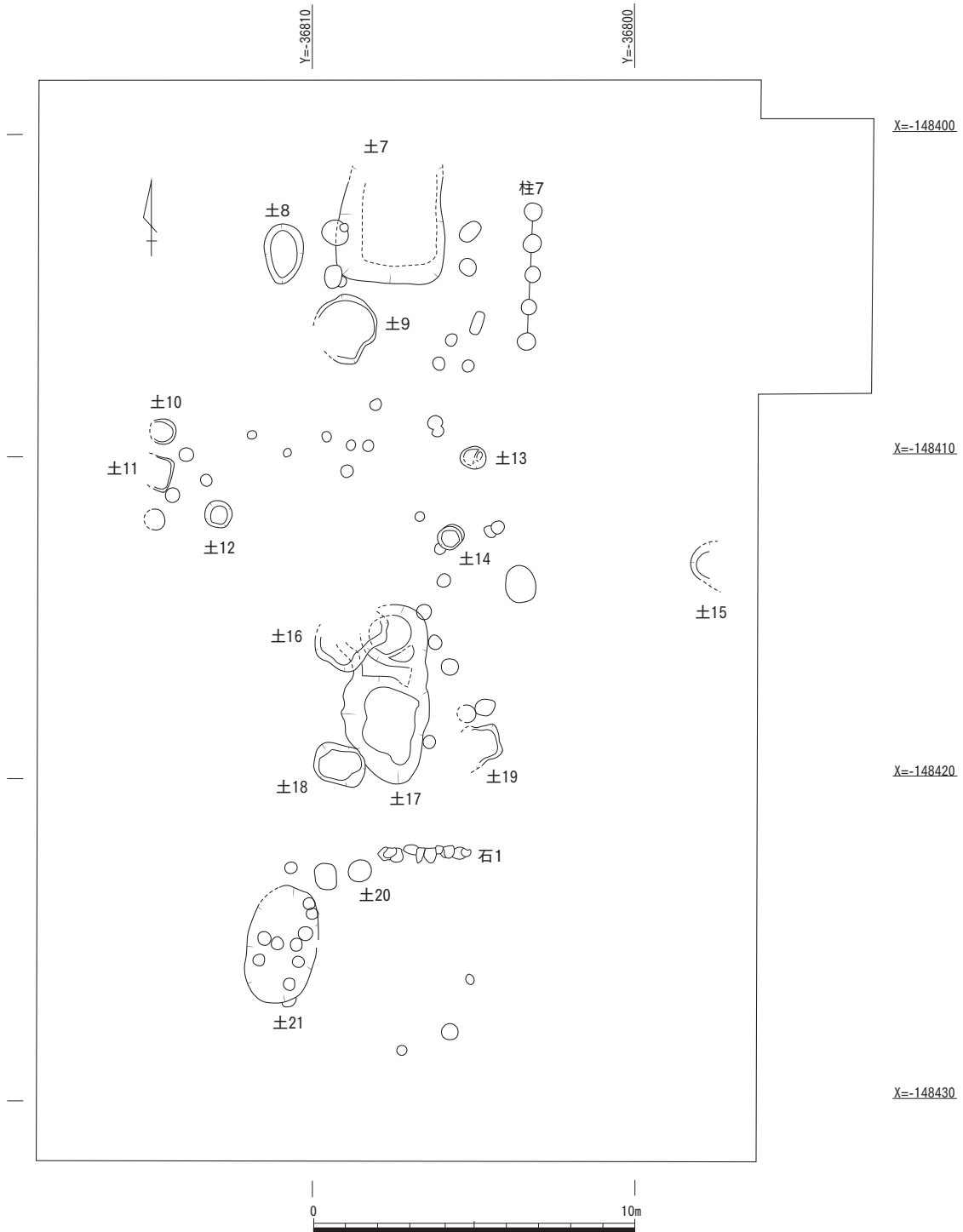
調査区北部中央に位置している柱穴列7は、N-2°-Eを指向している。溝1西壁石積みを取り除いた後検出されたもので、近世III期の屋敷地に伴う可能性もあるが、判然としない。各柱穴は、径約50cmの円形を呈する。調査工程上、柱穴列として確認出来たのは4間分のみであるが、土坑14の南東約2mに位置する大形の柱穴などもこの柱穴列を構成する柱穴と考えられ、おそらく石積みの下には調査区を南北に貫く柱穴列が存在していたと思われる。柱材が抜き取られた後、真砂土で埋め戻されている。

土坑 (第17・20~22図、図版4・5)

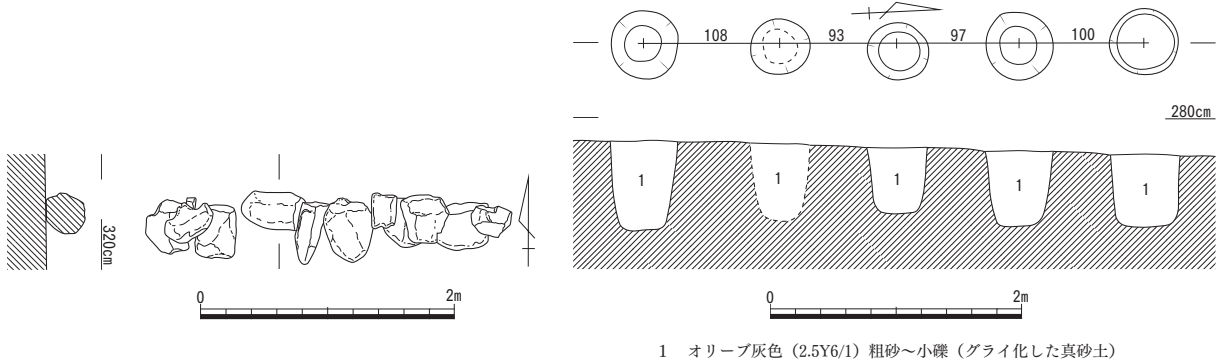
土坑7は、柱穴列7の西約2mに位置している。北端が調査区外となるため平面形は不明であるが、その規模は、長さ364cm、幅332cm、検出面からの深さ70cmを測る。土坑は、底面上に堆積した砂層の上に細かい木片等が10~15cm程度認められる。遺物は、京都系陶器の椀、志野焼の向付、備前焼のすり鉢、土師器の皿、軒丸瓦R1・2、軒平瓦R11、小柄M2、漆椀などが出土している。

土坑8は、調査区北部に位置している。長さ183cm、幅116cmの長楕円形を呈し、検出面からの深さ33cmを測る。掲載遺物は、漳州窯の大皿15、肥前陶器の小杯29、土師器の皿60～68・焼塩壺85・焼塩壺蓋84、軒丸瓦R9であり、その他に、漆継ぎが見られる景德鎮の小杯、京都産と想定される軟質施釉陶器の皿、肥前陶器の壺、志野焼の皿などが出土している。なお、土師器の皿は、底部糸切りで一部に板目が観察される黄橙色の胎土のものが17点以上認められた。

井戸1により西側が削平されている土坑9は、土坑7の約1m南に位置する。平面は円形であった



第17図 近世Ⅱ期遺構配置図(1/200)



第18図 石列1 (1/60)

第19図 柱穴列7 (1/60)

と思われ、その規模は長さ215cm、残存幅195cmを測る。遺物は出土していない。

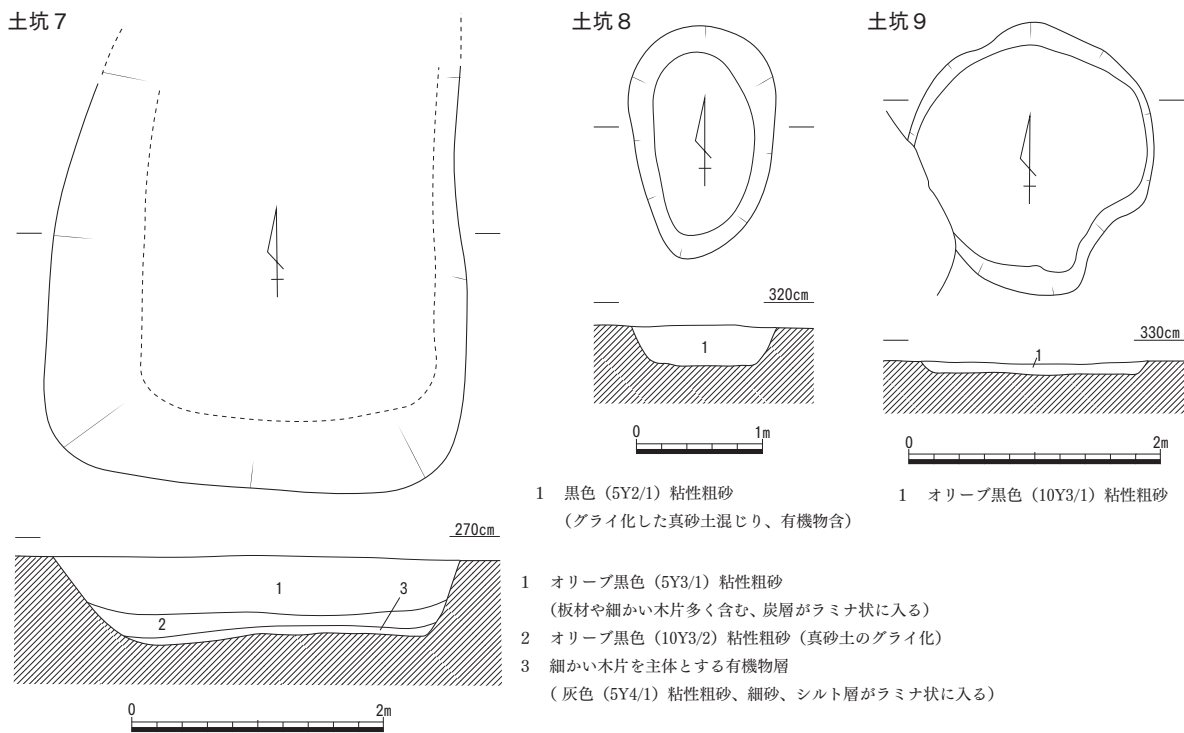
土坑10は、調査区西端やや北側に位置する。西側が側溝により消失しているが、径75cm前後の平面円形を呈すると思われる。出土遺物には、景德鎮の碗、肥前陶器の椀、瀬戸・美濃焼の皿、土師器の皿などがある。

土坑10から約50cm南に位置する土坑11は、側溝によって西辺を削平されているが平面方形を呈していたと想定され、その規模は長さ105cm、残存幅65cmである。漳州窯の碗、中心飾三葉で3転唐草の瓦当をもつ軒平瓦、土師器の皿、基石S2が出土している。

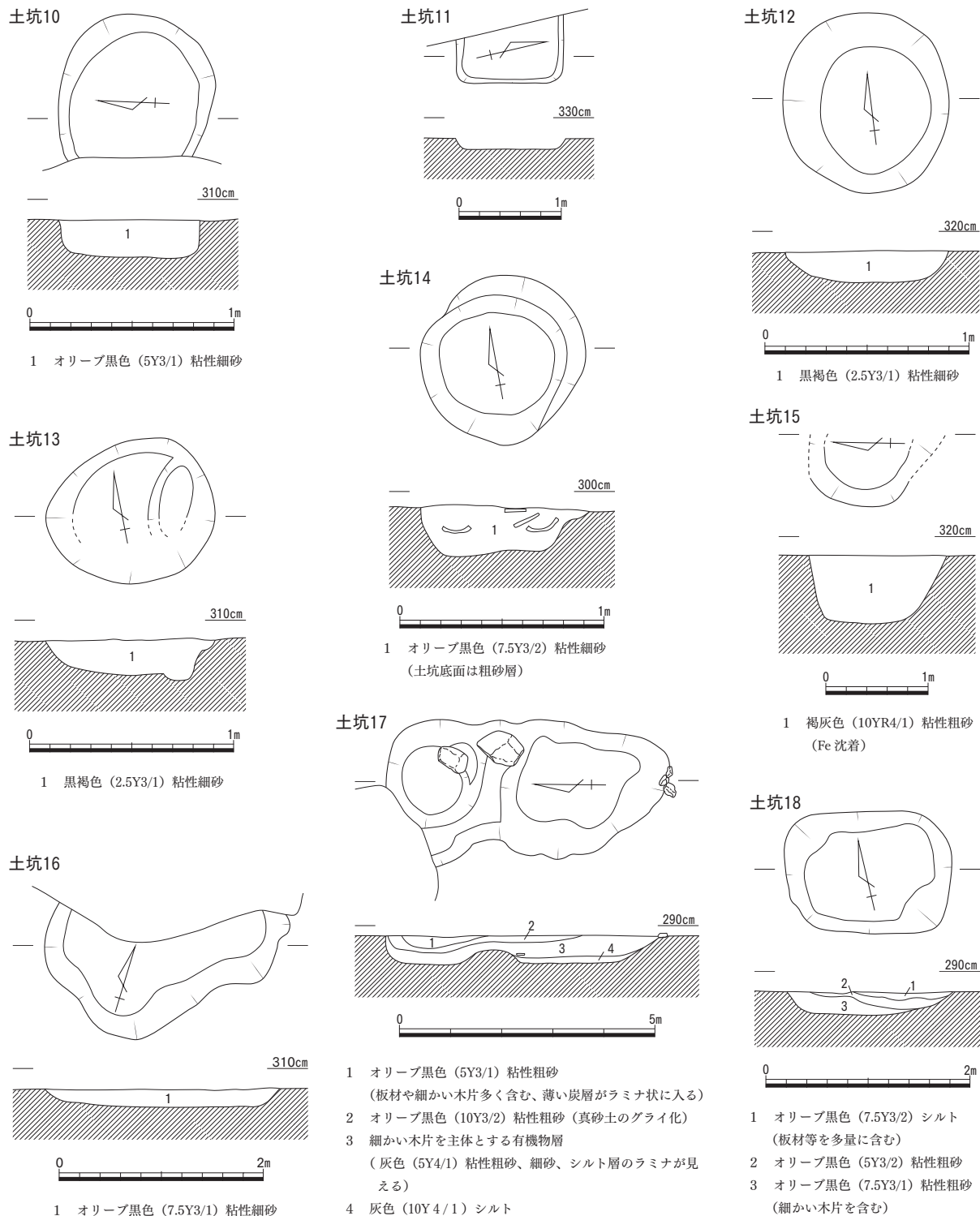
土坑12は、土坑11の南東約1.3mに所在する。平面円形で、その規模は長さ88cm、幅81cmを測る。土師器の細片が出土したのみである。

土坑9の南東約4mに位置する土坑13は、長さ83cm、幅70cmの楕円形を呈し、検出面からの深さ25cmを測る。土師器の皿などが出土している。

土坑13の南に位置する土坑14は、長さ83cm、幅81cmの円形を呈し、検出面からの深さ25cmを測る。



第20図 土坑7～9 (1/60)



第21図 土坑10~18 (1/30・1/60・1/120)

備前焼のすり鉢、土師器の皿、コビキB痕を残す軒丸瓦などが出土している。

土坑15は、調査区東端中央部に位置し、Ⅱ期の生活面であったと想定している厚い真砂土層（第6図第21層）を切っている。現状の規模は、長さ130cm、幅67cmを測る。軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦などが遺物箱20箱以上廃棄されていた。

第7図第5・6層除去後に検出された土坑16は、調査区中央に位置している。近・現代のゴミ穴により北半を失っているものの、残存値で長さ240cm、幅142cmの規模を測る。掲載した景德鎮の碗7、

小皿12、箸W19、折り畳まれた銅の板材M23以外には、肥前陶器の椀、土師器の皿、曲物、箸、板材などが出土した。土師器の皿には底部糸切りやへらおこし後ナデが施されたものもある。

土坑16に北西部を切られている土坑17は、土坑16と同様に第7図第5・6層除去後に検出された。不整形でやや長楕円形を呈するこの土坑の規模は、長さ552cm、幅287cm、検出面からの深さ56cmを測る。埋土の第1層は、第7図第5・6層の掘り残しの可能性がある。第3層の堆積状況から、この土坑は一定期間滞水状態であったようである。遺物は掲載した志野焼の向付42、軒丸瓦R5、鉄製の環状金具M4、鉄釘M15、漆椀W10~13・17、舟形木製品W29、土錘C2・5、円板形土製品C9以外に、景德鎮の碗・皿、瀬戸・美濃焼の小皿、備前焼の大皿・瓶・すり鉢、土師器の皿、木製品、埴塙などがある。また、動物遺存体も多く出土しており、特に貝はハマグリ70点以上、アカニシ2点、ハイガイ1点などが廃棄されていた。

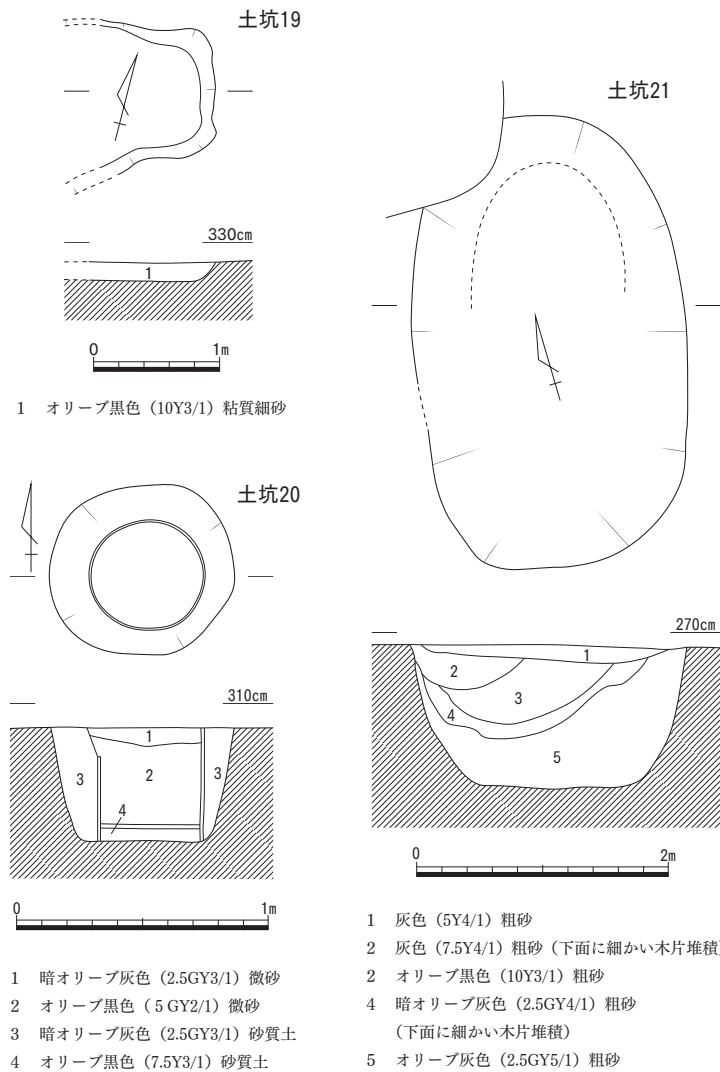
土坑18は、土坑17の南西に隣接する。長さ161cm、幅119cmの平面隅丸方形を呈する。土坑17と同様に第7図第5・6層除去後に検出され、埋土の第1層はその掘り残しかもしれない。動物遺存体のほか、肥前陶器の椀、備前焼の瓶、土師器の皿、鉄釘などが出土している。

1区と2区の境界に所在し、側溝により西半分が不明な土坑19は、方形もしくは長方形を呈

していたと思われる。遺物は、肥前陶器の椀31・皿、青織部焼の灯明具身43、備前焼の瓶・すり鉢、軒丸瓦R4、軒平瓦、土師器の皿などが出土している。

土坑20は、石列1の南西約50cmに位置している。長さ74cm、幅67cmの円形を呈する土坑内には、径40cmの桶が埋められ、その桶底には曲物の底板が残存していた。出土遺物はいずれも小片であるが、景德鎮の碗、土師器の皿、焼塩壺蓋、硯などがある。

土坑20の南西約1.5mに位置する土坑21は、長さ358cm、幅215cmの長楕円形を呈する。建物基礎により、掘り下げ可能な範囲が北半の一部に限られた。細かい木片を主体とする有機物の堆積から、ある期間滞水していたようである。肥前陶器の椀、備前焼のすり鉢、土師器の皿55・57~59・焙烙90、軒丸瓦R3、軒平瓦、漆椀、箸、金属滓、動物遺存体などが出土している。



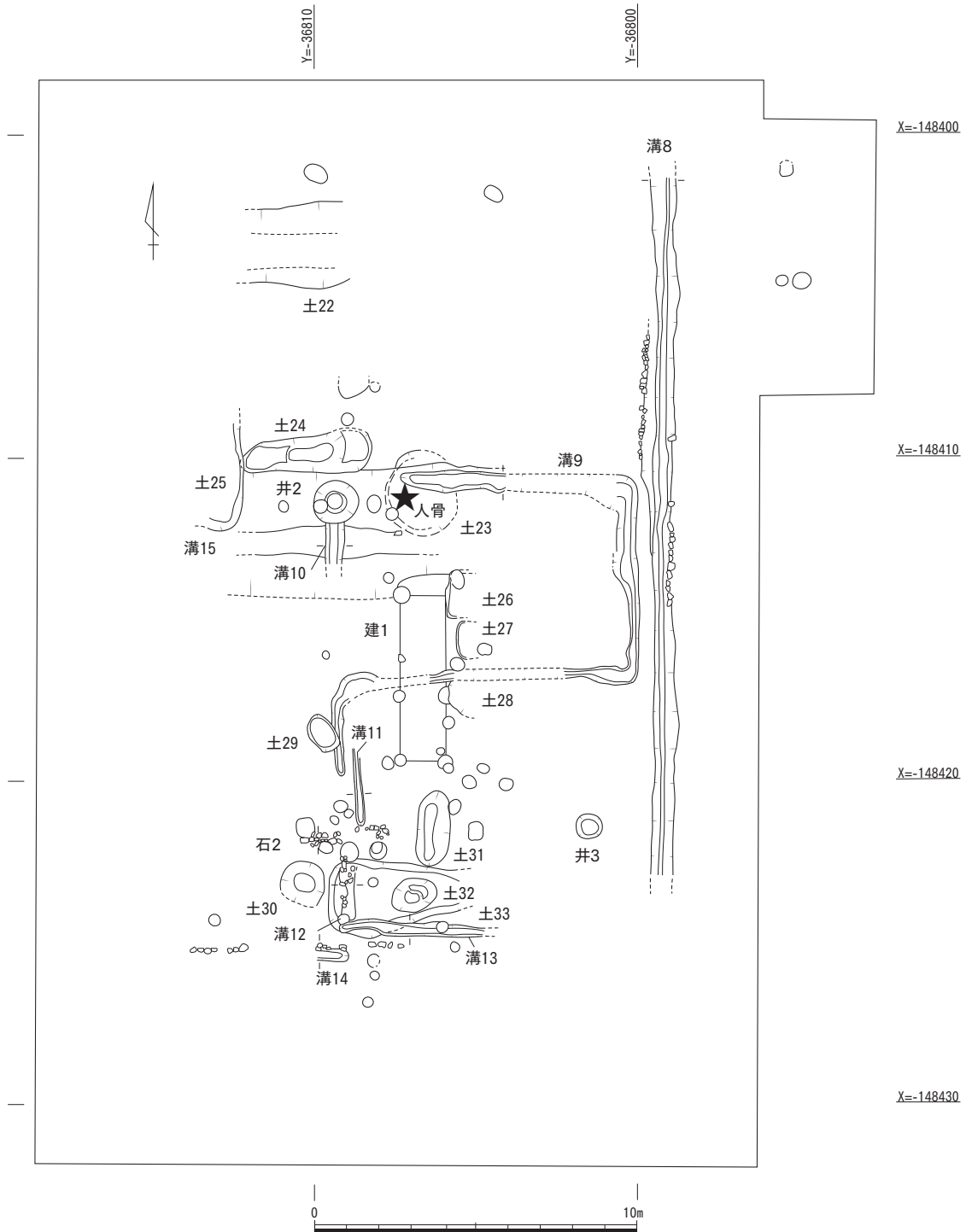
第22図 土坑19~21 (1/30・1/60)

4 近世I期の遺構

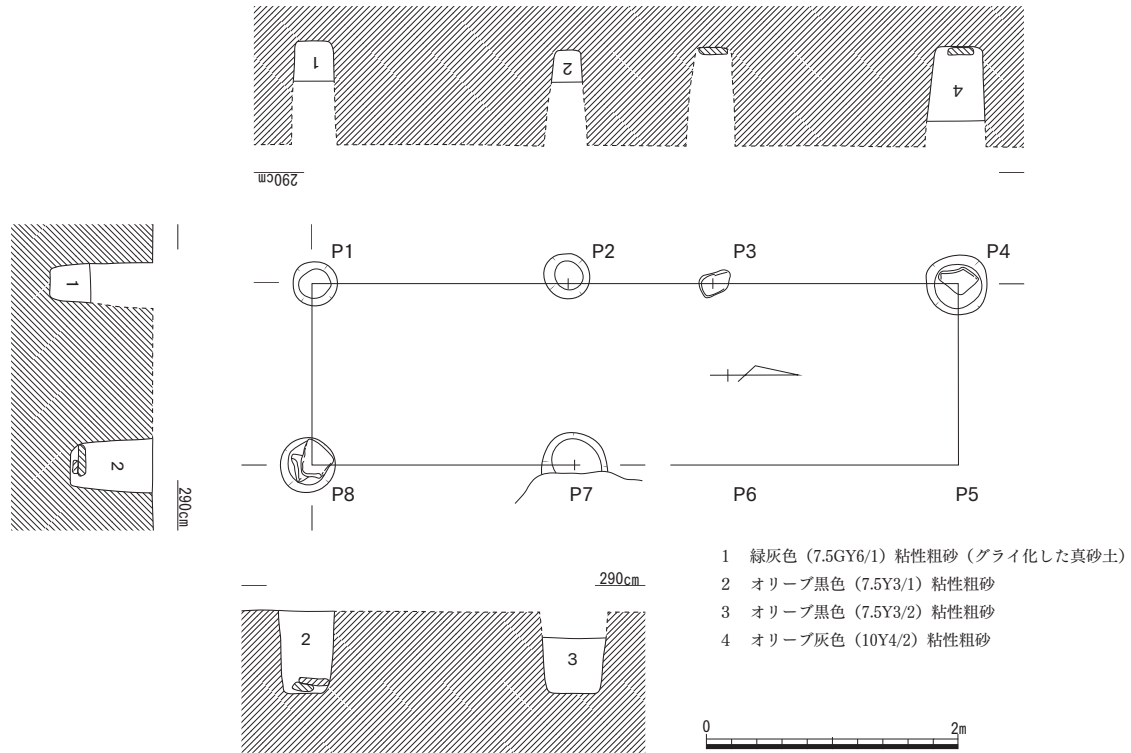
近世I期は、沖積層（第6図第26層や第7図第42層）上面及び第6図第21層と第7図第30層を除去後に検出される遺構（おおよそ海拔2.9m以下）を主体とする。遺構の重複・先後関係から、さらに時期を細分することも可能と思われる。

掘立柱建物（第23・24図）

土坑40完掘後確認された掘立柱建物1は、調査区中央に位置している。P5・6推定地には柱穴が



第23図 近世I期遺構配置図 (1/200)



第24図 掘立柱建物1 (1/60)

確認されなかったものの、規模は1×3間と思われ、その棟方向はN-1°-Wを示す。柱間距離は、桁行のP2-3間が115cm、P1-2間及びP3-4間が200cm前後、梁間のP1-8間が145cmを測る。柱穴は平面が径約40cmの円形で、底面海拔高が1.9m~2.0mと一定している。P3・4・8の柱穴底面には、20~30cm大の河原石が置かれている。

井戸 (第23・25図、図版5・6)

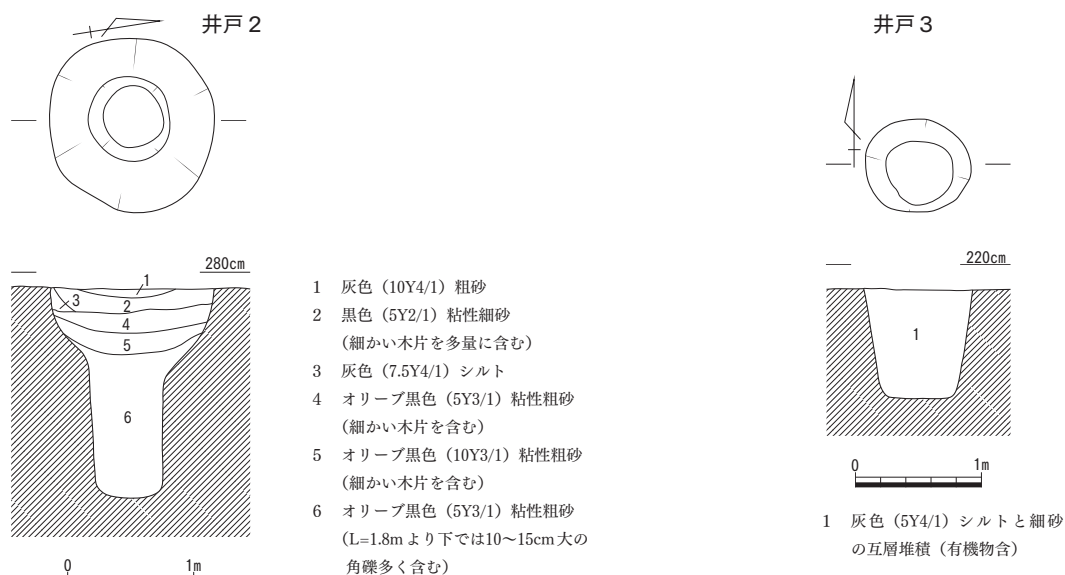
調査区西部中央やや北寄りで検出された井戸2は、平面円形を呈する。規模は、長さ140cm、幅130cmで、検出面からの深さ165cmを測る底面の海拔は1.02mである。この井戸は、第1~5層と第6層で埋土や遺物の出土状況が大きく異なっている。前者の埋土は細かい木片を含む水成堆積を示す土で、出土する遺物も景德鎮の碗2、漳州窯の碗、備前焼の大皿46・瓶、土師器の皿56、木製品の漆椀、箸、曲物、加工部材、砥石S9、銅製の鉢M7、銅の板材切れ端M27、埴塙93~97・101・102・107、羽口C14、貝杓子B3、不明土製品C15、動物遺存体など多様である。一方後者は、10~15cm大の角礫を投げ込みつつ埋め戻したような土で、遺物の出土も少ない。

井戸3は、調査区東部南半に位置する。平面は長さ83cm、幅74cmの円形で、底面海拔高は1.14mである。埋土には細砂のラミナが見られ、有機物も含んでいる。遺物は備前焼の鉢45、コビキAの丸瓦、木製品の漆椀、曲物W23、箸W20、鉄釘M19などが出土している。

土坑 (第23・26~29図、図版6・7)

調査区北端に位置する土坑22は、土坑7によって東端が切られている。長さが不明なものその規模は、幅262cm、深さ54cmを測る。海拔高1.94mを測る底面には、板材や細かい木片からなる堆積層が認められる。遺物は土師器の皿54、木製品、動物遺存体などが出土している。

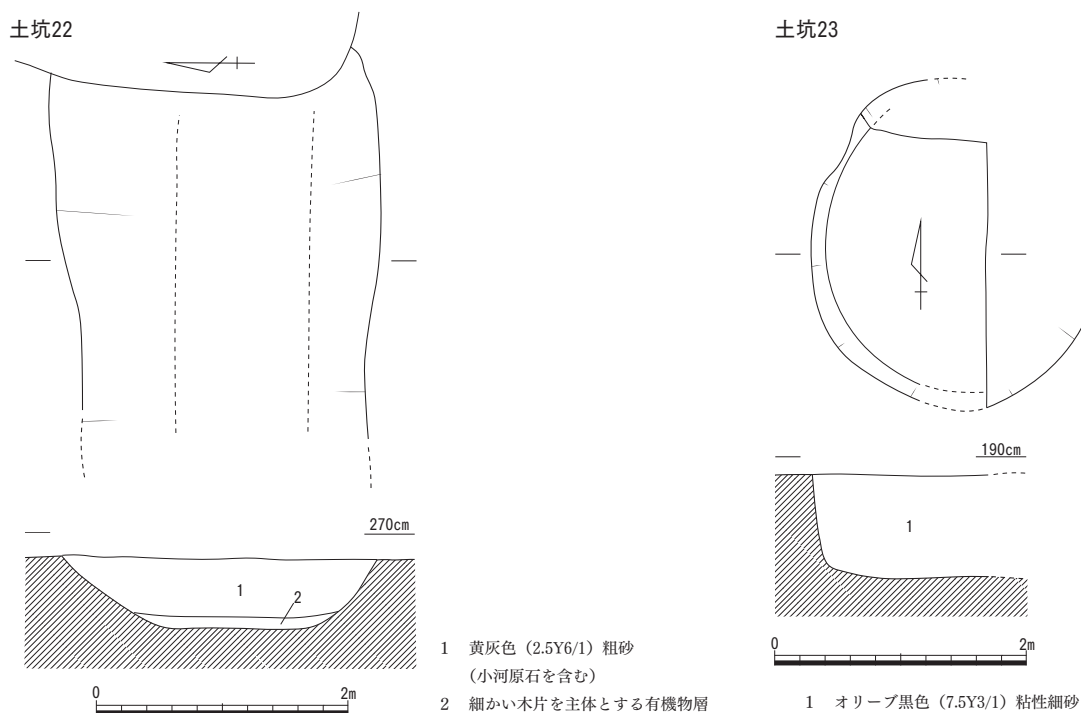
土坑23は、土坑22の南東約6mに位置し、溝9・15完掘後にその掘り方が現れた。壁面は、海拔



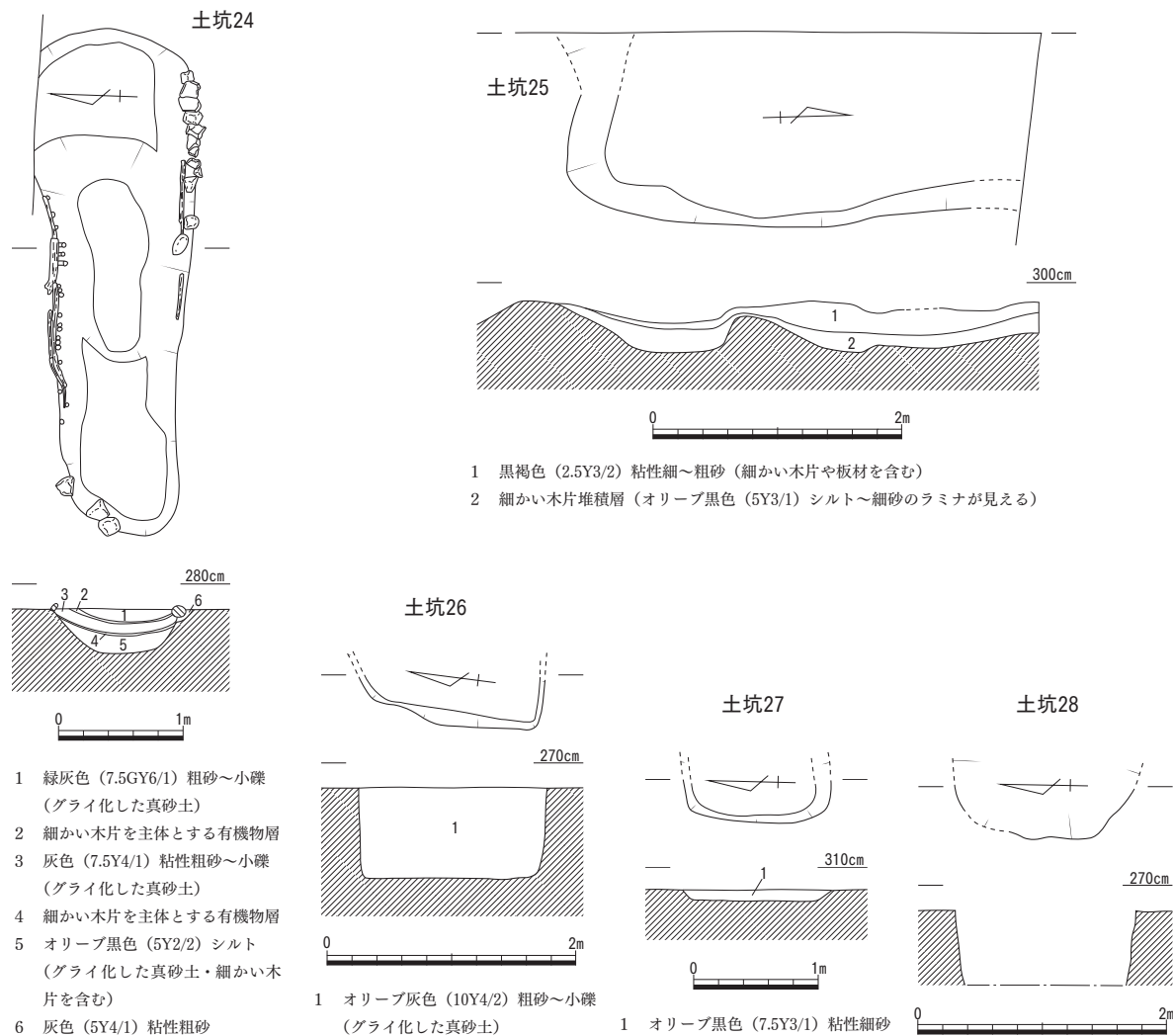
第25図 井戸2・3 (1/60)

高0.94mを測る底面までほぼ垂直である。平面円形を呈すると思われるこの土坑の規模は、長さ推定262cm、幅推定225cmである。遺物に備前焼の壺、土師器の皿などが出土しているが、陶磁器は認められない。

井戸2の北側に位置する土坑24は、平面長楕円形を呈している。南北両辺には、径5cm程度の杭によって固定している丸太材や15cm程の角礫が認められた。北辺東側が側溝により削平されているがその規模は、長さ403cmを測り、底面の海拔高は2.30mである。第3層のグライ化した真砂土層の上・下層には細かい木片堆積層が認められる。遺物は、漳州窯の碗6、備前焼の瓶・すり鉢、瓦質土器の火鉢91、土師器の皿・埴塙108、鉄釘、銅の板材切れ端M26、銅の金具M30、銅滓M31、動物遺存体、種子、箸、曲物、部材などが出土している。



第26図 土坑22・23 (1/60)



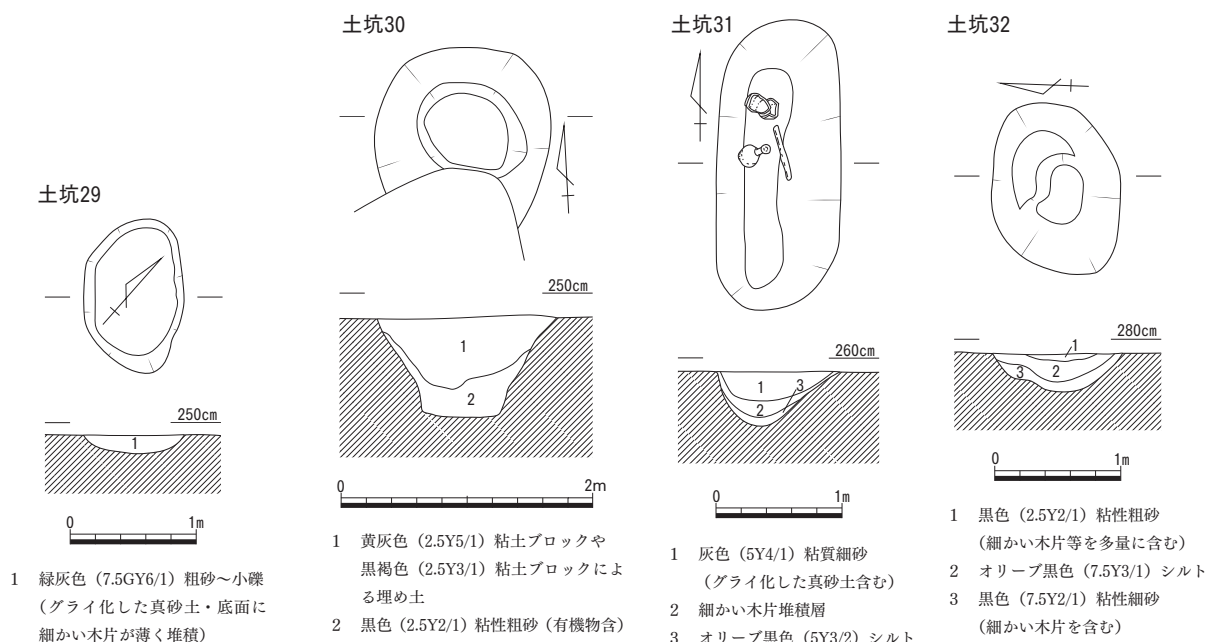
第27図 土坑24～28 (1/60)

土坑24の西隣で検出された土坑25は、近世Ⅱ期の生活面と考えている真砂土(第7図第30層)で埋められている。埋められる前は、滞水していたようである。出土遺物には、景德鎮の小皿10、備前焼のすり鉢、土師器の皿、鞘W2、漆椀ほかの木製品、鉄釘、銅の板材切れ端M28、用途不明の角製品B2、動物遺存体などが出土している。

調査区中央部で南北に連なって検出された土坑26～28は、1区と2区の境界に位置していることから、側溝等によって東半が確認出来なかった。平面形は、いずれも方形状であったと思われる。壁面が垂直に立ち上がっている土坑26・28の埋土は、グライ化した真砂土のみであった。各土坑とも出土遺物が少なく、土師器の皿や鍋・釜などが数点出土したのみである。

井戸2の南約6mで検出された土坑29は、溝9を切っている。長さ124cm、幅80cmを測る楕円形の平面で、細かい木片が薄く堆積している底面の海拔高は2.25mである。遺物は、土師器の皿、漆椀などが出土しているが、陶磁器類は認められない。

土坑21により南側が削平を受けた土坑30は、土坑29の南約3mに位置し、径約140cmの平面円形を呈する。海拔1.52mを測る底面直上からは、漆椀や下駄などの木製品が出土している。その他に備前焼すり鉢や土師器の皿69・鍋・釜が認められる。



第28図 土坑29～32 (1/60)

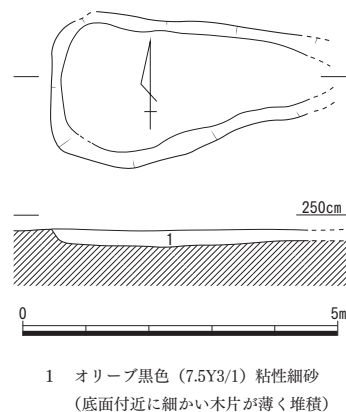
土坑31は、掘立柱建物1の南約1mに位置し、石列1の石を除去した後検出された。平面楕円形を呈し、その規模は長さ230cm、幅98cmである。底面海拔高は2.01mを測る。埋土第2層が細かい木片堆積層であり、この土坑がしばらく滞水していたことを窺わせる。図示した備前焼の瓶51や鞘W1の出土状況は、底面からやや浮いた状態であった。その他の遺物には、景德鎮の小皿9、土師器の皿、鉄釘、銅製の鈴、動物遺存体、ヒョウタンの種子などがある。

長さ145cm、幅106cmの平面楕円形を呈する土坑32は、土坑33が検出された海拔より約40cm高い海拔約2.7mで検出された。土師器の皿のほか、下駄W30、漆椀、鉄釘、石製の将棋の駒S4、動物遺存体などが出土している。

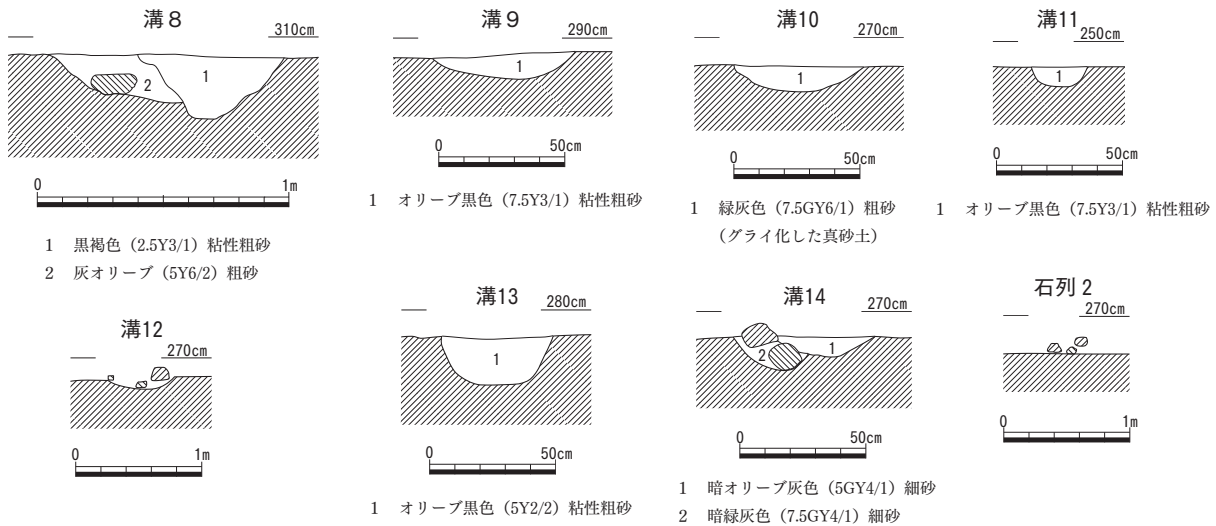
土坑30の東隣に位置する土坑33は、東端が攪乱を受けているものの、長さ420cm以上、幅242cmと非常に大形で、検出面からの深さ23cmを測る海拔高1.98mの底面には細かい木片が薄く堆積していた。景德鎮の小杯・碗、瀬戸・美濃焼の椀、備前焼の甕・鉢・すり鉢49、土師器の皿53・鍋・焙烙、鞘、箸、鉄釘、銅銭M40・46、銅の板材切れ端M22、土錘C1・6、土製の人形C11、碁石S3、動物遺存体など多様な遺物が出土した。

溝・石列 (第5・23・30図、図版7～9)

調査区東部に所在し、N-1°-Eの方向を指向する溝8は、幅92cm、深さ25cmを測る。一度掘り直しが行われているようで、第5図第42・43層が古段階の、第41層が新段階の埋土である。両時期とも肩部に石列や径5～8cm前後の杭を伴っている。石列の石は、10～20cm大の河原石を主体としているが、角礫も若干使用されている。古段階の溝からは、備前焼のすり鉢、土師器の皿、箸、動物遺存体などが、新段階の溝からは、景德鎮の碗4・皿13、瀬戸・美濃焼の天目椀、備前焼の壺・小皿44、土師器の椀52・皿・埴塙99、箸、板材、鉄鍬M5、鉄釘M12、銅製の切羽M6、金具M20、動



第29図 土坑33 (1/120)



第30図 溝8～14・石列2 (1/30・1/60)

物遺存体、種子などが出土している。

調査区中央部を鍵形に流走している溝9は、一部幅広い場所も認められるが、幅60cm前後、深さ10～15cmを測る。遺物は景德鎮の碗・皿、備前焼の小壺・皿・すり鉢、土師器の皿・埴埴104・105・109、折敷足板W21、銅製の棒状製品M24、銅の板材、鉄釘、鉄製の金具M11、角製品のオモゲーB1、土錘C3・4、円板形土製品C8、羽口C13、動物遺存体、種子、焼土、炉壁、金属滓などが出土している。

検出長約130cmの溝10は、北側が井戸2により、南側が近・現代のゴミ穴により消失しているが、溝9と一連のもの可能性がある。溝は、検出幅51cm、深さ10cmを測り、断面皿形を呈する。わずかに土師器の甕・皿が出土している。

北端が土坑15に削平されている溝11は、溝9の南端から約20cm東側で検出された。断面は逆台形で、幅22cm、検出面からの深さ8cmを測る。土師器の皿破片が数点出土したのみである。

肩部に10～15cmの石が並んでいる溝12は、溝9の南端約3mで検出した。その流走方向や底面海抜高などから、溝9と一連のものと思われるが、確証はない。出土遺物は皆無である。

土坑33の検出海抜高から約40cm高い海抜で確認された溝13は、東西方向に流走している。幅44cm、検出面からの深さ18cmで、底面の海抜高は約2.5mである。備前焼の甕や土師器の甕が出土している。

溝13の南側約50cmに位置している溝14は、溝13と同様に東西方向に流走している。北肩部に10～15cmの河原石もしくは角礫を据えていたようで、それらの石を約7m検出している。なお、溝掘り方はY=-36810付近でしか確認できなかった。遺物は出土していない。

調査区中央部で検出された溝15は、幅405cm、深さ70cmの規模を測る。東壁で溝断面を確認していないことから、この溝は調査区を東西に貫いていないと思われる。遺物には、景德鎮の碗、瀬戸・美濃焼の碗、備前焼のすり鉢、土師器の皿・焙烙、鞆W3などがある。なお、海抜1.9mを測る溝底付近で、中年男性の頭蓋骨が右側頭部を下にした状態で検出された。この頭蓋骨以外に人骨は認められず、ここに埋没した経緯は不明である。

東西方向に並んでいる石列2は、溝12北端とほぼ接している。使用している河原石や角礫の大きさは、10cm前後のものが主体である。

5 近世の遺物

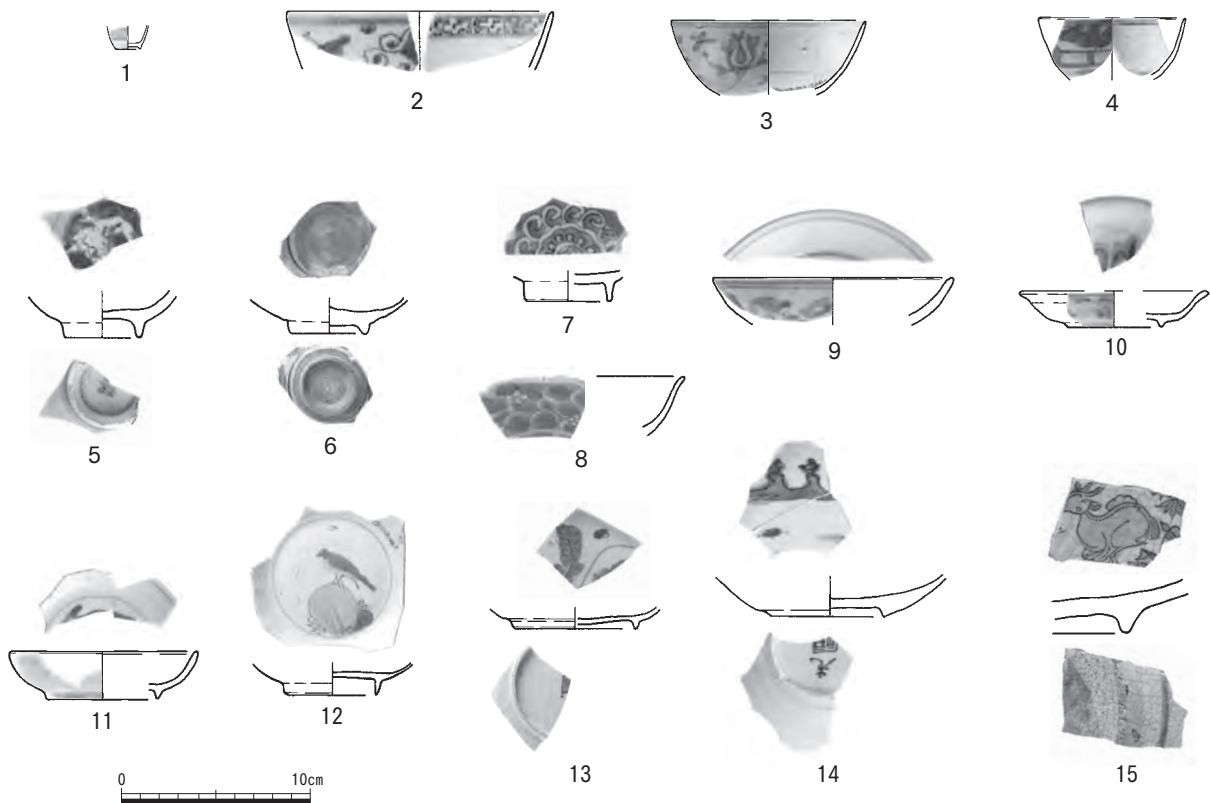
遺物は、陶磁器類や瓦とともに、木製品、金属製品、石製品、骨製品、土製品や、獣骨、魚骨、貝、種子などの食物残滓が多く出土している。これらは、16世紀後半から17世紀末までのものが主体を占め、18世紀以降のものはほとんど認められない。

輸入磁器（第31図、図版12）

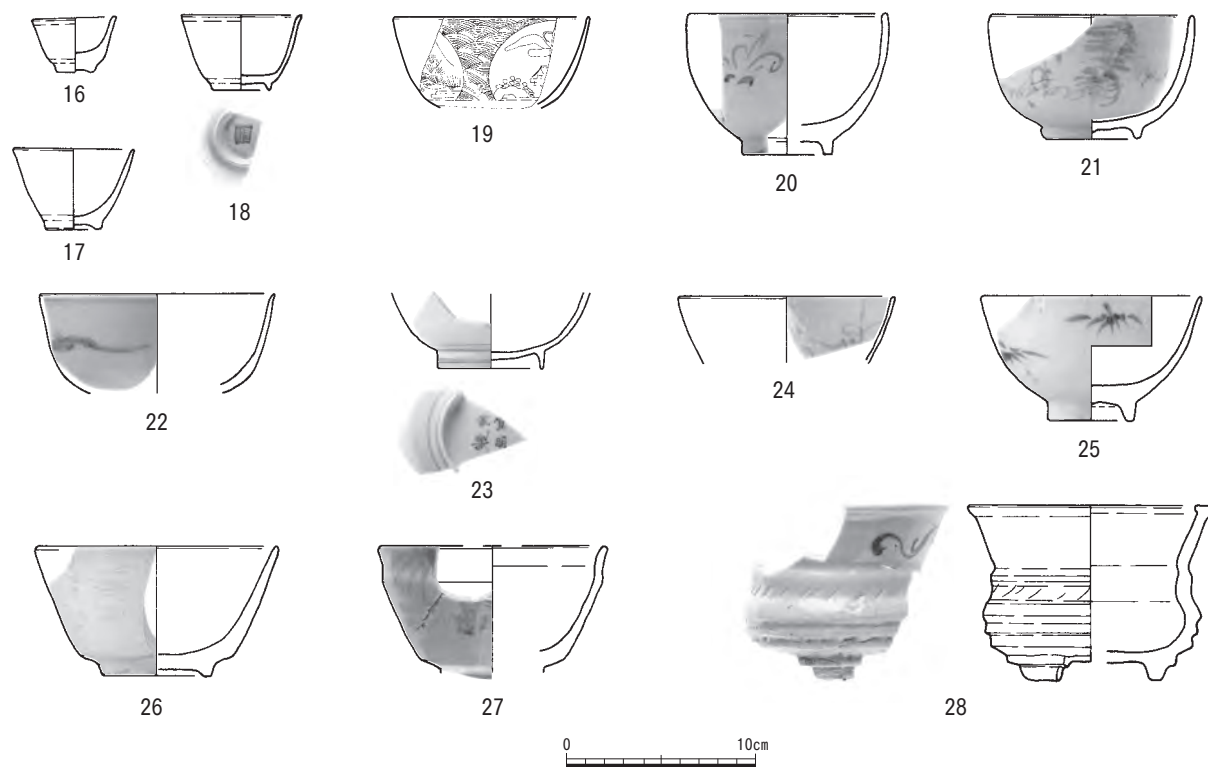
小杯1、碗2～7、小皿・皿8～14、大皿15を掲載している。2は内側面口縁部に崩れた四方禳文を描いた景德鎮の碗である。3は漳州窯の青花碗で、器表面に砂粒が若干付着している。見込みが盛り上がり上がっている饅頭心碗5は、見込みに樹下人物像が、高台内に「福」の文字が見られる。見込みと高台が露胎の6は、漳州窯の碗もしくは小皿である。景德鎮の小皿8は、二次的に熱を受けたためか釉薬がやや白濁している。9は漳州窯の小皿である。10の外側面には、唐草文が描かれている。11は景德鎮の芙蓉手皿である。見込みに鳥を描いた景德鎮の小皿12は、高台外側面に3重の圈線を描いている。碁笥底である14は、高台内に「光」と方形枠に囲まれた「福」字を書く。高台畳付に砂粒が付着している15は漳州窯の大皿で、見込みに「鹿」を描いている。

国産磁器（第32図、図版12）

小杯16～18、碗19～27、香炉28を掲載した。高台無釉の白磁小杯16は、内面に粗い砂がまばらに付着している。17は全面施釉の白磁小杯で、底面には粗い砂が付着している。端反口縁の18は、高台内に方形枠に囲まれた「福」字が書かれている。19は色絵が剥落した色絵碗で、外側面には青海波や山水文が描かれていたようである。22は外側面に山水文が描かれている。薄手の高台である23は、高台内に「宣明年製」の文字がある。腰部で一度折れて直線的に口縁に向かって開いている26は、焼成不



第31図 輸入磁器（1/4）



第32図 国産磁器 (1/4)

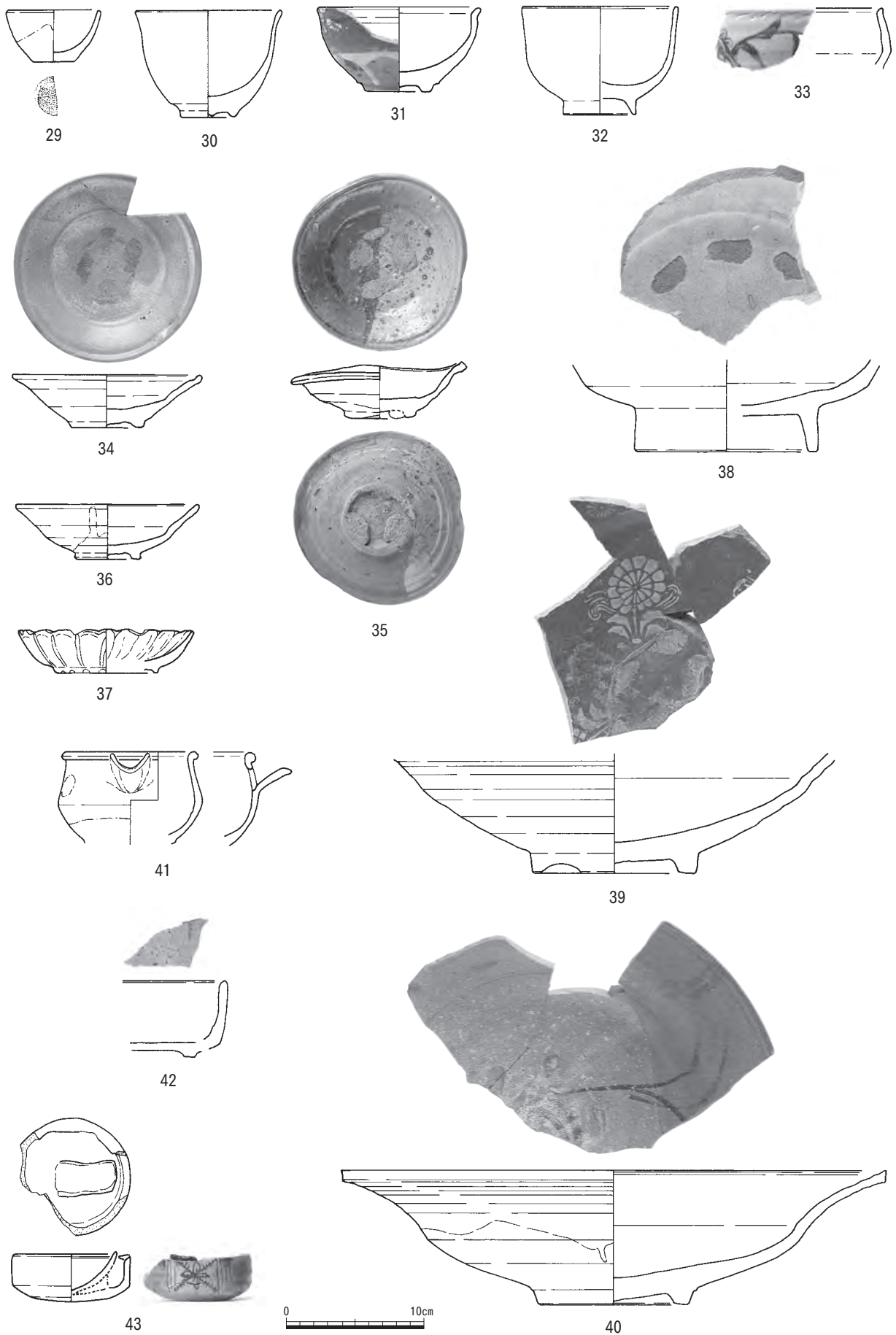
良のため器表面が粗い。天目碗の27は、外側面に重ね焼きの溶着痕が認められる。三足付きの香炉28は、腰が張り出し、口縁部がラップ状に開く。

国産陶器 (第33図、図版13)

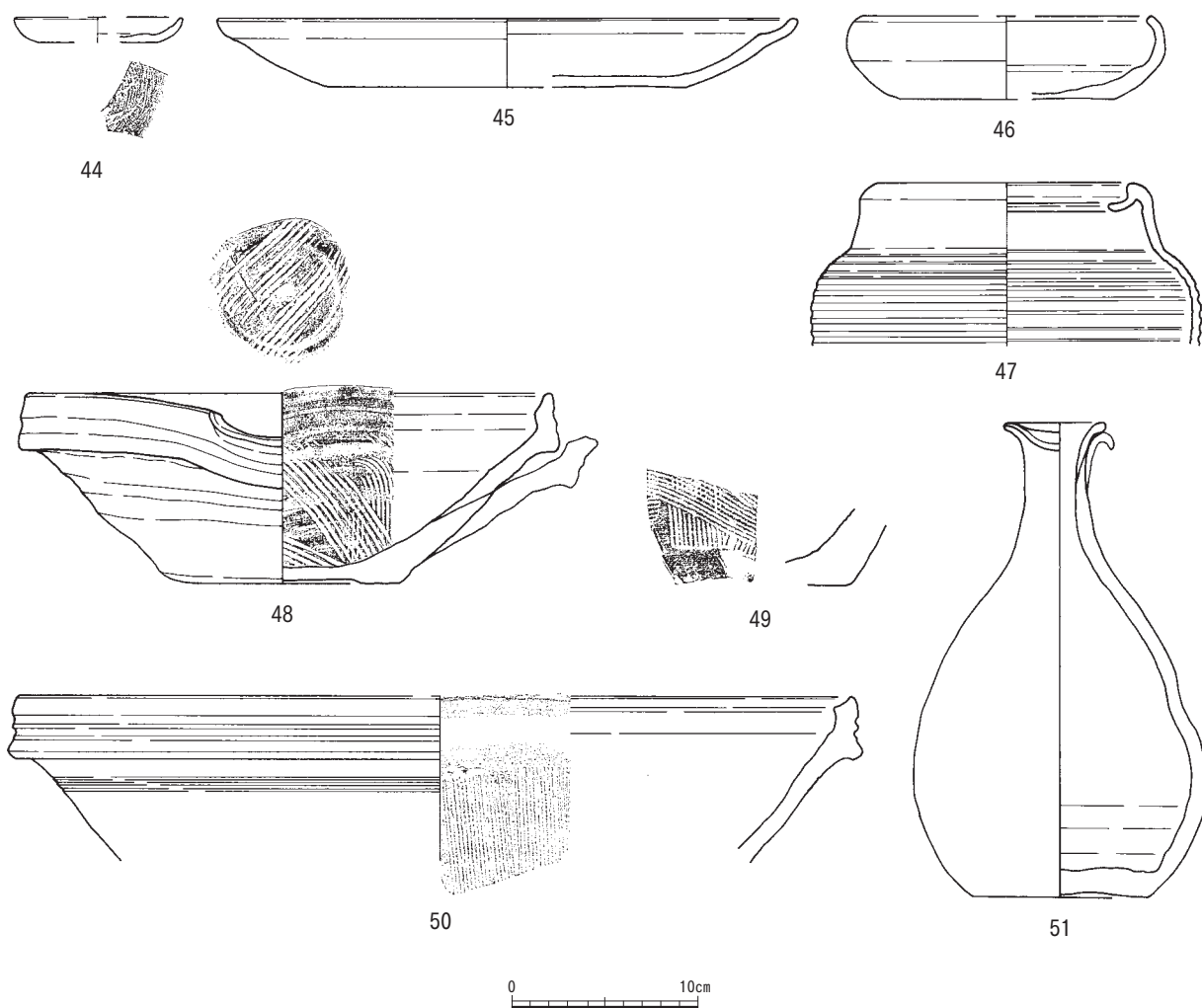
灰釉を掛けた肥前の小杯29は、底面に糸切り痕を残す。口縁部が外反する肥前の椀30は、高台畳付まで灰釉が掛けられ、高台内や高台脇に砂目が認められる。31は内面に鉄釉、外面に藁灰釉の後鉄釉を掛けた肥前の椀で、口縁部が外反する。32は肥前の呉器手椀、33は外側面に鉄絵が描かれた志野の椀である。溝縁皿34は、内面見込みと高台に砂目と重ね焼き時の溶着痕が観察される。鉄釉と灰釉を掛け分けた肥前の溝縁皿35は、非常に歪んだ形態を呈し、外側面と内面見込みに重ね焼き時の溶着痕が認められる。灰釉を掛けた36は、内面見込みに砂目を残し、高台内に兜巾が認められる。37は瀬戸・美濃の菊皿である。内面見込みに砂目を残す肥前の大皿38は、二次的に熱を受けたことにより器表面が粗れており、釉薬が判然としない。おそらく灰釉もしくは青磁釉が掛けられていたと思われる。39は白泥象眼を施している肥前の大皿、40は内面に鉄絵を描き灰釉を掛けた大皿である。片口鉢の41は、内外面に鉄釉を掛け、外面の鉄釉の上には藁灰釉を施している。42は志野焼の向付で、内面に鉄絵を描く。43は青織部焼の灯明具身である。内面底部に貼り付けた灯心滑らし側以外の口縁部は、内側に折り返している。この灯心滑らし側の外側面には鉄絵が描かれ、その部分には長石釉を、それ以外の外側面には銅緑釉を掛けている。なお、灯心滑らし部と相対する口縁部が欠損しているため、把手が付いていたのか不明である。

炆器 (第34図、図版15)

44～51はすべて備前焼である。44は底部糸切りの皿、45は折縁の大皿である。46・47は鉢で、47の胴部には多条の凹線がめぐる。48～50はすり鉢で、斜めすり目が見られる48・49と放射状すり目が密に施された50がある。51は瓶である。



第33図 国産陶器 (1/4)



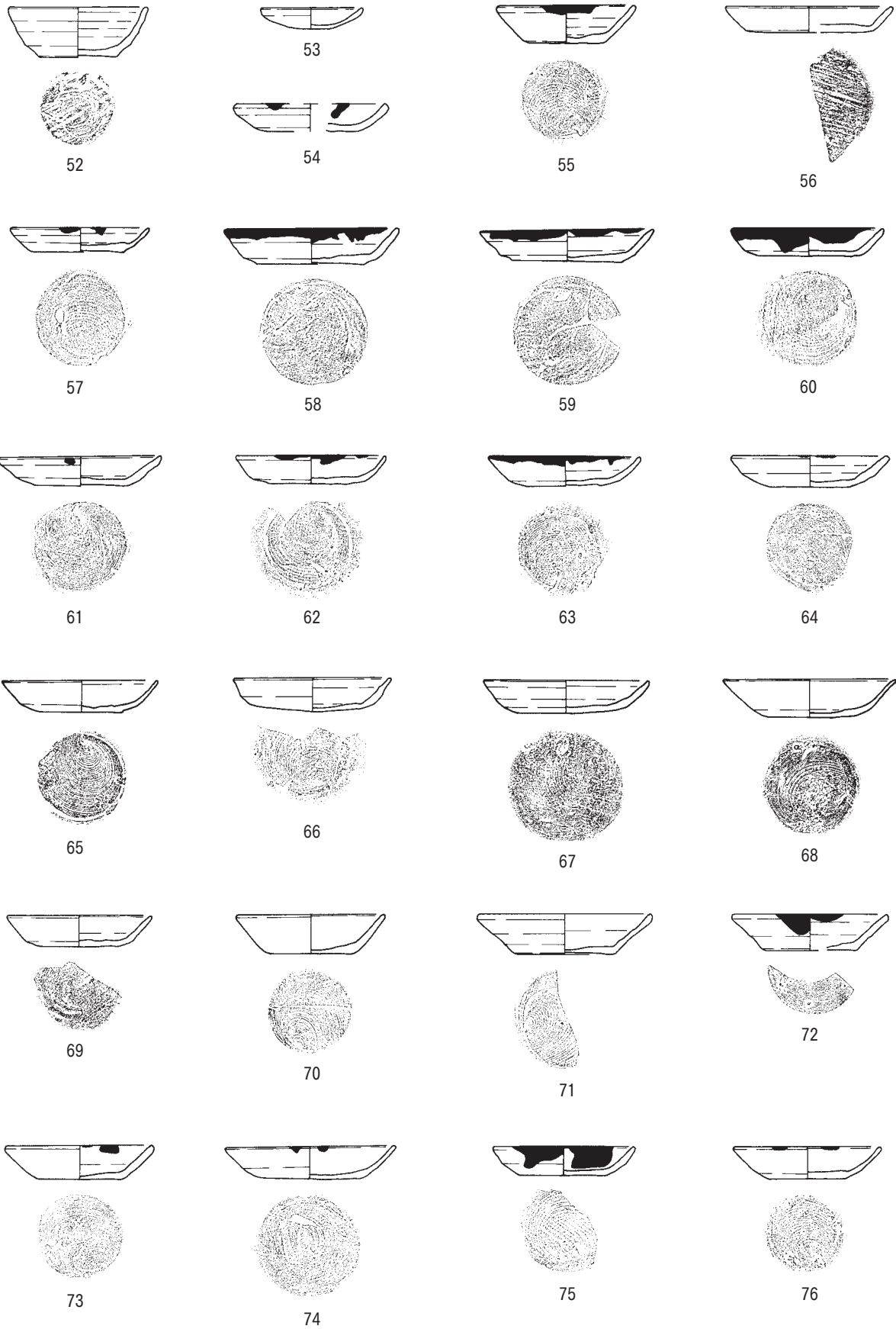
第34図 炆器 (1/4)

土器 (第35・36図、図版15・16)

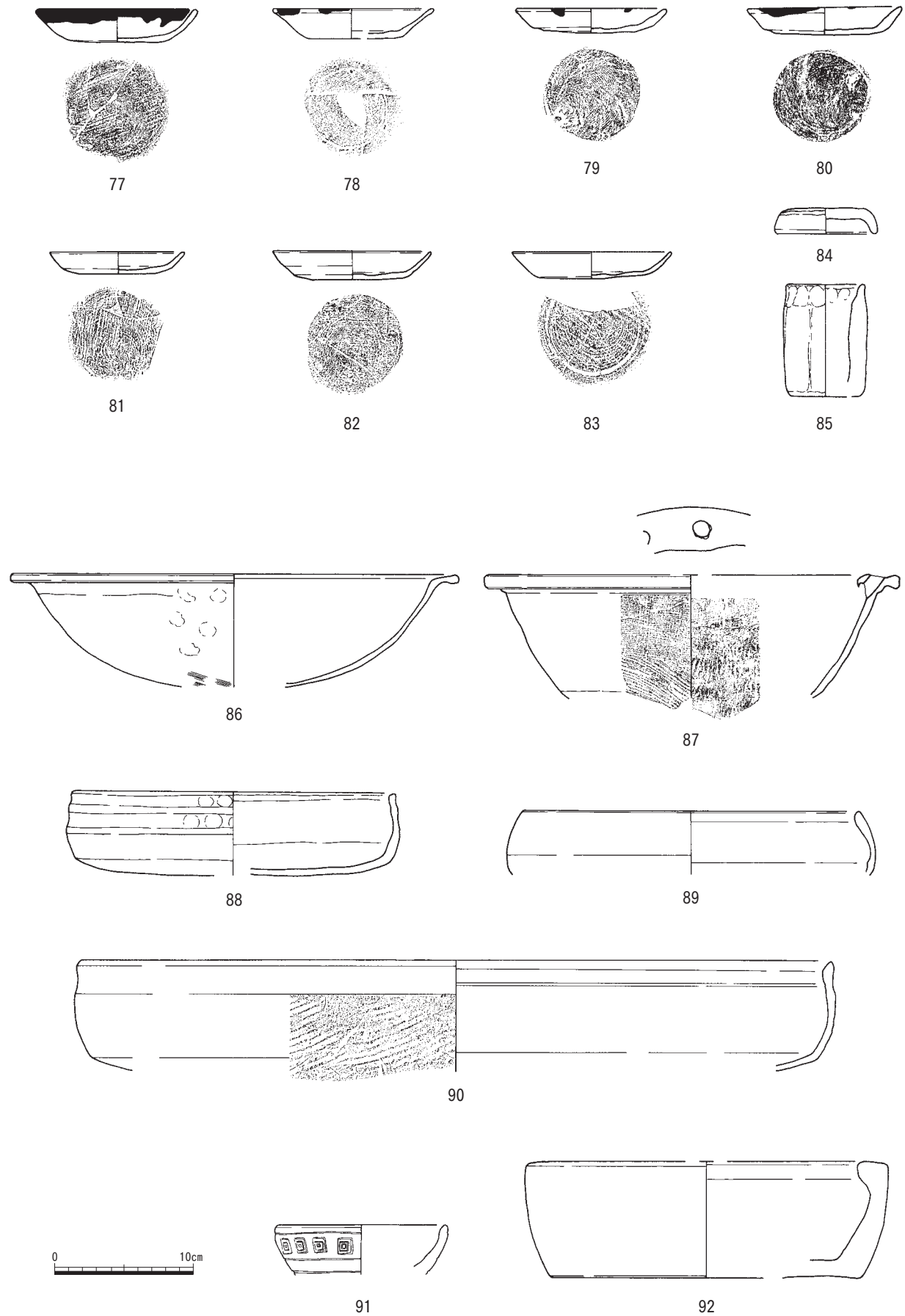
土師器碗52、土師器皿53～83、土師器の焼塩壺蓋84と同身85、土師器の焙烙86～90、瓦質土器の火鉢91・92を掲載している。黒褐色の胎土である碗52は、底部に糸切り痕が見られる。器高の低い皿53・54は、底部をナデで仕上げる。底部に糸切りもしくは糸切りと板目を残す55～83の皿は、内面及び口縁端部に煤や油煙が付着しているものが多い。胎土の色調には黄橙色・灰白色・赤褐色などが認められ、近世Ⅰ～Ⅲ期に帰属するものには黄橙色が、近世Ⅳ期には灰白色の色調のものが多い。焼塩壺身85は、外面に縦方向の面を持つ。86・87は外反する口縁部に内耳が見られる焙烙で、図化できなかったものの、86にも内耳の痕跡がわずかに認められる。火鉢91は、外側面に3条の沈線を施し、さらに「雷文」を描いている。

埴埴 (第38図、巻頭図版1、図版14)

93は口縁部が一部欠けているもののほぼ完形の埴埴で、口径32mm、深さ10mmと今回出土した埴埴の中で一番小さい。内面には光沢がない黒色のスラグが薄く付着している。内面付着スラグに緑青が認められる94は、93と同様に器壁が薄く5mmしかない。内面口径58mm、深さ17mm、器壁の厚さ7mmの95は、スラグが内面全体に付着し、特に底部から体部中央にかけて厚く残っている。完形品の96は、内面口径52mm、深さ15mmを測り、内面全面と外面口縁部に光沢をもつ黒色及び赤色のス



第35図 土器1 (1/4)



0 10cm

第36図 土器2 (1/4)

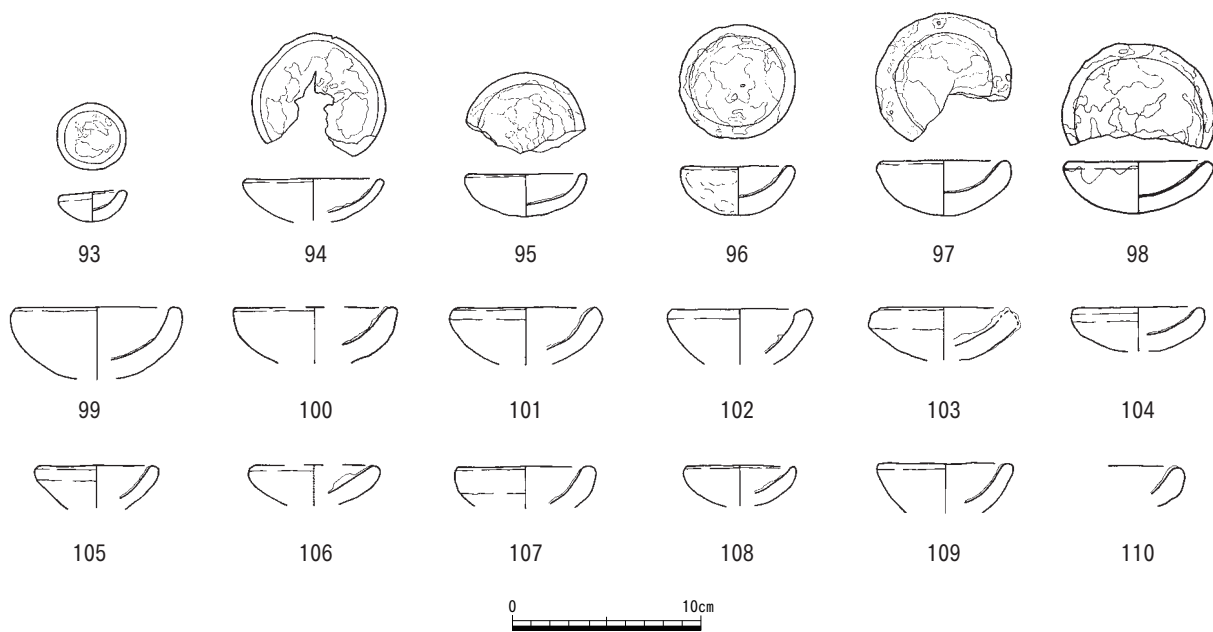
ラグが付着する。約2/3残存している97は、器壁が12mmと厚く、スラグは口縁部まで付着している。内面口径70mm、深さ17mmを測る98は、内面に銅滴が、口縁外側に溶融した銅を流すときに付いたものと思われるスラグが認められる。スラグが厚く付着している100は、器壁が11mmと厚く、内面には銅滴が認められる。103の口縁部は、被熱により器壁が発泡している。

瓦 (第38・39図、図版16・17)

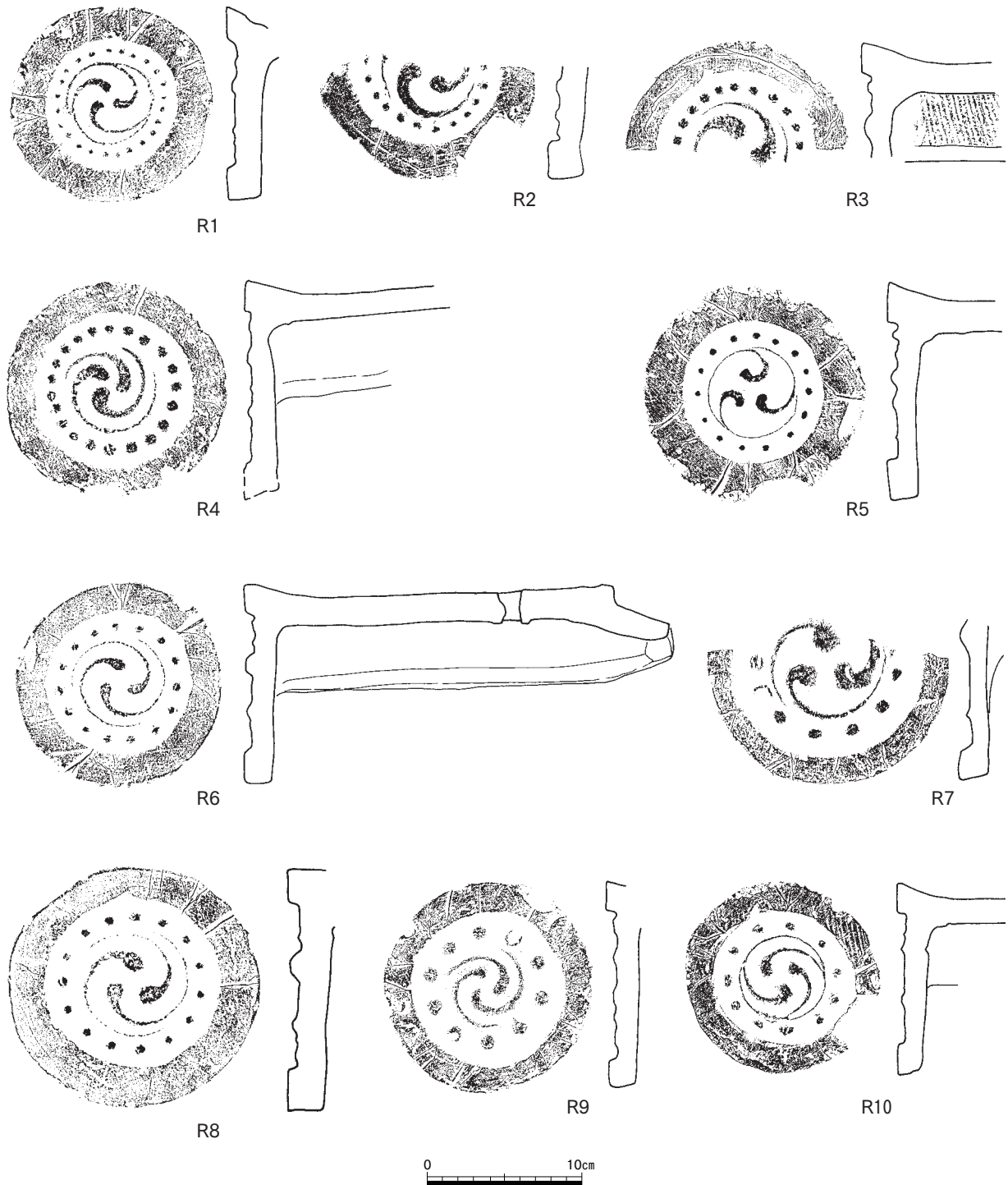
R1～9が左三巴、R10が右三巴の軒丸瓦である。軒丸瓦の内、コビキA痕を残すものはR3で、コビキB痕を残すものはR4・6である。R1・5は巴頭部が小さく、その尾部は細長く伸びて圏線状を呈する。R10は圏線内に巴文を配している。珠文の個数はR1が24個、R2・3が推定22個、R4が20個、R5～7が15個、R8が12個、R9が10個、R10が11個である。軒平瓦には中心飾三葉で唐草が3転するR11、2転するR12・13、中心飾逆三葉のR14～16、逆五葉のR17、宝珠の中心飾りで唐草が蔓状に延びるR18、桐と思われる中心飾りをもつR19がある。棟込瓦には、左三巴のR20・21と、菊花のR22がある。

木製品 (第40・41図、図版18)

検出時から非常にもろく、取上げ時に折れたり漆の剥落があったW1は、全面に黒漆が塗られた鞘で、鐙が斜めに切り落とされている。黒漆塗の鞘W2は、現存長37.1cmを測る。3枚の板を重ね合わせて作られているW3は短刀の鞘で、小柄が装着できるように二重構造をもつ。鞘の法量は、全長27.1cm、幅3.4cm、厚さ1.45cmを測る。板の削り抜き痕から短刀は、刃渡り24cm、幅2.6cm、小柄は、柄の部分長さ9.5cm、幅1.5cm、刃渡りが17.2cm、刀幅2.0cmと想定される。なお、全面に黒漆が塗られていたようであるが、剥落が著しい。W4～17は漆椀で、土圧により歪みが著しいものは、図上復元して掲載した。W17が内外面とも赤漆が塗られている以外は、いずれも内面赤漆、外面黒漆で仕上げている。W7・9・13～16は、外面に草花文などの文様を赤漆で施す。W4は、「丸に鬼唐花」の家紋を金で描いている。W10～13の高台内には、釘描が施される。W18は、片方が相欠け継ぎに加

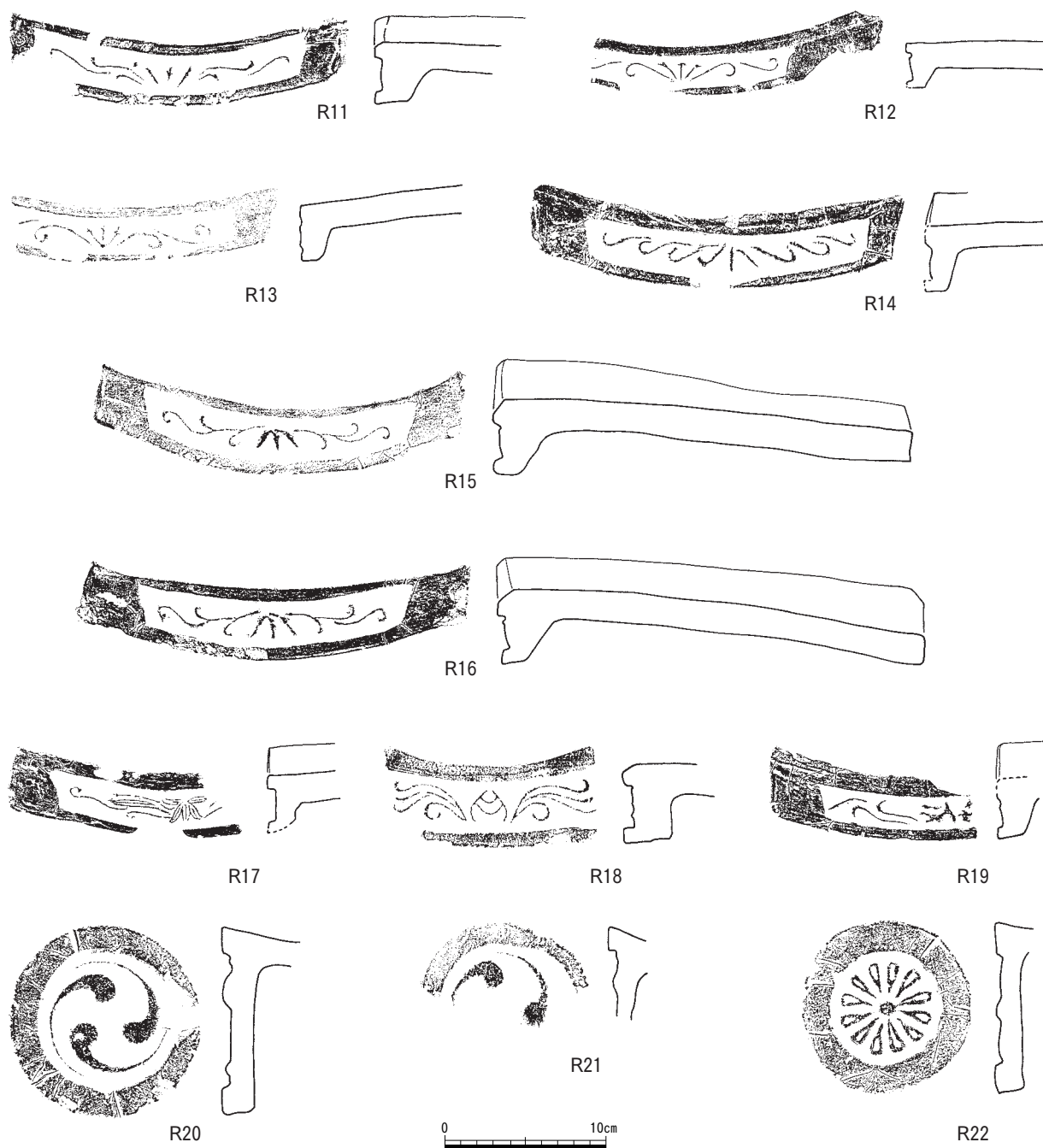


第37図 埴塼 (1/4)



第38図 軒丸瓦 (1/4)

工されている部材で、図の一番上と断面の位置にある穴以外は貫通していない。W19・20は簷で、図化したもの以外に100本以上出土している。折敷の足板であるW21は、上部に3か所、左測縁に1か所鉄釘が残存している。中央部には貫通していない穴が認められる。W22は、桶の蓋の一部と思われる、上部中央に径2.5cmの木栓差込穴が穿たれている。W23は、径12cmを測る曲物の底板である。W24は下半が欠損している薄い板材で、中心部に3か所穴を開けている。W25は、尖らせた先端に穴を開けているもので、蓋栓の可能性はある。W26は表皮が残る丸太材を用いて柄を削り出した砧で、柄には穴が認められる。W27は鋤先である。薄い板材を刷毛先から割れ目を入れて毛を挟む平刷毛のW28は、

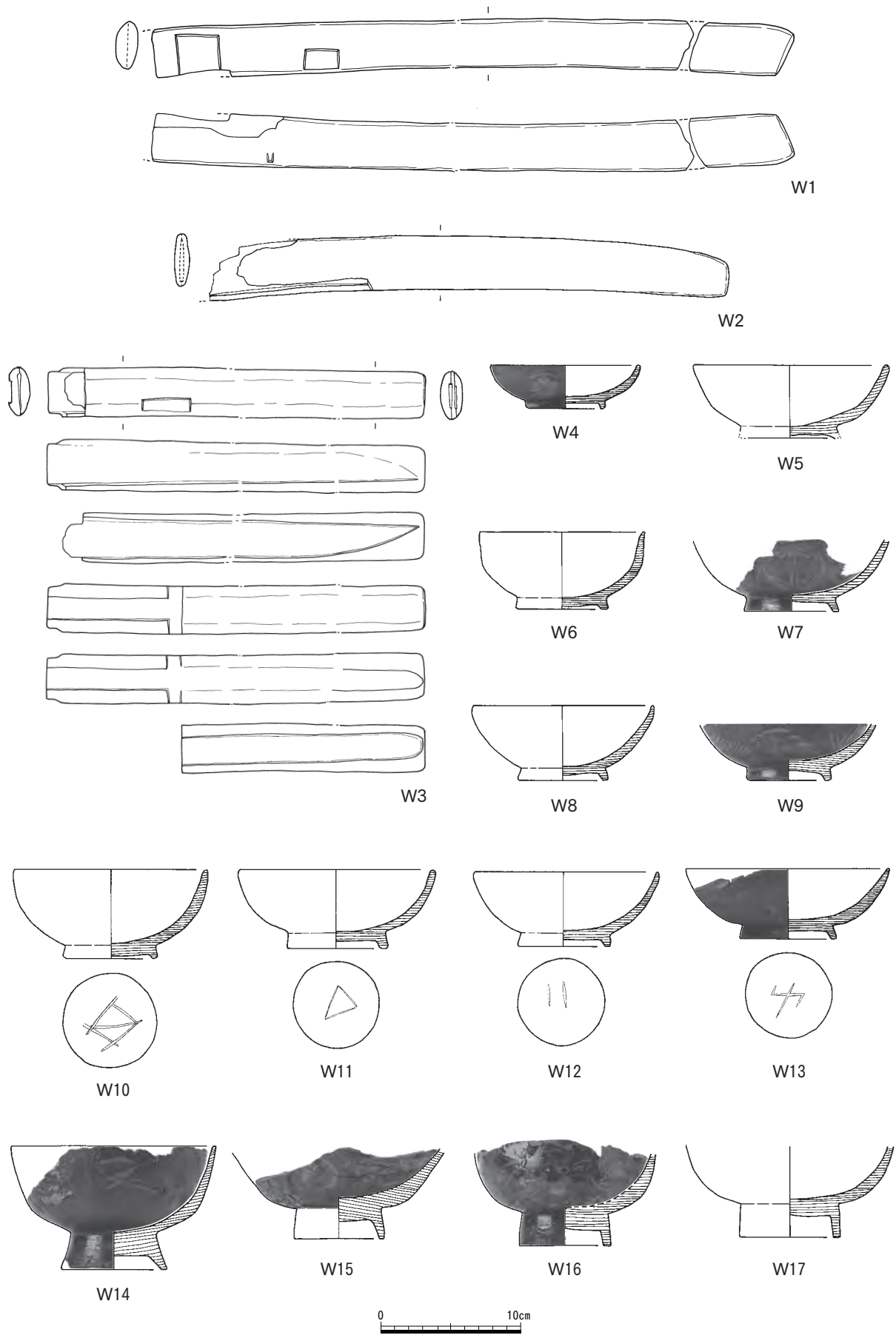


第39図 軒平瓦・棟込瓦 (1/4)

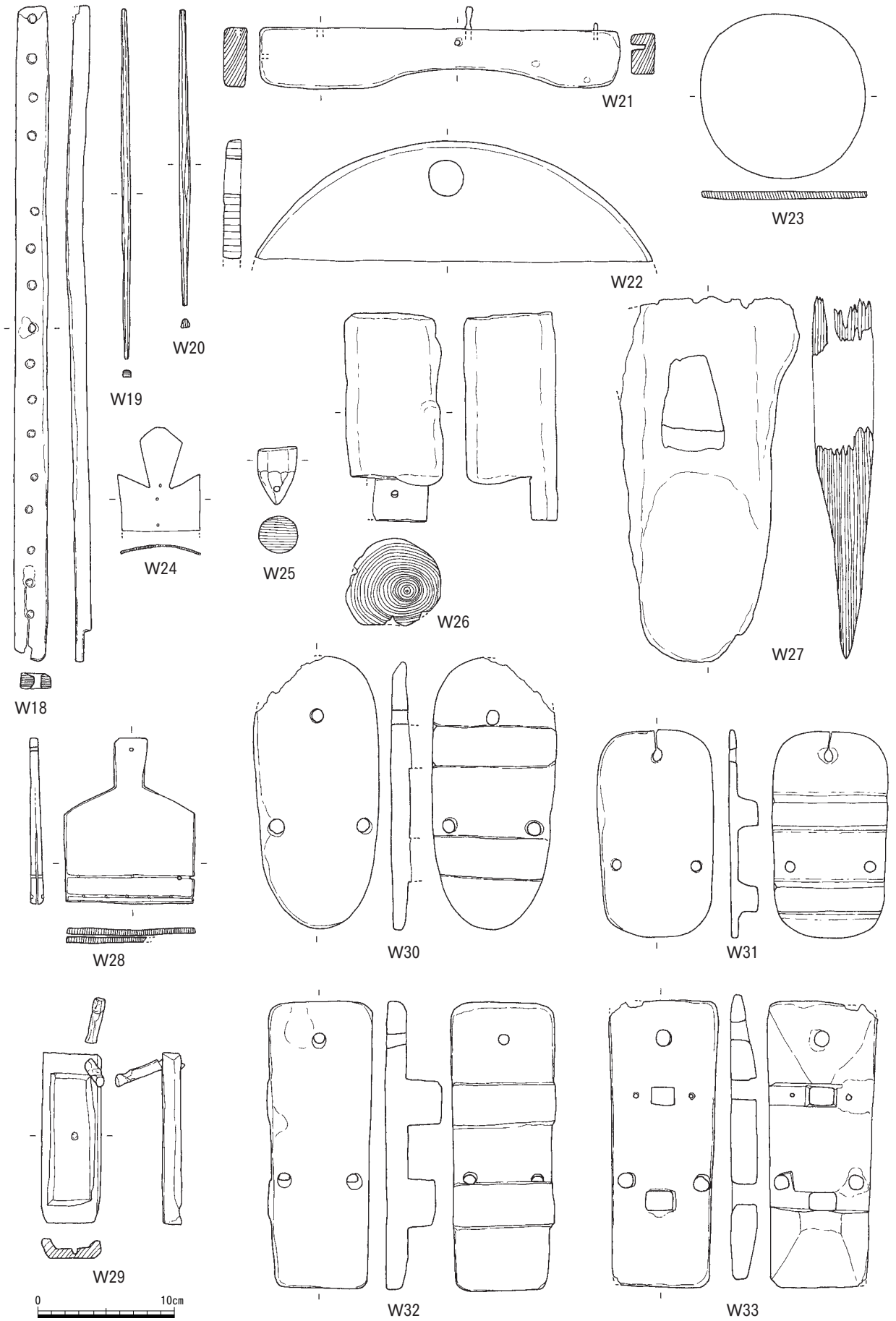
先端部に毛を固定するための糸を締める横方向の溝を2本彫り、上の溝には3か所、下の溝には5か所の穴を開けている。柄の先端には、紐を通すためと思われる穴がある。W29は舟形の木製品で、右上には径6mm、長さ3.5cmの円柱状の材で作られた人形を釘で固定している。この人形は、材の上部1/3の場所に切り込みを入れることで頸部を作り出し、顔の輪郭と目・鼻・口を彫り込んで頭部を表現している。ちなみに、斜めに倒れているのは土圧によるものであろう。W30・31は丸形の連歯下駄、W32は角形の連歯下駄、W33は角形の差歯下駄である。

金属製品 (第42図、巻頭図版1、図版14・19)

研ぎ減りが見られる小柄M1は、全長183mm、刃長90mm、身幅14mmで、銅板を巻いている柄の法量は、長さ92mm、幅15mm、厚さ5mmである。M2は全長168mmの小柄で、刃長91mm、身幅

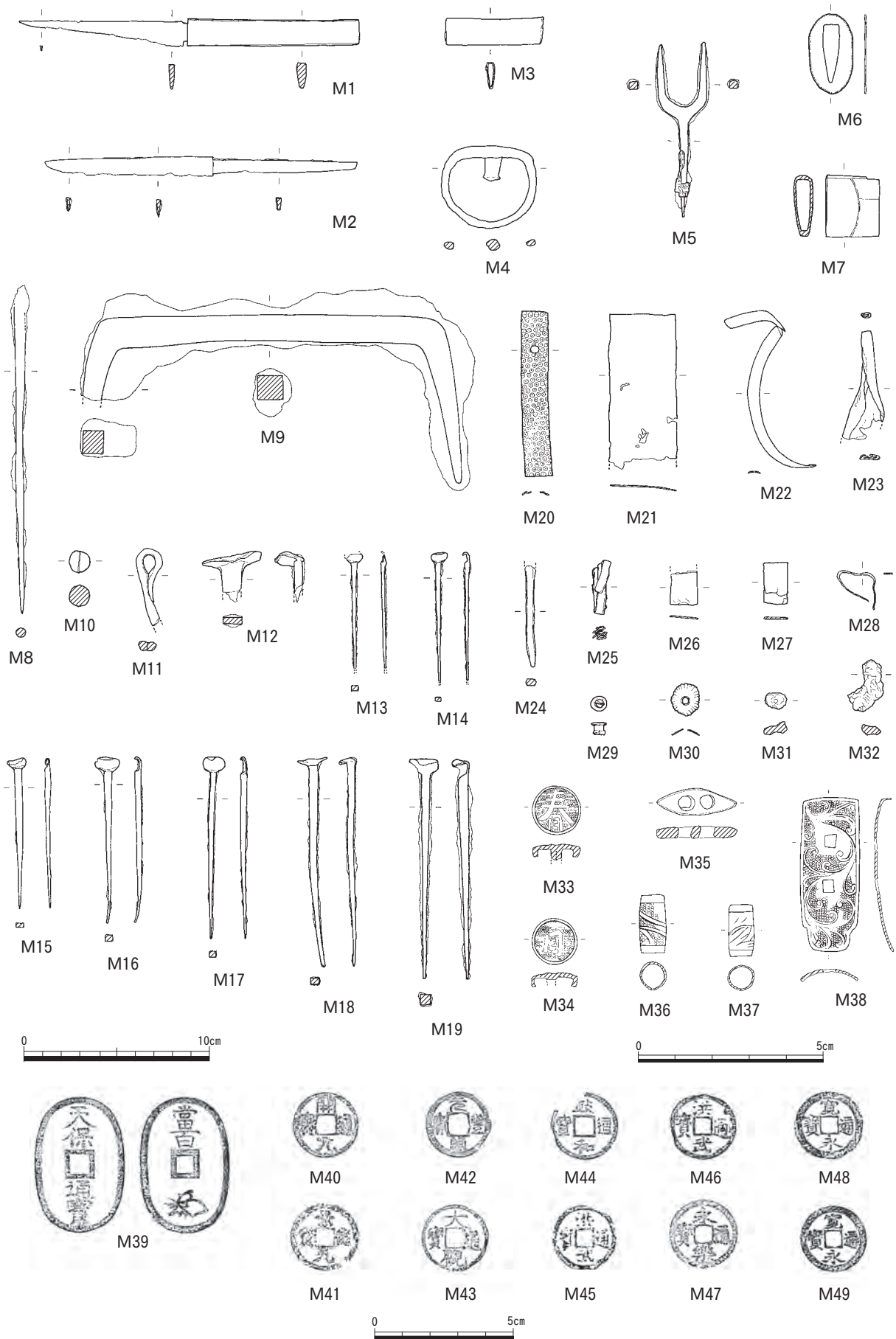


第40図 木製品 1 (1/4)



第41図 木製品2 (1/4)

第3章 発掘調査の成果



第42図 金属製品 (2/3・1/2・1/3)

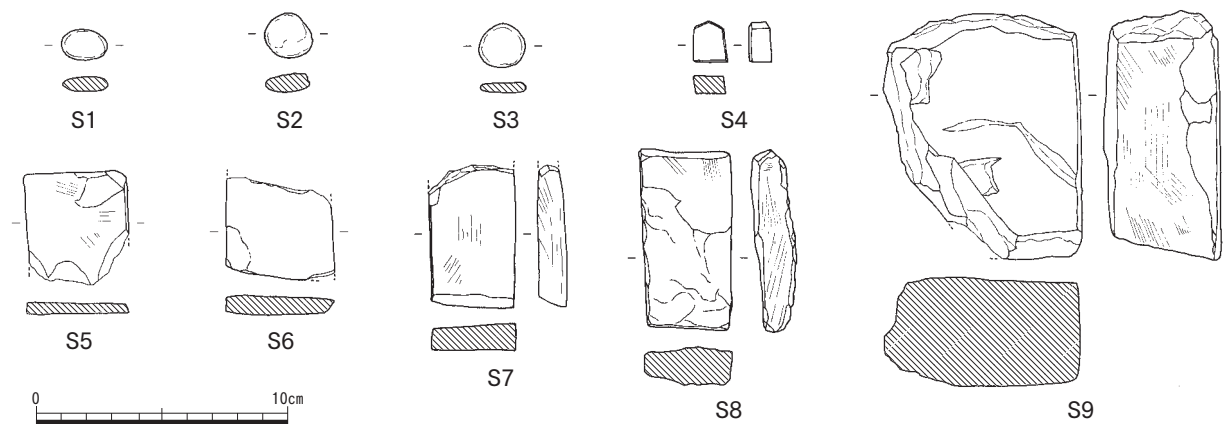
10mmを測る。刃部は一部欠損する。M3はおそらく小柄の柄、M4は鉄製の環状金具である。二又を呈する鉄鏃M5は、茎部分に木質が残存する。M6は切羽で、外縁部に刻み目を施している。M7は鉋で、最大厚3mmの銅板で製作されている。M8は長さ175mm、径6mmを測る先端が尖った鉄製の棒で、火箸かもしれない。M9は鋸、M12～19は鉄製の角釘である。長さ88mm、幅15mm、厚さ0.5mmの長方形を呈するM20は、上部に穴を開け、薄い銅板の背面から鑿を打ち込み、表面に径約3mmの円形の突起を打ち出している飾金具である。M21は、長さ84mm、幅37mm、厚さ0.6mmの長方形を呈した銅の板材で、下端は欠損している。M22～28は、M24を除き厚さ0.5mm前後の銅板切れ端で、幾重にも折りたたまれたものM23・25や、切った状態のままのものM22・28など様々な形態が認められる。M29は鳩目鋸、M30は円盤状の飾金具である。割鋸の首下部分が欠損しているM33・34は、毛彫りした円形の区画内にM33が「春」と魚々子を、M34が「月」と魚々子を彫金している。紡錘形を呈するM35は、径2.7mmの穴が2か所開けられており、表面には所々に鍍金が見られる。M36・37は、長さ約20mm、幅約16mm、厚さ約0.7mmの方形の銅板を丸めて円筒状にしたもので、M36には線刻と魚々子が、M37には線刻が施されている。長さ41.5mm、幅15.5mm、厚さ0.7mmの銅の板材を素材とした飾金具M38は、毛彫りで区画された中に唐草文を線刻し、その周囲に魚々子を配しているもので、所々に鍍金が見える。M39～49は銅銭である。M39は天保通宝で、裏面に「當百」と後藤家の花押が認められる。

石製品（第43図、図版20）

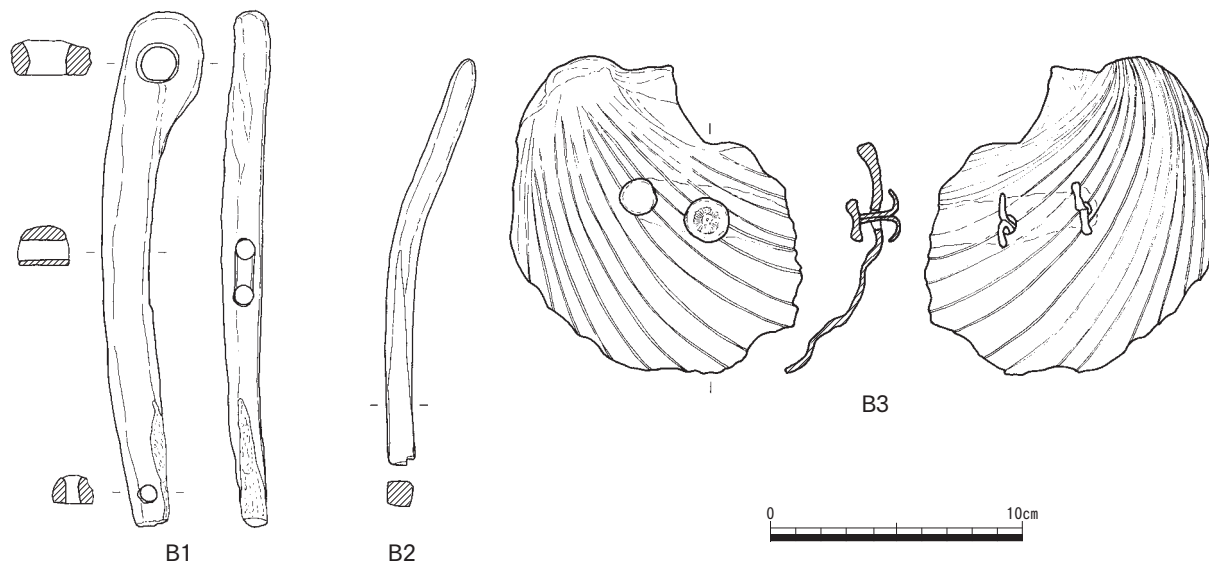
S1～3は、黒色を呈するチャート・泥岩（ホルンフェルス）・玄武岩を素材とする基石である。流紋岩製の将棋の駒S4は、裏面の一部が黒色に変色しており、火を受けたかもしれない。駒の文字は確認できなかった。S5～9は砥石で、S8を除きいずれも珪質泥岩製である。中でもS5・6には、「コノドント化石」が含まれており、鳴滝石と思われる。S7は表面観察では化石が見られなかったため鳴滝石と断定はできないが、質感はS5・6と近似する。

角・貝製品（第44図、図版20）

長さ205mm、幅32mm、厚さ17.5mmを測るB1は、鹿角製のオモゲーである。裏面は研磨によって平滑に仕上げているが、器表面全体に風化等による細かな凹凸が見られる。上下両端に1つずつ、中央部に2つの穴があり、その大きさは上端のものが径17mm、下端のものが径8mmで、両端の孔と90°方向を変えてあけた中央部の穴は、両者とも径8mmを測り、深さ2mmの溝で繋がる。B2は、



第43図 石製品（1/3）

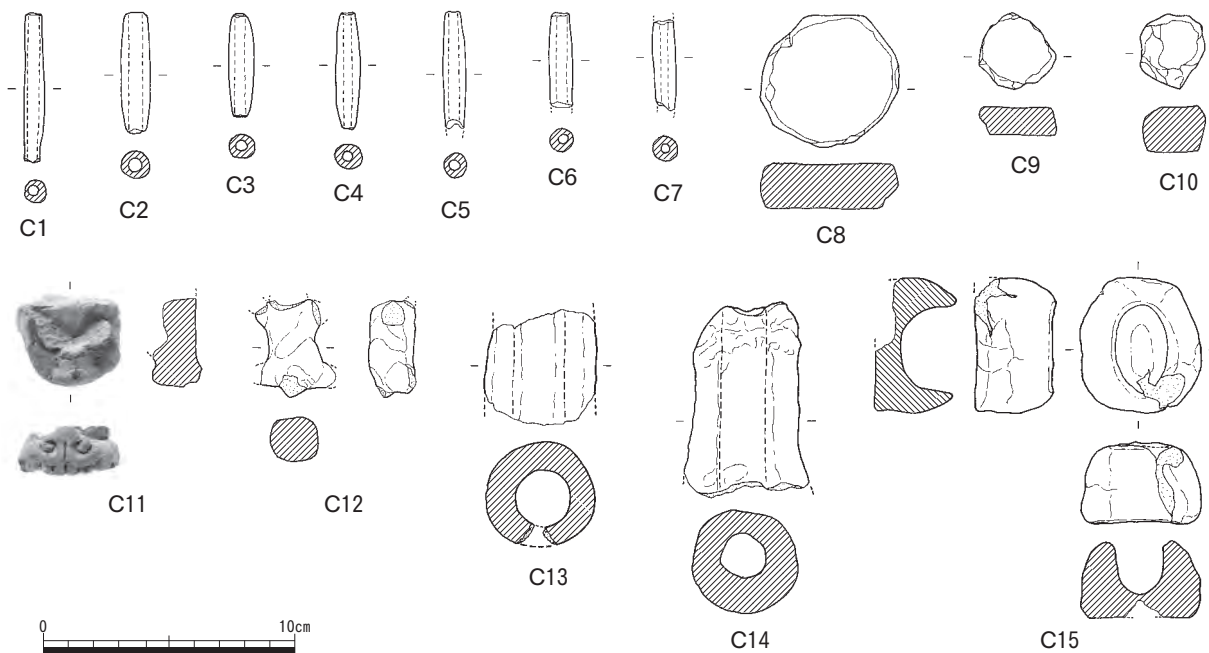


第44図 角・貝製品 (1/3)

下部の1/4が方形に研磨された鹿角で、切断された下端にはノコギリ痕が認められる。おそらく一辺9mmの直方体を作り出す素材と思われる。この直方体からは、サイコロが製作されたかもしれない。**B3**は、イタヤガイから製作された貝杓子で、中央部に2カ所開けられた穴には銅製の鉾が残存している。図示している破線範囲は、検出時に幅約2cmの木質が残存していた場所で、周囲と色調が異なっている。

土製品 (第45図、図版20)

C1～**7**は土錘である。**C8**～**10**は円板形土製品で、**C8**が瓦、**C9**・**10**が備前焼破片を粗く打ち欠いて整形している。**C11**は獅子、**C12**は4本足の動物を象ったものであろう。**C13**・**14**は羽口である。**C15**は内面が黒色に変色した容器である。その変色は、高温のものを入れたことにより生じたと思われるが、入れた材質は不明である。

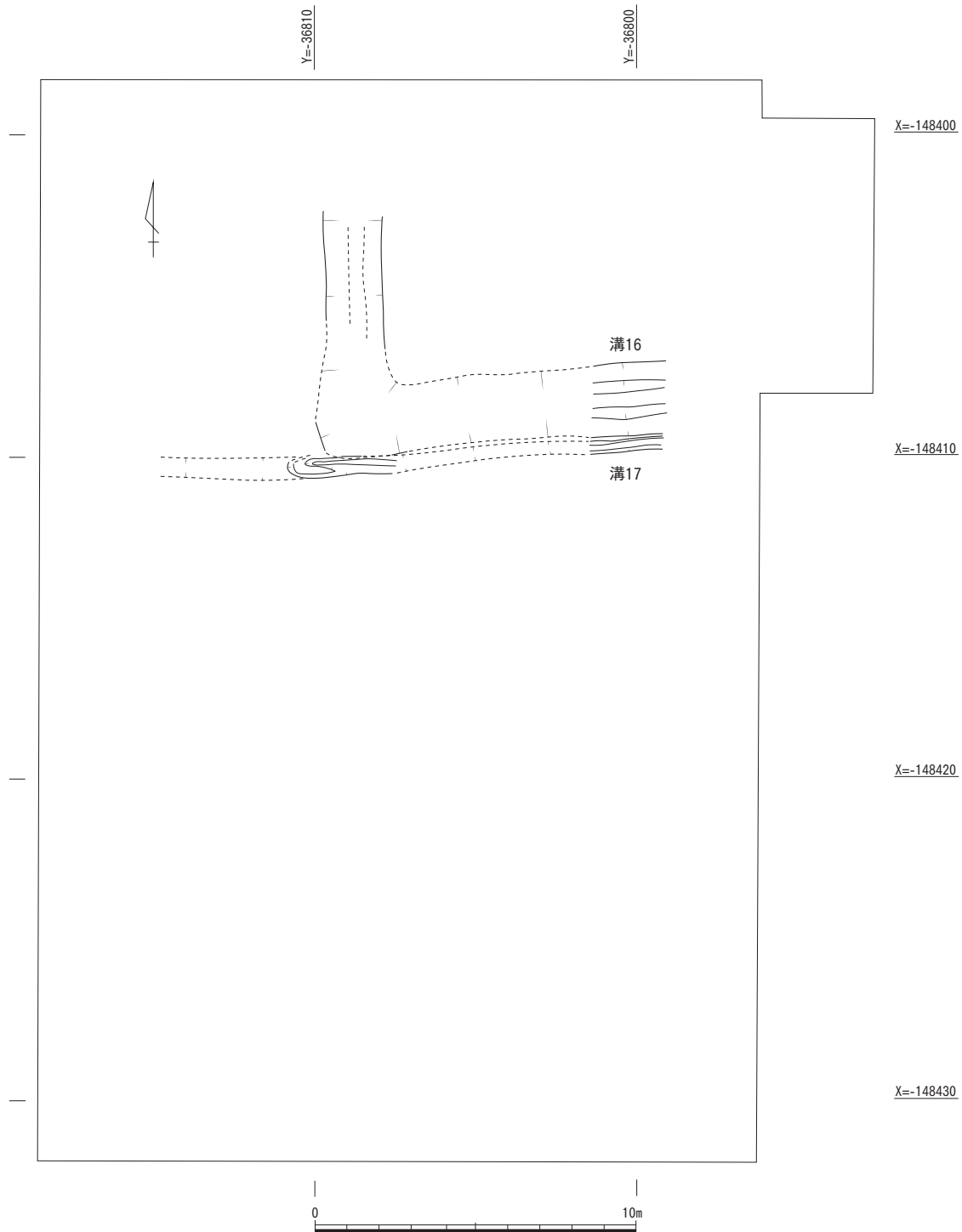


第45図 土製品 (1/3)

第3節 中世以前の遺構・遺物

1 中世の遺構・遺物

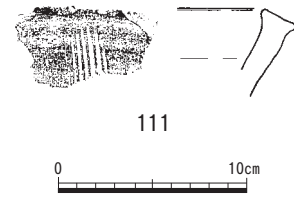
中世の遺構は、海拔高約1.9mを測る東壁断面の第29層上面で検出される。確認した遺構は、溝2条のみである。



第46図 中世遺構配置図 (1/200)

溝（第6・7・46・47図、図版10）

調査区北部で検出された溝16は、鍵形に流走している。断面は上面幅230cm、底部幅約65cmの逆台形を呈する。底面海拔高は東端で1.04mを測る。埋土から、備前焼のすり鉢111、土師器の皿が出土し、その時期は14世紀末頃である。



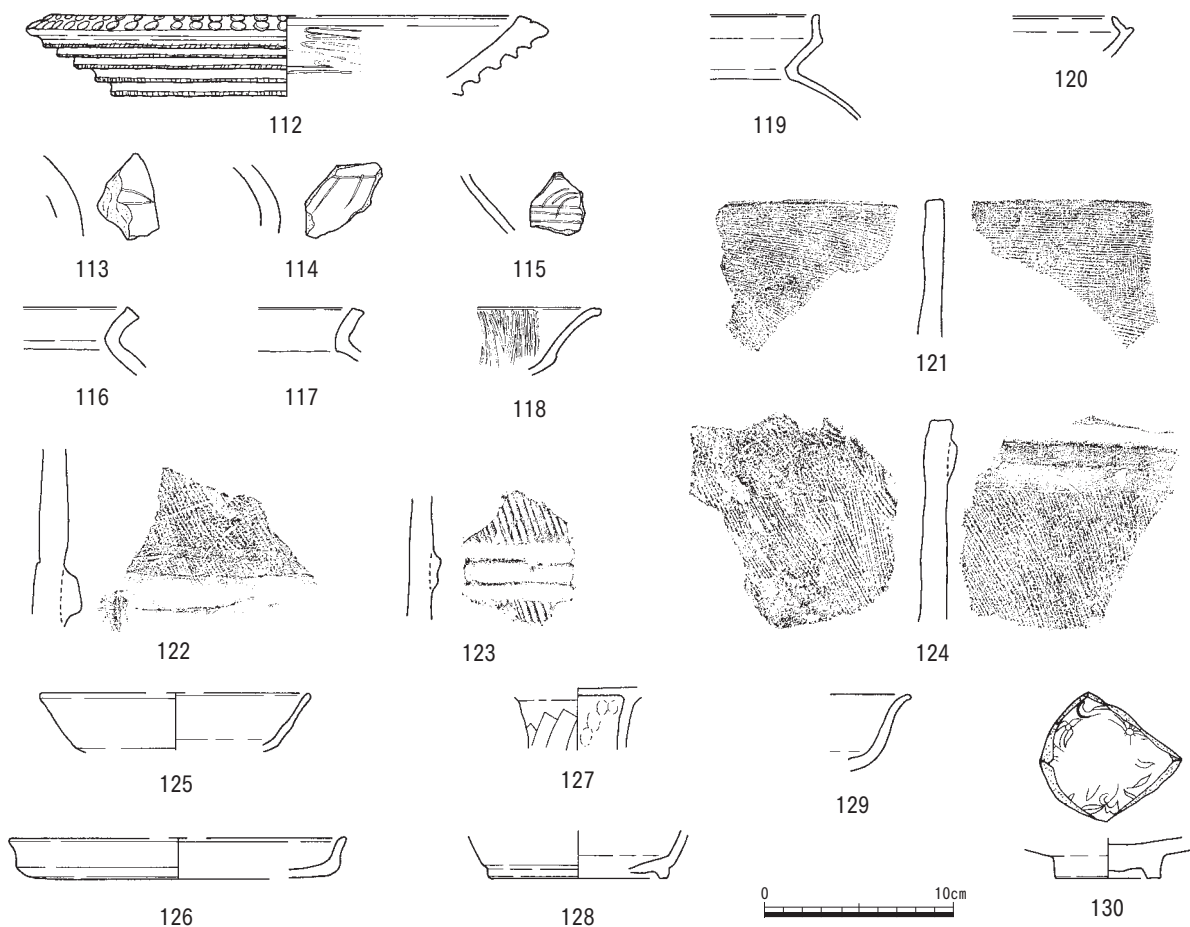
第47図 溝16出土遺物（1/4）

東西に流走する溝17は、東部では溝16の南肩に接している。埋土は、オリーブ黒色（第7図第44層）～灰色シルト（第6図第28層）である。上面幅約50cm、検出面からの深さ約20cmの規模で、溝底の海拔は東端が1.9m、西端が1.8mを測る。遺物は土師器細片が出土しているが、時期を明らかにできるものはない。

2 中世以前の遺物

この項では、主に近世造成土から出土した中世以前の遺物を取り上げる。

弥生時代の遺物は後期の甕などが主体であるが、前期～中期の土器も認められる。壺肩部に線刻が見られる113～115は、113が木葉文、114がシカ、115は円弧が描かれていると思われる。古墳時代の遺物は土師器119、須恵器120、埴輪121～124などが出土している。古代の遺物には丹塗りの土師器杯125・126・高杯127、須恵器128がある。中世の遺物は、掲載した青磁129、白磁130以外にも、土師器の鍋・釜や瓦質土器の羽釜などがある。



第48図 近世造成土及び遺構出土の中世以前の遺物（1/4）

第4章 自然科学的分析

第1節 岡山城二の丸跡金属加工関連遺物の自然科学分析

公益財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所保存科学室

伊藤 幸司

1 はじめに

坩堝と、板金などの地金のエックス線透過写真撮影、蛍光エックス線成分分析を行なった。

対象とした坩堝は直径10cm以下の小型のもので、いわゆる鑄造に用いられたものではない。刀剣装具などの加飾に用いるため、成分を調整した地金（板金）を得るための溶解に使用されたものと考えられる。これと関連するのが板金である。板金には様々な形状のものがあるが、丸まったものは切断されて使用した残部であることを物語っており非常に興味深い。

エックス線透過写真撮影の調査により、坩堝に残存する金属粒や板金の成分の偏析の有無などの確認を、成分分析からは板金の種別や坩堝との関連性を検討した。

表2 対象資料一覧

資料番号	掲載番号	整理番号	種別	備考	X線撮影	成分分析
OKB18001	100	4	坩堝		●	●
OKB18002	98	9	坩堝	外面口縁の一方にスラグ付着	●	●
OKB18003	110	10	坩堝		●	●
OKB18004	-	14	坩堝	緑青あり	●	●
OKB18005	106	34	坩堝		●	●
OKB18006	109	47	坩堝		●	●
OKB18007	97	58	坩堝		●	●
OKB18008	94	59	坩堝	内面緑青あり、外面口縁赤化	●	●
OKB18009	96	60	坩堝	外面口縁にスラグ付着	●	●
OKB18010	93	61	坩堝	小さい	●	●
OKB18011	95	64	坩堝		●	●
OKB18012	102	66	坩堝		●	●
OKB18013	107	71	坩堝		●	●
OKB18014	-	-	鋳滓	羽口片(もしくは炉壁片)含む	●	
OKB18015	-	-	鋳滓	羽口片(もしくは炉壁片)含む	●	
OKB18016	M20	9①	金具		●	●
OKB18017	-	9③-1	切れ端		●	
OKB18018	-	9③-2	切れ端		●	●
OKB18019	-	18⑨	棒状		●	
OKB18020	-	18⑩-1	切れ端		●	
OKB18021	-	18⑩-2	切れ端		●	
OKB18022	-	18⑩-3	切れ端		●	
OKB18023	-	18⑩-4	切れ端		●	
OKB18024	-	18⑩-5	切れ端		●	●
OKB18025	-	19②	板材		●	●
OKB18026	-	20⑤-1	切れ端		●	
OKB18027	-	20⑤-2	切れ端		●	●
OKB18028	-	20⑤-3	切れ端		●	
OKB18029	-	20⑤-4	切れ端		●	
OKB18030	-	20⑤-5	切れ端		●	
OKB18031	-	20⑤-6	切れ端		●	
OKB18032	-	20⑤-7	切れ端		●	
OKB18033	-	20⑤-8	切れ端		●	
OKB18034	-	20⑤-9	切れ端		●	
OKB18035	-	20⑤-10	切れ端		●	
OKB18036	-	20⑤-11	切れ端		●	
OKB18037	-	20⑤-12	切れ端		●	
OKB18038	-	20⑤-13	切れ端		●	
OKB18039	-	20⑤-14	切れ端		●	
OKB18040	-	20⑤-15	切れ端		●	
OKB18041	-	20⑤-16	切れ端		●	●
OKB18042	-	23④-1	切れ端		●	
OKB18043	-	23④-2	切れ端		●	
OKB18044	M23	38	銅片 (折りたたみ)		●	●
OKB18045	M27	40②	板材		●	●
OKB18046	M28	42②	切れ端		●	
OKB18047	M32	48⑩	塊		●	●
OKB18048	M26	49⑩	板材		●	●
OKB18049	M24	52③	棒状		●	●
OKB18050	M22	55⑫-1	銅片		●	●
OKB18051	-	55⑫-2	銅片		●	
OKB18052	-	55⑫-3	銅片		●	
OKB18053	M25	59	銅片 (折りたたみ)		●	●
OKB18054	-	65⑨	針状		●	
OKB18055	-	73⑫-1	銅片		●	
OKB18056	-	73⑫-2	銅片		●	●
OKB18057	-	75	板状		●	●
OKB18058	-	77⑤	小籠?		●	●
OKB18059	-	77⑥	銅片		●	●

2 エックス線透過写真撮影

坩堝13点、鉍滓2件、板金など地金59点の撮影を行なった。得られた画像を第49・50図に示す。

全ての坩堝に溶解した地金と思われる金属らしき画像が映し出された。今回対象とした坩堝中最小のOKB18010について、管見では、これまでに実見した同様の坩堝のほとんどに極細粒の金が付着していたが、本例では確認できなかった。

板金など地金について、エックス線透過写真からは目立った偏析は見られなかった。

3 蛍光エックス線成分分析

坩堝13点と、板金は44点中17点を選択し成分分析を行なった。

坩堝の成分分析には、エネルギー分散型蛍光エックス線分析装置DX95を使用し、溶解した金属成分を反映していると思われる付着物を非破壊で測定した⁽¹⁾。

板金など地金の成分分析には微小部分分析用エネルギー分散型蛍光エックス線分析装置EagleIIを用い、表面を非破壊で分析した⁽²⁾。

結果

坩堝の分析結果として、検出した成分のうち胎土に拠ると思われるもの、埋蔵中の影響に拠ると思われるものを除外し、溶解した地金に起因すると考えられる銅(Cu)・亜鉛(Zn)・ヒ素(As)・鉛(Pb)・ビスマス(Bi)・銀(Ag)・錫(Sn)の7元素に着目し、その結果を一覧にした(表3)。地金については、Cu・Zn・As・Pb・Snの5元素に着目した(表4)。

坩堝の分析結果を概観すると、測定に供したほとんどから鉛を検出した。その多寡は様々であるがOKB18001からの検出量は65%にも上る。OKB18003・18004・18011・18012も25~45%と多い。坩堝の分析で検出する鉛の量は、溶解した地金成分中の鉛の量比と一致しないケースが多いことが判っている(伊藤幸司2009)。溶解した地金中に含まれる鉛よりも、坩堝に残存する鉛の量比が多く検出される傾向がある。このため、地金OKB18018・18047・18056から検出された鉛の量は、多量に検出した坩堝5点の値とは大きく異なりはするが、関連を否定するものではない。亜鉛はOKB18003・18007・18012・18013の4点の坩堝から検出した。真鍮など亜鉛を含む地金の溶解に用いた坩堝は、加熱による亜鉛の蒸散で坩堝胎土が汚損されるため、成分分析では多量に検出することが多い(伊藤幸司2008)が、今回の4点からの検出量はさほどでもない。また、分析に供した17点の地金から亜鉛を検出したものは無い。OKB18008は銅と少量のヒ素を検出しており特徴的である。OKB18010は極少量の金属を溶解するための坩堝である。大坂城跡を始め他所で出土した同様の坩堝の内面には金色の小粒が点在し、分析により金(Au)を検出した。OKB18010も同様の用途である可能性が高いと考え、付着物などの観察を行なったが確認できなかった。分析の結果、銅と多量の銀を検出、鉛やヒ素、ビスマスなどの検出量はごく微量で夾雑物の範囲を超えない。よって、溶解したであろう地金の成分は銅と銀の合金と考えて問題ない。

続いて地金に目を向けると、分析に供した17点の全ての主成分は銅で、その内13点がほぼ純銅という結果であった。OKB18018・18056は銅・鉛・錫を、OKB18057からは銅・銀を検出した。今回成分分析に供した中で唯一塊状のOKB18047からは銅・鉛を検出した。

表3 坩堝分析結果一覧

資料番号	種類	Cuk		Znk		Ask		Pbl		Bil		Agk		Snk		その他
		int	wt%	int	wt%	int	wt%	int	wt%	int	wt%	int	wt%	int	wt%	
OKB18001	坩堝	312.01	28.96					157.50	65.57							5.47
OKB18002		101.26	43.19			68.37	9.23	4.61	9.05							38.53
OKB18003		219.68	34.35	10.77	18.53			37.79	30.86							16.26
OKB18004		350.12	36.31			15.63	0.46	101.04	46.95					3.65	3.75	12.53
OKB18005		1079.71	94.52					4.86	3.10					0.99	0.71	1.67
OKB18006		382.72	76.29			46.41	4.06	4.44	5.60							14.05
OKB18007		597.92	80.06	3.60	5.16	15.24	0.96	0.16	0.14					3.15	3.23	10.45
OKB18008		189.36	59.54			22.74	2.63									37.83
OKB18009		489.95	80.86			6.30	0.48	0.78	0.84	0.36	0.12					17.70
OKB18010		563.92	50.21			3.69	0.10	1.19	0.45	1.79	0.20	111.16	46.78			2.26
OKB18011		38.79	12.39					32.01	34.75					4.96	12.39	40.47
OKB18012		177.06	63.45	2.85	11.13			11.60	25.42							0.00
OKB18013		521.93	78.47	3.15	5.06	21.11	1.42	0.99	0.95					4.02	4.45	9.65

表4 地金分析結果一覧

処理番号	種類	Cuk		Ask		Pbl		Agk		Snk		その他
		int	wt%	int	wt%	int	wt%	int	wt%	int	wt%	
OKB18016	板状、加飾	1173.55	79.05			0.62	0.08	0.26	0.14	0.10	0.13	20.60
OKB18018	板状、三角形	843.01	34.53			28.70	5.73	0.07	0.04	3.77	5.85	53.85
OKB18024	板状、長方形	1066.77	64.47	0.07	0.01	0.53	0.23	0.29	0.28	0.08	0.22	34.79
OKB18025	板状、長方形	1076.01	74.78			0.23	0.12	0.30	0.35	0.07	0.21	24.54
OKB18027	板状、長方形折曲	1121.66	77.82	0.06	0.01	0.14	0.07	0.08	0.10	0.02	0.08	21.92
OKB18041	板状、三角形	1202.49	80.29			0.25	0.13	0.14	0.17	0.03	0.08	19.33
OKB18044	板状、折曲	958.10	87.38			0.37	0.26	0.46	0.72	0.05	0.19	11.45
OKB18045	板状、長方形	1128.75	83.53			0.88	0.52	0.47	0.62			15.33
OKB18047	塊状	806.33	74.62			16.74	10.83			0.14	0.69	13.86
OKB18048	板状、長方形	1255.79	81.03			0.86	0.44	0.36	0.40	0.05	0.14	17.99
OKB18049	塊状	1111.61	88.74			0.34	0.22	0.09	0.13			10.91
OKB18050	板状、切断片湾曲	985.07	70.24			0.09	0.05	0.48	0.53			29.18
OKB18053	板状、細長折曲	903.18	64.58	0.05	0.01	0.16	0.07	1.05	1.11	0.09	0.26	33.97
OKB18056	板状、細長	995.27	78.91			2.51	1.44	0.24	0.31	1.02	3.73	15.61
OKB18057	板状、台形	1156.45	73.63			0.44	0.20	0.09	0.09			26.08
OKB18058	板状棒状、細長	1112.15	84.53			0.25	0.15	0.12	0.17			15.15
OKB18059	板状、長方形	709.01	51.81			0.22	0.08	0.15	0.12	0.08	0.18	47.81

4 まとめ

検出した成分の組み合わせからグルーピングしてみると次のようになる。

純銅 坩堝：OKB18009、地金：OKB18016・18024・18025・18027・18041・18044・
18045・18048・18049・18050・18057・18058・18059

銅-鉛（ヒ素）系 坩堝：OKB18001・18002・18008、地金：OKB18047

銅-鉛-亜鉛系 坩堝：OKB18003・18012、地金：該当なし

銅-鉛-錫系 坩堝：OKB18004・18005・18011、地金：OKB18018・18056

銅-銀系 坩堝：OKB18053、地金：OKB18010

銅-ヒ素系 坩堝：OKB18008

刀剣装具などに見られる金工技法として「煮色」と呼ばれるものがある。これは成分の異なる板金で造形した器物を煮色液で煮込むことによって強制酸化し、成分組成ごとに異なる発色を得るものである（長野裕1998）。想像をたくましくして今回の分析結果をこれに当てはめるならば、純銅は「素銅（すあか）」、銅-銀系は「四分一（朧銀）」、銅-ヒ素系は「黒味銅」に該当する。しかし、銅-銀系の地金は銀の量比が少なく四分一とは言い難く、坩堝も板金を加工するための素材を得るには容量が少なく、坩堝OKB18053と地金OKB18010は直接関連しないと思われる。更に、鉛を含む地金については煮色着色には向かないので、別の用途を考えねばならない。このように短絡的に全てを当てはめることは

第4章 自然科学的分析

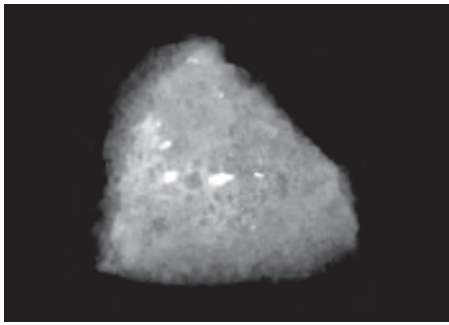
できないが、小型の埴塼、銅合金系の板金の出土は金工の中でも限られた作業が行なわれていたことを示しており、当時の金工技術だけでなく、当地のあり方を知るためにも重要な情報となる。今回のように成分分析が試みられた例はあまり多くない。同様の遺物構成での出土がみられたならば、是非とも成分分析を行ない事例を蓄積していただきたい。

註

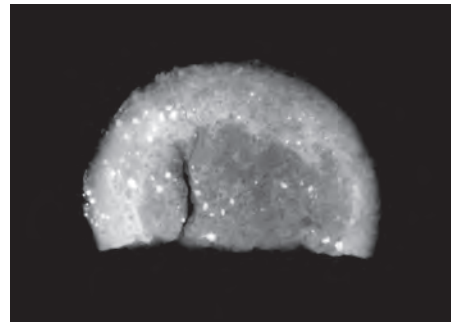
- (1) エネルギー分散型蛍光X線分析装置DX95（エダックス社製、大阪歴史博物館設置）を使用した。測定条件は、対陰極ロジウム（Rh）、半導体検出器、管電圧40kV、管電流25～65 μ A、測定雰囲気真空、測定範囲 ϕ 5 mm、測定時間100～220sec（デットタイム補正有）である。半定量的な含有量（wt%）の算出は、当該機に装備されている専用ソフトを使用し、標準試料を1点測定してノンスタンダード法で用いる係数テーブルを補正して行なった。
- (2) エネルギー分散型微小部蛍光X線分析装置EagleII（エダックス社製、大阪歴史博物館設置）を使用した。測定条件は、対陰極モリブデン（Mo）、半導体検出器、管電圧40kV、管電流500～800 μ A、測定雰囲気真空、測定範囲 ϕ 100 μ m、測定時間300～600sec（デットタイム補正有）である。半定量的な含有量（wt%）の算出は、当該機に装備されている専用ソフトを使用した。

参考文献

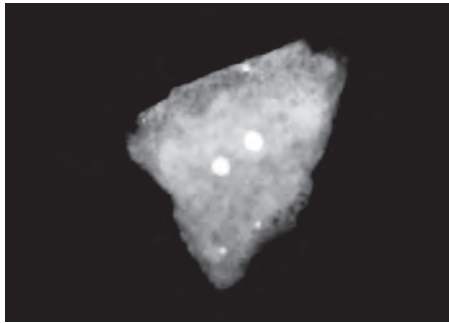
- 長野裕・井尾健二1998『金工の着色技法』、理工学社
- 伊藤幸司2008「把手付埴塼の復元的研究－真鍮地金の調合について－」『日本文化財科学会 第25回大会 研究発表要旨集』 pp208-209
- 伊藤幸司2009「埴塼に残る金属成分の解釈－鉛の多寡から推し量るべきこと－」『日本文化財科学会 第26回大会 研究発表要旨集』 pp238-239



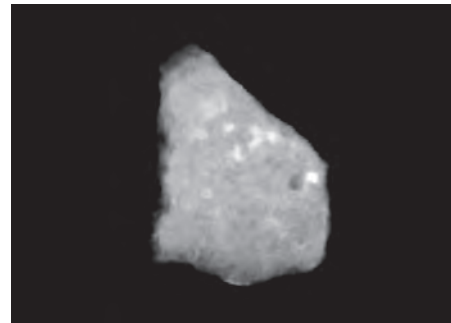
OKB18001



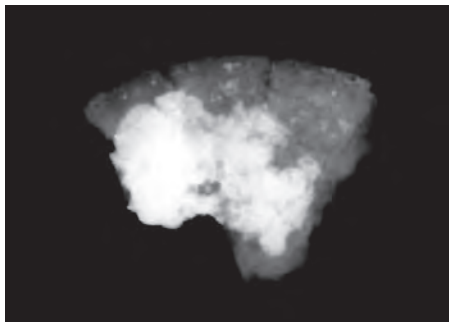
OKB18002



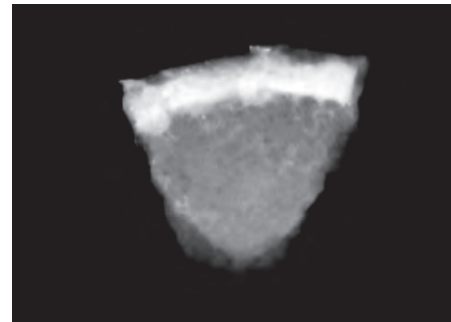
OKB18003



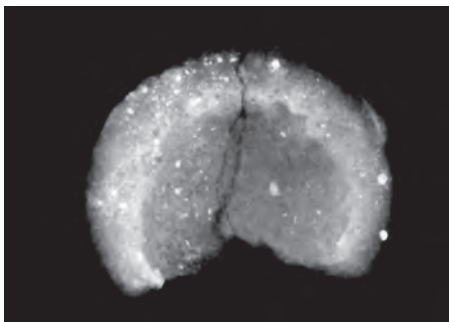
OKB18004



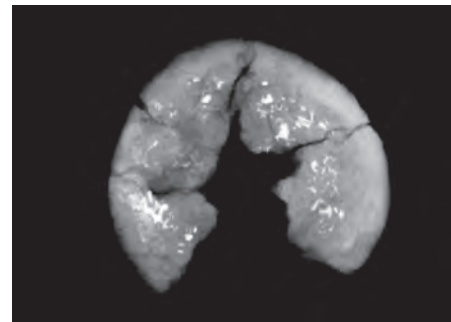
OKB18005



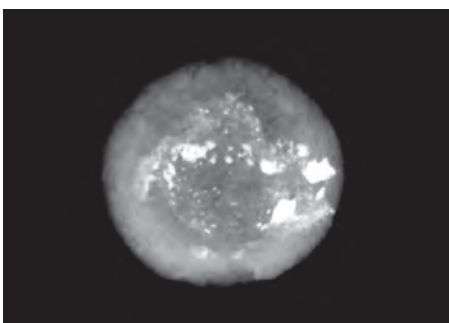
OKB18006



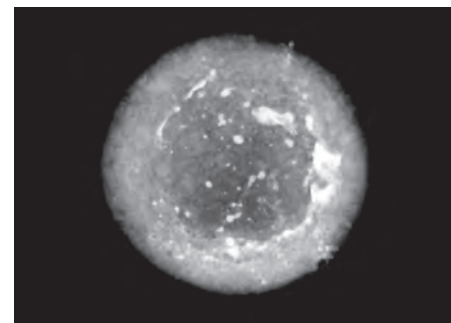
OKB18007



OKB18008

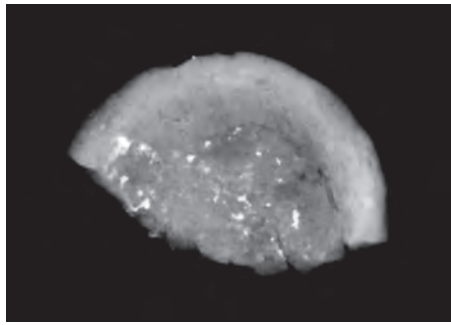


OKB18009

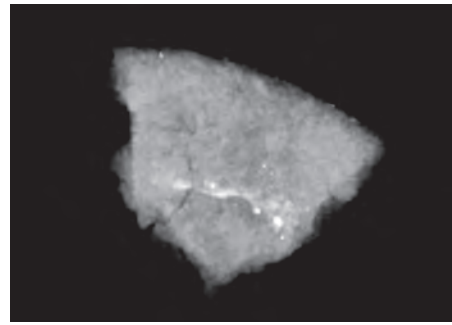


OKB18010

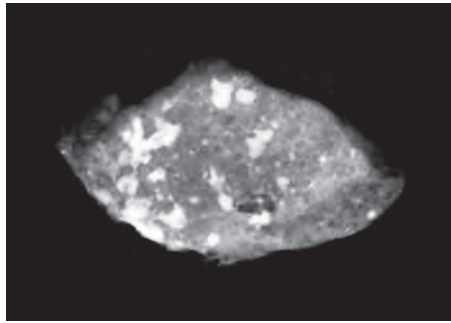
第49図 エックス線透過写真1



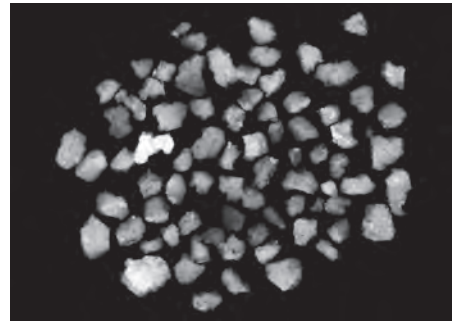
OKB18011



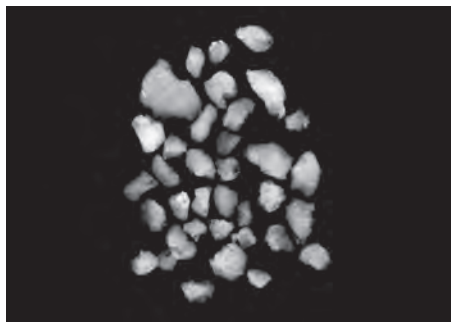
OKB18012



OKB18013



OKB18014



KB18015



OKB18016-30

OKB18016-30



OKB18031-52

OKB18031-52



OKB18053-59

OKB18053-59

第50図 エックス線透過写真2

第2節 岡山城二の丸跡出土人骨について

独立行政法人 国立科学博物館 人類研究部

坂上 和弘

本書は、岡山県岡山市北区内山下1-5-5に所在する、「岡山城二の丸跡」から出土した人骨に関する形態学的な報告書である。本遺跡は近世の武家屋敷跡であるが、人骨は16世紀末までに埋没した溝15の東端部から出土している。

人骨は国立科学博物館へ輸送され、清掃・修復・保存処理・同定が行われた。人骨の修復にはButvar B76のアセトン希釈溶液を接着剤として用いた。報告書作成後の本遺跡出土人骨の保管・管理は、岡山県古代吉備文化財センター⁽¹⁾（岡山県岡山市北区西花尻1325-3）で行われる予定である。

人骨の撮影はキャノンEOS 5 DMark IIを用い、1.0メートルの距離から100mmマクロレンズで撮影した。

計測は馬場(1991)のマルチン法に従って実施した(表5)。本文中の比較集団としてはSakaue(2012)のHayaoke集団とKamekan集団の各平均値の平均を算出して用いた。また、Sakaue(2013)の江戸前期人骨やSakaue(2015)の中世時代人骨も比較集団として用いた。

本遺跡出土人骨の性別は、眉弓の有無および乳様突起の形態から判断した(坂上・安達, 2009)。また、死亡時年齢は、頭蓋の縫合を用いたMeindl and Lovejoy(1985)の方法を用いて判断した。

歯の保存状況を示す歯式では、数字は残存する歯を示し、下線は形成途上を意味する。丸数字とアルファベットは齶触とその場所を意味する(咬合面「o」、頬側面「b」、舌側面「l」、隣接面「c(齶歯が存在する側に表記)」)、歯槽膿漏「p」)。ローマ数字はブロカの咬耗度を示す。また、「歯槽閉鎖」の行で黒く塗りつぶされた箇所は歯槽が閉鎖していることを示している。

人骨

本遺跡から出土した人骨は1個体のみで下顎骨を除くほぼ完形の頭骨のみである(第51図)。骨の色調は茶褐色を呈しており、泥質土に包埋されて保存状態は極めて良好であるが、左頬骨弓部と左第三大臼歯が散逸している。これほど保存状態が良好にも拘らず、下顎骨や頸椎も散逸しており、解剖学的位置を維持していないと言える。

【性別】

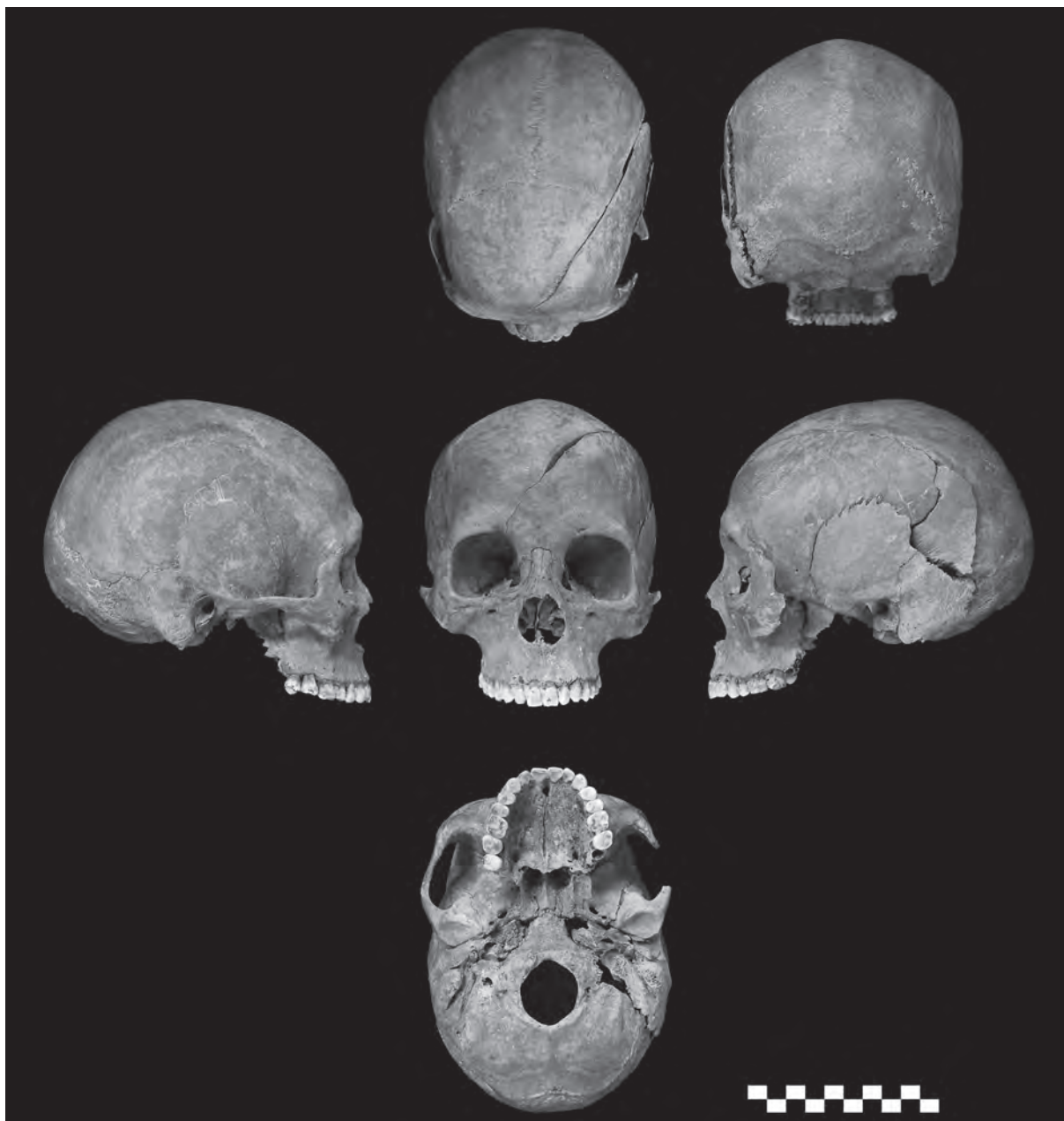
前頭骨の眉弓は発達し、乳様突起の発達も強い。また、前頭結節は認められない。従って「男性」と推定される。

【死亡時年齢】

蝶後頭軟骨結合は癒合が完了し、第三大臼歯は萌出している。頭蓋縫合の閉鎖状況は頭蓋冠部が 45.2 ± 12.6 歳、側頭部が 41.1 ± 10.0 歳であるため、死亡時年齢群は「中年(おおよそ30歳~60歳未満)」と推定される。

【形態特徴】

本人骨の頭蓋最大長は180.2mmと、江戸男性平均(179.5mm)よりも大きく、頭蓋最大幅は134.4mmと、江戸男性平均(139.8mm)よりも小さい。バジオン・ブレグマ高は132.0mmと、江戸男性平均(137.1mm)よりも小さい。その結果、長幅示数は74.6と「長頭」に、長高示数は73.3と「中頭」



第51図 岡山城二の丸跡出土人骨

に属する。頭蓋三主径の平均値である頭蓋モズルスは148.9と、江戸男性平均（152.2）よりも小さい。頭蓋の前面観は四角い印象を受ける。上面観では、頭頂結節の発達が弱く細長い楕円形を示す。上面から見ると頬骨弓は完全に見えるため、「頭頬弓」と言える。プレグマ部に薄い骨増殖が認められるが、これは、プレグマ部に何らかの外力がかかることで形成された可能性がある。後面観では、頭頂結節から側壁が垂直に下がる「家型」である。側面観では脳頭蓋が比較的低く、前後が長い楕円形である。前頭骨は後方に立ち上がる。前頭結節の発達は弱く、外後頭隆起の発達も弱い。側頭筋線は全域で明瞭であり、その領域は上方に広がり、頭頂結節に達している。乳様突起は強く発達し、尖端は下方に向く。外耳孔の形状は楕円形で、長軸が斜めである。頬骨には縁結節が認められる。前頭骨の頬骨突起は外側に張り出す。下顎窩は深く広い。左下顎窩前方の関節結節は不明瞭で、表面に多孔質状の骨変形が認められるため、顎関節症が疑われる。頬骨弓の下縁は細く、筋粗面は不明瞭である。大後頭孔の辺縁は滑らかである。後頭顆は高く隆起し、弯曲は強い。また、関節面の後方延長が認められる。

舌下神経管は二分しない。

上顔幅は101.3mmと、江戸男性平均（104.4mm）よりも小さい。中顔幅は101.1mmと、江戸男性平均（98.6mm）よりも大きい。また、上顔高は72.8mmと、江戸男性平均（72.9mm）と同程度である。その結果、ウィルヒョウ上顔示数は72.0と「低顔」に属する。顔の正面観は中顔で四角い印象を受ける。眉間部は緩やかに膨らむ。眉弓は明瞭で、高く隆起する。眼窩上縁は直線的で厚い。眼窩上切痕は一つしか認められない。眼窩幅は43.5mmと、江戸男性平均（43.3mm）と同程度で、眼窩高は33.9mmと、江戸男性平均（34.9mm）よりも小さい。その結果、眼窩示数は77.9と「中眼窩」に分類される。鼻高は51.8mmと、江戸男性平均（53.0mm）よりも小さい。また、鼻幅は25.5mmと、江戸男性平均（25.1mm）と同程度である。その結果、鼻示数は49.2と「中鼻」に分類される。眼窩間部が広く、鼻根部の隆起は低い。鼻骨の隆起を示す鼻骨平坦示数は33.2と、江戸男性平均（35.5）よりも小さい。梨状口下縁は鋭く、梨状口の外側縁は平坦である。上顎骨間縫合部は平坦で、前鼻棘の突出は弱い。犬歯窩は明瞭に陥凹する。齒槽側面角は69.3度と江戸男性平均（66.1）よりも大きく、突顎性はやや弱いと言える。歯の保存状況は以下の通りである。

咬耗度	I	I	II	II	I	II	I	II	II	I	II	I	I	II	II	
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	
咬耗度																

歯の表面には歯石が固着している。齲蝕は認められない。

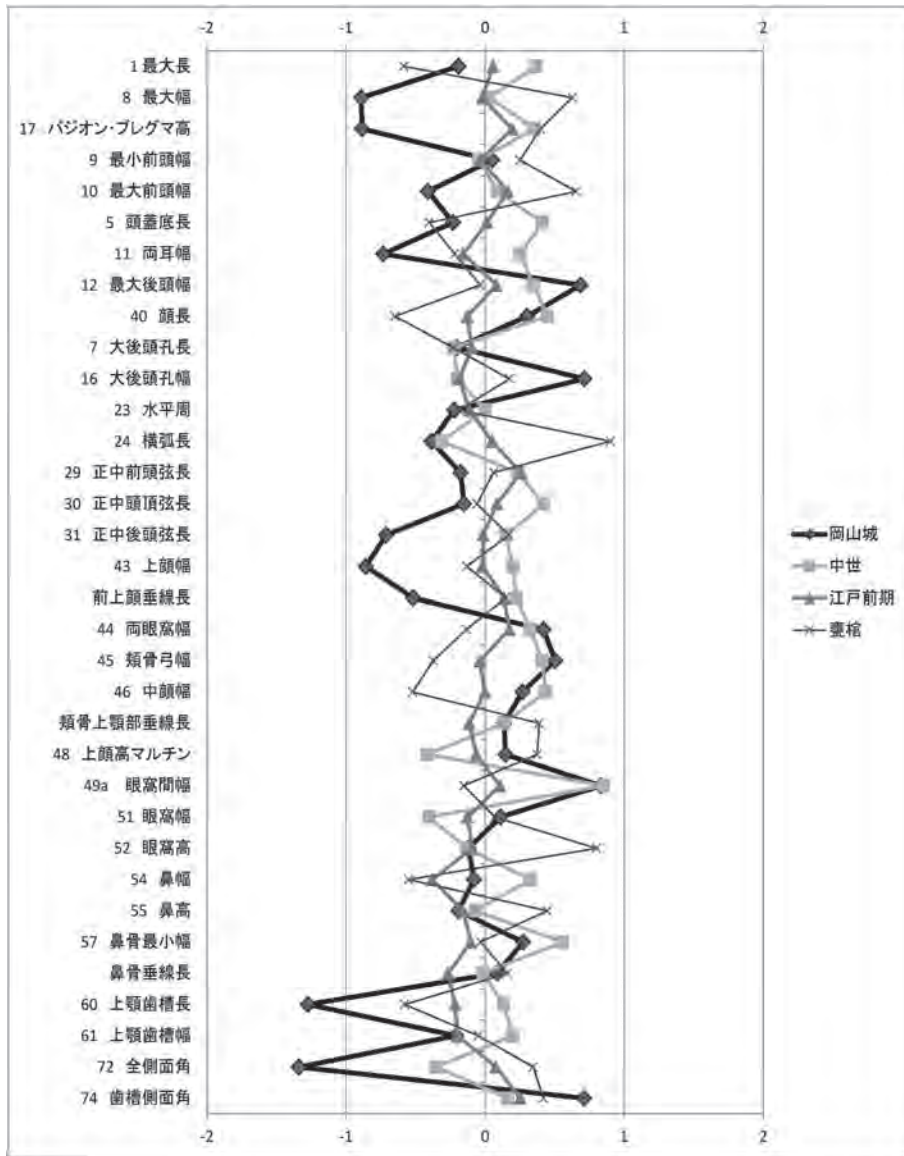
以上をまとめると、本人骨は、江戸平均よりも長頭でやや低い頭蓋冠ではあるが、顔面形態は平均に近い個体と言える。江戸時代の早桶出土人骨の頭蓋計測値を基準とした、本遺跡出土人骨、中世時代人骨、江戸前期人骨、甕棺出土人骨の偏差折線を第52図に示す。この図を見ると、本遺跡出土人骨が頭蓋冠部は小さい傾向にあり、顔面上部の幅は小さいが、顔面中央部の幅は大きいことが理解できる。また、相関係数による主成分分析結果が表6である。主成分負荷量を見ると、第1主成分では「全体的なサイズ」、第2主成分では「脳頭蓋の幅方向の大きさと顔を奥行き」を、第3主成分では「頭蓋と眼窩部の幅」を示すと解釈できる。第2主成分得点と第3主成分得点をプロットしたのが第53図になる。これを見ると、本遺跡出土人骨は中世人骨の分布範囲のやや辺縁に位置し、江戸前期人や早桶出土人骨のほぼ中央に位置している。それに対して甕棺出土人骨の範囲の外に位置している。従って、本遺跡出土人骨の形態は、中世～江戸に至る庶民の平均的な顔つきを示していると言える。

【損傷】

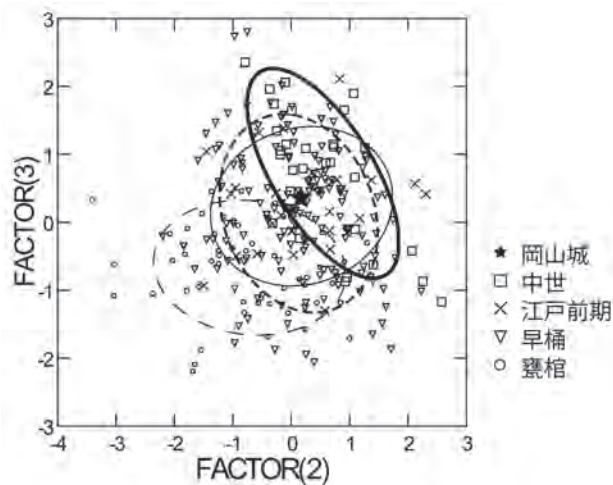
本遺跡出土人骨には3種類の損傷痕が認められる。主に、1) 鼻部の陳旧骨折、2) 頭頂部の斬創、3) 側頭部の打撃痕、4) 左右乳様突起先端の破損、である。以下順に記述する。

本遺跡出土人骨の左右鼻骨先端部は左右上顎骨上顎骨突起から陥凹した状態で治癒している（第54図中の「←」）。従って、左右鼻骨の陳旧圧迫骨折と判断できる。また、前鼻棘周辺には骨増殖と部分的な陥凹（右上顎骨）が認められ、前鼻棘が変形している（第54図中の「○」）。これも陳旧骨折治癒の可能性がある。鼻骨と前鼻棘の陳旧骨折が生前に同じ時期に生じたものかは不明である。

前頭骨中央部から左頭頂骨の後方部（頭頂側頭縫合の直前まで）にかけて、平坦な平滑面と直線状の切縁が存在する（第55・56図）。この損傷はBoylston（2000）の刀創の定義「直線的である」、「明瞭な切縁がある」、「平滑な面がある」が揃っているため、刀創と判断できる。本損傷の前方端から後方



第52図 偏差折線図



第53図 第2及び第3主成分における主成分得点のプロット図

楕円は1標準偏差範囲を示し、太い実線が中世人骨、細い実線が江戸前期人、太い破線が早桶出土人骨、細い破線が甕棺出土人骨の範囲を示す。

表6 主成分分析の結果

	1	2	3	4	5	6
1 最大長	0.671	0.217	0.273	-0.328	0.141	-0.320
8 最大幅	0.387	-0.645	0.005	-0.123	0.088	0.376
17 バジオン・プレグマ高	0.529	-0.011	-0.318	-0.364	0.272	0.113
9 最小前頭幅	0.647	-0.257	0.050	0.317	0.177	-0.189
10 最大前頭幅	0.492	-0.608	0.041	0.094	0.072	-0.006
5 頭蓋底長	0.503	0.394	-0.158	-0.130	0.066	-0.087
11 両耳幅	0.610	-0.244	0.156	0.034	-0.238	0.382
12 最大後頭幅	0.449	-0.126	0.072	-0.296	0.038	0.149
40 顔長 (ba-Pr)	0.430	0.653	0.061	-0.278	0.077	0.013
14 頭蓋最小幅	0.521	-0.266	-0.152	0.147	-0.311	0.036
7 大後頭孔長	0.305	-0.146	0.053	-0.116	-0.130	-0.507
16 大後頭孔幅	0.185	-0.229	-0.116	-0.105	-0.126	-0.327
23 水平周	0.776	-0.130	0.211	-0.299	0.114	-0.179
24 横弧長	0.514	-0.488	-0.216	-0.243	0.382	0.209
29 正中前頭弦長	0.473	-0.057	-0.015	-0.363	0.295	0.092
30 正中頭頂弦長	0.444	0.052	0.165	-0.237	0.166	-0.317
31 正中後頭弦長	0.402	-0.085	-0.060	-0.317	0.265	0.005
43 上顔幅	0.815	0.000	0.141	0.264	-0.071	-0.141
前上顔垂線長	0.116	0.137	-0.165	0.475	0.309	-0.298
44 両眼窩幅	0.817	0.044	0.144	0.228	-0.154	-0.169
45 頬骨弓幅	0.731	-0.031	0.189	0.123	-0.324	0.166
46 中顔幅	0.655	0.280	0.091	0.075	-0.370	0.209
頬骨上顎部垂線長	0.094	0.181	-0.505	0.128	0.014	-0.061
48 上顔高マルチン	0.455	0.140	-0.663	0.089	-0.123	0.018
48d 頬骨最小高	0.432	0.361	-0.239	-0.032	-0.142	0.351
49a 窩間幅	0.573	0.114	0.418	0.372	0.181	0.082
50 眼窩間幅	0.538	0.119	0.381	0.435	0.161	0.071
51 眼窩幅	0.546	-0.124	-0.211	0.083	-0.257	-0.366
52 眼窩高	0.285	-0.379	-0.504	0.081	-0.067	-0.196
54 鼻幅	0.512	0.233	0.298	0.028	-0.103	0.124
55 鼻高	0.415	0.103	-0.660	0.153	-0.150	0.013
57 鼻骨最小幅	0.277	0.163	0.030	0.476	0.519	0.170
鼻骨垂線長	0.055	0.122	-0.386	0.331	0.518	0.098
60 上顎歯槽長	0.352	0.592	-0.119	-0.277	0.071	-0.010
61 上顎歯槽幅	0.563	0.165	-0.214	-0.061	-0.198	0.216
累積寄与率 (%)	25.890	8.348	7.471	6.303	5.218	4.682

太字は負荷量の絶対値が0.3よりも大きい値を意味する。

端までの直線距離は148mmで、損傷に沿って計測した弧長は210mmである。損傷の間隙は前端部における5mmが最小である。平滑面は損傷の正中側（遺体の右側）に存在している。ただ、損傷全体に平滑面が見られるわけではなく、破損し平滑面が見られない部分もある。全ての平滑面は頭蓋内腔に達しているが、前方の方がやや浅い印象を受ける。前方端からは亀裂骨折が派生しているが（第57図）、これは右眼窩内に入り、右上顎骨に達している（第54図中の「⇒」）。それに対して、損傷の後方部は左側頭骨の乳様突起前方から頭蓋底にかけて亀裂骨折が発生しているだけでなく、損傷に接する左側頭骨が部分的に剥離している。また、損傷の後方端には明確な切れ込みが発生しており、ここで刃が止まったと推定される（第58図）。従って、損傷の威力は後方の方が前方よりも高いと推定される。また、損傷の平滑面はほぼ同一平面上に存在しており、損傷の平滑面がフィルム面に直交するように撮影したX線画像をみると（第59図）、骨欠損はほぼ一直線上に存在している。従って、本損傷は後方から頭頂部への1回の切り込みで形成されたと推定される。本損傷の平滑面は損傷の矢状側（遺体の右側）に存在していることから、後方からの斬撃の際、刃をやや矢状側に倒した状態で切り付けられたと考えられる。利器としては、刃渡り150mm以上で刃の厚さは少なくとも5mmの幅を持ったものが想定される。具体的には非常に鋭利な日本刀や薙刀などが想定される。本損傷は、派生している骨折線の走行が比較的直線的であり、破断面は骨表面の色調と同じで、治癒痕跡も認められない。従って、本損傷は死亡前後に形成されたものと推定される。この損傷は脳の損傷や脳脊髄液の流出が想定されるため、もし生前に切り込みが行われたのならば、この損傷が直接的な死因と考えられる。

左の蝶前頭縫合部と左側頭骨鱗状部には、長軸4mm、短軸3mm程度の不整形の打撃痕が認められる(第60図)。これらの損傷は礫などが該当箇所に強く当たった際に生じたと推定される。この損傷が形成された時期は不明であるが、前述の切り込みがなされた後に転倒して受傷した可能性がある。

左右乳様突起は先端に損傷があり、平滑面は存在しないが、比較的平坦な面を形成している。左側の損傷は前述の切り込みの際に形成されたものと解釈することも可能であるが、右側の損傷は単独であり、周辺には他の損傷がない。斬首などの後方からの斬撃は下顎枝や乳様突起先端部にカットマークを形成する場合がある(森本, 1987)。これらの損傷は平滑面が存在しないため、刀創と判断できない。

本人骨は致命傷と見なしうる損傷が頭頂部にあり、それに伴うと考えられる打撃痕が側頭部にある。従って、闘争等で死亡した中年男性と考えられる。また、鼻部の陳旧骨折があることから、生前から闘争に関わることのあった人物であった可能性がある。ただ、本人骨は闘争で亡くなりその直後に発見場所である溝に落ちた、と考えるには、下顎骨と頸椎が残存していない点で疑問が残る。下顎骨や頸椎は頭蓋と靭帯や筋肉で強固に結びついているため、仮に左右乳様突起の損傷が斬首によるものだったと仮定したとしても、下顎骨や頸椎が断片すら残存していないことは不自然である。もちろん、溝に入り込んだ後に白骨化し、さらに水流などで攪乱を受けて頭蓋のみが残存した可能性はありうる。ただ、下顎骨や頸椎よりも小さい左頭頂骨の剥離破片は残存しているため、この可能性は低い印象を受ける。また、晒し首などの白骨化まで野外に置かれていた後に溝へ遺棄された、と考えることにも疑問を感じる。なぜなら、本人骨では、日光による骨の白色化や動物による損壊など、野外に置かれた際に生じる損傷は認められていない。いずれにせよ、本遺跡出土人骨は非常に興味深い事例であり、本人骨に見られた損傷と埋葬状況の解釈には他例の調査が必要であろう。

註

(1) 岡山県教育委員会の機関

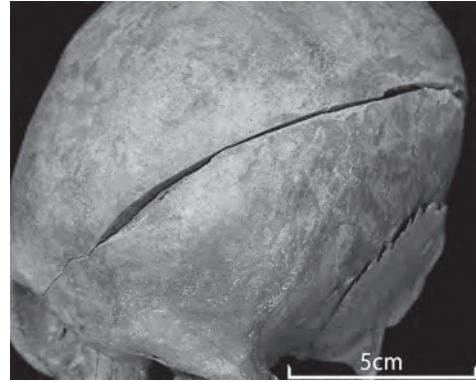
引用文献

- ・馬場悠男(1991)人骨計測法。『人類学講座 別巻1 人体計測法』雄山閣
- ・Boylston A. (2000) Evidence for weapon-related trauma in British archaeological samples. In: Cox M. and Mays S. (eds.) , Human Osteology in Archaeology and Forensic Science. Cambridge University Press, Cambridge, pp. 357-380.
- ・Meindl R. S. and Lovejoy C.O. (1985) Ectocranial suture closure: A revised method for the determination of skeletal age at death based on the lateral-anterior sutures. American Journal of Physical Anthropology 68:57-66.
- ・森本岩太郎 1987 中世における打ち首の技法 人類学雑誌95: 477-486
- ・Sakaue K. (2012) Craniofacial Variation among the Common People of the Edo Period. Bulletin of the National Science Museum Series D, 38:39-49.
- ・Sakaue K. (2013) Secular Changes in Craniofacial Morphology during the Edo Period of Japan. Bulletin of the National Science Museum Series D, 39: 9-18.
- ・Sakaue K. (2013) Secular Changes in Craniofacial Morphology during the Edo Period of Japan. Bulletin of the National Science Museum Series D, 39: 9-18.
- ・Sakaue K. (2015) Material report: The human skeletal remains excavated from the Yurakucho 1-chome site of the Muromachi period. Bulletin of the National Science Museum Series D, 41:13-40.
- ・坂上和弘、安達登(2009)日本人集団における頭蓋形態からの性判定法の評価。日本法医学雑誌63,125-140.

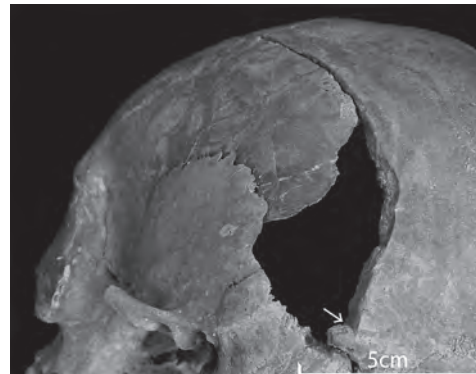


第54図 顔面部の損傷骨

矢印は鼻骨の陳旧骨折、白い楕円は前鼻棘の骨変形、二重矢印は刀創から派生した亀裂骨折を示す。



第57図 刀創の前方端の拡大図



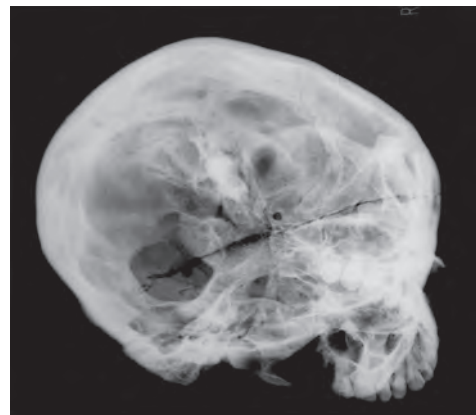
第58図 刀創の後方端の拡大図

図中の矢印は明確な切れ込みを示す。



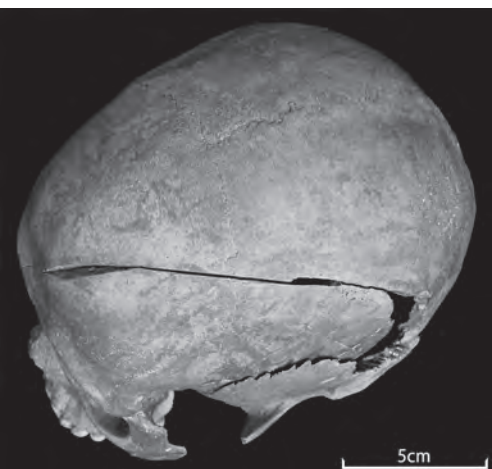
第55図 頭頂部の刀創の全景その1

この図は損傷の平滑面をレンズ面に平行に設置し撮影した。



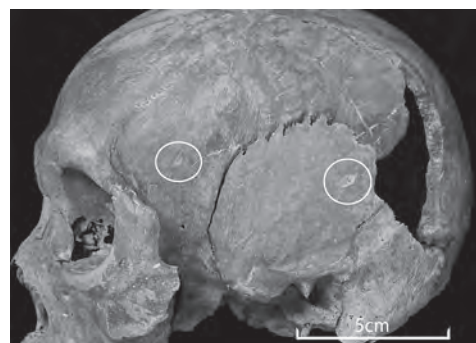
第59図 刀創部のX線画像

このX線は、損傷の平滑面がフィルム面に直交するように撮影した。



第56図 頭頂部の刀創の全景その2

この図は損傷の平滑面をレンズ面に直交するように設置し撮影した。



第60図 側頭部の打撃痕

図中の白い楕円が打撃痕を示す。

第3節 岡山城二の丸跡出土動物遺存体

岡山理科大学 生物地球学部

富岡 直人

本地点から、近世初頭帰属の動物遺存体が出土した。分類名を表7に示す。また、遺構と包含層での出土状況は表8に示す。

表7 出土動物遺存体リスト

軟体動物門	Mollusca	ウナギ目	Anguilliformes
腹足綱	Gastropoda	ハモ科	Muraenesocidae
吸腔目	Sorbeoconcha	ナマズ目	Siluriformes
アッキガイ科	Muricidae	ナマズ科	Siluridae
アカニシ	Rapana venosa	ナマズ	<i>Silurus asotus</i>
原始腹足目	Archaeogastropoda	コイ目	Cypriniformes
ミミガイ科	Halitidae	コイ科	Cyprinidae
アワビ属	Halotis	鳥綱	Aves
古腹足目	Vetigastropoda	キジ目	Galliformes
リュウテン科	Turbinidae	キジ科	Phasianidae
サザエ	<i>Turbo sazae</i>	カモ目	Anseriformes
斧足綱	Bivalvia	カモ科	Anatidae
ハマグリ目	Heterodonta	ハト目	Columbiformes
マルスダレガイ科	Veneridae	ハト科	Columbidae
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>	哺乳綱	Mammalia
バカガイ科	Mactridae	偶蹄目	Artiodactyla
シオフキガイ	<i>Macra veneriformis</i>	イノシシ科	Suidae
カキ目	Ostreoida	イノシシ類	<i>Sus scrofa</i> subsp. indet.
イタボガキ科	Ostreidae	シカ科	Cervidae
フネガイ目	Arcida	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>
フネガイ科	Arcidae	ウシ科	Bovidae
クマサルボウ	<i>Scapharca binakayanensis ursus</i>	ウシ	<i>Bos taurus domesticus</i>
ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i>	ウマ目(奇蹄目)	Perissodactyla
マルスダレガイ目	Veneroida	ウマ科	Equidae
イタヤガイ科	Prctinidae	ウマ	<i>Equus caballus</i>
イタヤガイ	<i>Pecten albicans</i>	ネコ目	Carnivora
脊椎動物門	Vertebrata	イヌ科	Canidae
硬骨魚綱	Osteichthyes	イヌ	<i>Canis lupus familiaris</i>
スズキ目	Perciformes	タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>
タイ科	Sparidae	ネコ科	Felidae
マダイ	<i>Pagrus major</i>	イエネコ	<i>Felis silvestris catus</i>
スズキ科	Lateolabracidae	ネズミ目	Rodentia
スズキ	<i>Lateolabrax japonicus</i>	ネズミ科	Muridae
カサゴ目	Scorpaeniformes	サル目(霊長目)	Primates
コチ科	Platycephalidae	ヒト科	Hominidae
マゴチ	<i>Platycephalus sp.</i>	ヒト	<i>Homo sapiens</i>
ボラ目	Mugiliformes		
ボラ科	Mugilidae		

1 腹足綱

アカニシ、アワビ属、サザエが出土した。それぞれ瀬戸内海の岩礁のある内湾から島嶼沿岸の潮間帯～潮下帯に生息する。

2 斧足綱

塩分濃度がやや低い内湾から、やや高い島嶼部にかけてみられる瀬戸内の砂底に生息するマルスダレガイ科ハマグリ、バカガイ科シオフキガイ、フネガイ科クマサルボウ、ハイガイ、イタヤガイ科イタヤガイと岩礁に生息するイタボガキ科が出土した。

第4章 自然科学的分析

このうちイタヤガイは水深10m以深の砂底に生息する種である。この貝種の右殻は深く、左殻は平らである。深みのある右殻は、貝杓として利用されることが多い。この種を利用した貝杓は、岡山城内より複数出土している。包含層、2.9m迄掘り下げのサンプルより右殻が出土しており、貝杓の可能性はある。

3 軟骨魚綱

アカエイの可能性のあるエイ目の尾棘が、土坑6より人為的な加工のない資料が出土した。

4 硬骨魚綱

瀬戸内海の塩水域に生息するタイ科マダイ、スズキ科スズキ、コチ科マゴチ、ボラ科、ハモ科、淡水～塩水に生息するコイ科、主に淡水に生息するナマズ科ナマズが出土した。

特にマダイが数多く出土したことは、以前の二の丸跡地点の発掘成果と共通している。マダイは瀬戸内海のやや深い水深の場所に生息する。遺構では22点が出土した。包含層からも2点が出土した。

5 鳥綱

土坑6よりキジ科の右足根中足骨、包含層より右上腕骨が出土した。目不明の鳥類の左尺骨が出土し、包含層よりカモ科左鳥口骨、窪地1よりハト科右大腿骨が出土した。

6 哺乳綱

イノシシ類、ニホンジカ、ウシ、ウマ、イヌ、タヌキ、イエネコ、ネズミ科、ヒトが出土した。

イヌやイエネコは、愛玩用のみならず、タカ類の餌や皮革製品、筆などの原料としての利用にも供された可能性がある。

偶蹄目と同定した資料の中で、土坑6から出土した右脛骨と右大腿骨は、ヒツジやヤギの可能性も検討したが、種が特定できていない。

イノシシとブタは、同定が困難なため、ここでは同一の分類としてイノシシ類という呼称を利用した。岡山城二の丸中電地点（富岡1998）では、同じく近世のイノシシ類が出土し、臼歯の乱喰の状況からブタと推定された。イノシシ類は、遺構から多く出土した。包含層からの出土量が極端に少ないことは、ニホンジカと対照的である。シカには小型の体格が多くみられたが、形態的にニホンジカと同定した。遺構3点に対し、包含層から11点出土した。

遺構から出土したウシの角突起のほとんどに鋸による切創が伴い、角を用いた偽鱗甲（富岡2001）の製作が天瀬遺跡以外にもこの地点で行われたことが推定された。一方で、遺構外から出土したウシの前頭骨に切創がみられるものはなかった。加工されたものと加工されなかったもので廃棄のプロセスが異なっていた可能性が考えられる。

謝辞：同定は、岡山理科大学、江川達也君（現笠岡市教育委員会）、大越司君、宇佐美礼恩君、中田昌吾君、中川雄貴君、沖井歩君、相羽湧斗君、大島義智君、今城一輝君にご助力を頂いた。記して感謝致します。

引用文献

富岡直人1998 「岡山城二の丸跡出土の動物遺存体」『岡山城二の丸跡 中国電力内山下変電所建設に伴う調査報告』（中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会）:pp.136-163

富岡直人2001 「岡山県天瀬遺跡出土動物遺存体の分析」『岡山県埋蔵文化財調査報告書154、天瀬遺跡・岡山城外堀跡』（岡山県教育委員会）:pp.89-111

表8 遺構及び包含層別の主な動物遺存体出土状況

遺構名	所属時期	軟体動物門		魚上綱		鳥綱	哺乳綱					調査時遺構・包含層名				
		腹足綱	有足綱	硬骨魚綱	軟骨魚綱		シカ	イノシシ or ブタ	ウシ/ウマ	イヌコ	イヌ		不明	その他		
井戸2	近世Ⅰ期	アカニシ6	ハマグリL1												No.38土坑	
土坑4	近世Ⅲ期														No.28土坑	
土坑5	近世Ⅲ期			1. マダイ鱧骨R											No.36土坑	
土坑6	近世Ⅱ期			9. マダイ鱧骨R 8. マダイ前頭骨L 6. マダイ前頭骨L 4. マダイ前頭骨L 101. タイ科尾椎M 102. マダイ前上顎骨R 103. マダイ前上顎骨L 104. タイ科前頭骨L 105. マダイ主聴蓋骨L 106. タイ科主聴蓋骨L 107. タイ科前頭骨R 108. タイ科前頭骨L 109. タイ科主聴蓋骨R 110. マダイ主上顎骨L	7. エビ尾椎M	5. キジ科足根中足骨R 3. 目不明、尺骨L								1. 側頭目・脛骨R 2. 側頭目・大腿骨R 111. ネズミ科・大腿骨R	No.29土坑	
土坑7	近世Ⅱ期							2. 脛骨L	1. 肩甲骨R							No.66土坑
土坑10	近世Ⅱ期			1. スズキ目方骨L 18. 目不明尾椎M												No.32土坑
土坑16	近世Ⅱ期															No.35土坑
土坑17	近世Ⅱ期	アカニシ2	ハマグリL35・R37 ハイカイR1 クマカルボウL1 イタホガキ科R1	18. ハモ科鱗骨L												No.40土坑
土坑18	近世Ⅱ期	アカニシ1	ハマグリ※													No.41土坑
土坑21	近世Ⅱ期	アワビ属※	ハマグリL49・R32 ハカガイL1											1. 目不明四肢骨・LR?		No.45土坑
土坑24	近世Ⅰ期	アカニシ3		8. コイ科咽頭骨L 7. タイ科上後頭骨M 1. ボラ科主聴蓋R 15. 目不明尾椎M 4. マダイ鱧骨L 9. マダイ主上顎骨R 10. マダイ鱧骨L												No.46土坑
土坑31	近世Ⅰ期			10. コチ科基礎後頭角M 5. ボラ科主聴蓋骨R												No.49土坑
土坑32	近世Ⅰ期			4. マダイ前頭骨L				1. ウシ前頭骨・角突起R						3. 目不明・肋骨L		No.42土坑

第4章 自然科学的分析

遺構名	帰属時期	獣足副	獣足副	獣足副	魚上副	魚上副	魚上副	魚上副	鳥類	シカ	イノシシ or ブタ	ウシ/ウマ	イェネコ	イヌ	不明	その他	調査時遺構・包含層名	
土坑33	近世1期									8. 尺骨L 9. 脛骨M	2. 肩甲骨R 23. 第IV中足骨R 19. 胸椎R	4. ウマ上腕骨L 1. ウシ脛骨R 6. ウマ脛骨R 3. ウシ中足骨R	27. 上顎骨L			30. ネズミ科大腿骨L 25. タヌキ前頭骨L 22. タヌキ頭頂骨R 21. タヌキ上顎骨R	No.57土坑	
溝7	近世III期				11. ナマズ胸棘線L 5. タイ科主腿蓋骨L 3. マダコ前頭骨L 6. マタイ脛骨L					1. 尺骨R							No.30土坑	
溝8	近世1期				2. ボウ科主腿蓋骨L 1. タイ科前頭骨R												No.14溝 No.15溝	
溝13	近世1期																No.4溝	
溝15	近世1期				5. マダコ主腿蓋骨R 3. マダコ前頭骨L 4. マダコ前腿蓋骨R						1. 膝骨R						No.56溝	
竪地1	近世IV期				1. マゴテ前腿蓋骨L 2. マダコ前頭骨L 3. マダコ脛骨R 4. マダコ主上顎骨L			5. ハト科大腿骨R									No.43土坑	
柱穴	近世初頭 ～ 17世紀 後半	アカニシ1			1. タイ科前上顎骨R 2. スズキ角骨R												P69	
																	P80	
											1. 上顎骨R							P99
																		P116
包含層	近世初頭 ～ 17世紀 後半	アカニシ3			1. マダコ前頭骨L 2. マダコ側頭骨M 4. タイ科脛骨M 5. スズキ目尾椎M												P117	
					344. マダコ脛骨L 345. マダコ脛骨L													L=2.6mまで
					329. タイ科上腿頭骨M													L=2.7mまで
		アカニシ2																L=2.75mまで
		アカニシ1																L=2.8mまで
		アカニシ1																L=2.85mまで
		アカニシ1																L=2.9mまで
		アカニシ1																L=2.95mから下
		アカニシ1																L=3.0mまで
		アカニシ6 サザエ1					289. タイ科主腿蓋骨R 290. スズキ自角骨R イタボガキ科R1											L=3.2mまで
土坑	不明	アカニシ1															東側溝	
		アカニシ6 サザエ1															西側溝	
土坑	不明																No.1～10土坑	

※は算定部位（破頭）以外の出土を示す。

第5章 総括

1 各時期の年代

今回の調査で検出した遺構は、共伴遺物や遺構の先後・重複関係などを考慮しつつ、第一義的には検出海拔高を基準として近世Ⅰ～Ⅳ期に帰属させた。ここでは、各期の年代を出土海拔高別の遺物の様相から検討したい。

なお検討対象とする遺物は、当時の攪乱がほぼ認められない道路造成土と、その直下に敷かれた屋敷地造成土から出土したものに絞った。しかしながら、出土した遺物の数量が少なく、実年代を示す資料も見つかっていないため、不確実さも含んだ年代であることを付け加えておく。

近世Ⅰ期

近世Ⅰ期は、沖積層上面から海拔2.9m前後（東壁第21層・西壁第30層下面相当レベル）までに検出された遺構を主体としている。沖積層上面を覆う屋敷地造成土（海拔2.85m以下）からは、景德鎮の碗の破片数点、瀬戸・美濃焼の皿片1点と、土師器の皿・鍋・釜片や備前焼の斜めすり目のすり鉢や甕破片などが出土しているが、その中に唐津焼や志野焼は含まれていない。このような遺物組成のあり方は、岡山市教育委員会が表町一丁目地区再開発ビル建設に伴い調査した岡山城三之曲輪跡（以後、三之曲輪跡）のⅨ層⁽¹⁾や、史跡整備に伴い岡山市教育委員会が調査した岡山城跡本丸中の段（以後、岡山城本丸中の段）のⅡ期⁽²⁾までと同様であり、さらに大阪城跡の豊臣前期とされる時期の様相⁽³⁾にも近似する。よって、これらのことと出土遺物の編年観、さらには近世Ⅱ期の時期から、近世Ⅰ期は宇喜多直家期～秀家期（16世紀後半～16世紀末）までの年代が与えられよう。

近世Ⅱ期

近世Ⅱ期の生活面と想定している東壁第21層・西壁第30層の真砂土層の海拔とほぼ対応する海拔2.85～3.05m（一部真砂土層より下層の屋敷地造成土も含む）に包含されている遺物には、16世紀第4四半期から17世紀初頭までの景德鎮や漳州窯の磁器、瀬戸・美濃焼の灰釉皿、軒平瓦（岡山城2式）、備前焼の斜めすり目のすり鉢、土師器の皿・鍋・釜などがある一方で、唐津焼や志野焼が認められなかった。よってこの生活面の形成時期は、宇喜多秀家期（16世紀末）を上限として、小早川期（17世紀初頭）までの年代が与えられるが、次項で述べる銅製品製作関連遺物の状況から宇喜多秀家期の可能性が高いと考える。

次にこの生活面を覆い、瓦を多量に包含する東壁第17層出土遺物を見てみたい。対応する掘り下げ時の高さは海拔3.15～3.25m（主に第17層であるが、第14層までも含む）で、そこからは景德鎮や漳州窯の磁器、すり目が密に詰まっている備前焼のすり鉢、さらに近世Ⅰ期には認められなかった唐津焼の皿や志野焼の椀が出土しているが、肥前磁器は未だに包含されていない。このようなあり方は、岡山城本丸中の段のⅣ層⁽⁴⁾や、大阪城跡の徳川初期とされる時期⁽⁵⁾とほぼ同じ様相であることから、この時期の下限は前期池田期の中に収まるであろう。

近世Ⅲ期

近世Ⅲ期は、海拔3.2m（道路造成土最下層にほぼ対応）から海拔3.5m（洪水砂層下面付近）までに検出された遺構を主体とし、調査区東部では道路及びそれに伴う側溝が南北に走り、西部では屋敷地が広がっていた時期である。その上限は先述したとおり前期池田期の範囲内で、下限は承応3（1654）年の洪水直前までである。

近世Ⅳ期

近・現代造成土直下、海拔3.6m付近で検出した遺構から出土した遺物は、17世紀後半までに比定されるもので、M39を除き18世紀以後のものはほぼ皆無であった。18世紀以後の遺物の様相がはっきりしないが、当時期の下限は幕末までとしておきたい。

2 銅製品製作関連遺物について

出土場所について

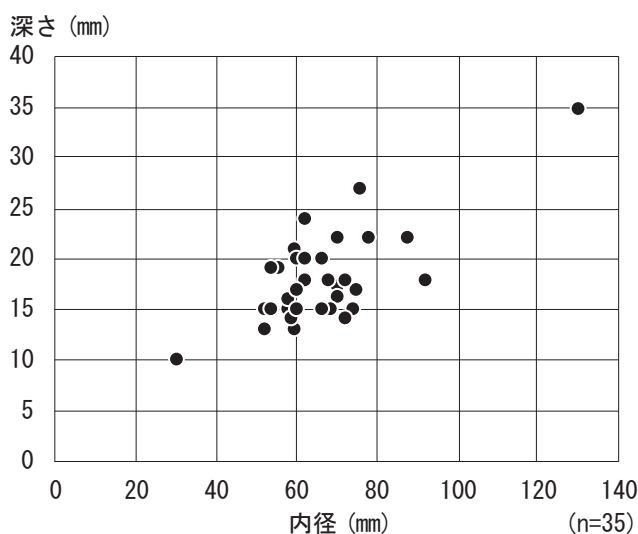
今回の調査では、スラグが付着した坩堝、羽口、銅製品、（長）方形を呈する銅の板材、その板材の切れ端などの銅製品製作関連遺物が出土した（表9）。これらは、東壁第21層と西壁第30層の真砂土層に覆われた近世Ⅰ期の井戸2や溝8・9埋土、さらに1区の海拔2.95m～2.85mまでの造成土⁽⁶⁾からの出土が大多数を占める⁽⁷⁾。調査地では高温の作業を行った遺構や痕跡が認められないことから、これらの遺物は、近世Ⅰ期に調査地近隣に所在していたであろう工房から、この地へ廃棄されたものと考えられる⁽⁸⁾。

坩堝について

出土した坩堝は、口縁残存値が1/4以下の口縁部破片や、底部もしくは体部片が多く、完形品はわずかに2点のみである。形状はすべて半球状で、砲弾型や把手が付くようなものは認められない。外面は還元色を呈し、高温の熱を受けたことが分かる。これらの坩堝は、蛍光X線成分分析を行ったすべてのもので銅成分が検出され⁽⁹⁾、さらに内面に付着したスラグ中に銅滴が認められるものや緑青が浮いているものもあることから、銅の溶融に用いられていたであろう。内面に付着したスラグは、発泡し光沢をもつ黒色もしくは赤褐色の色調のものと、光沢をもたない黒色の色調のものとの2者

表9 銅製品製作関連遺物出土点数

種類	点数	備考	
坩堝	完形	2	
	2/3残	3	
	1/2残	2	
	1/3残	1	
	1/4残	14	深さ不明1点
	1/6残	15	深さ不明1点
	1/8以下残	48	
刀装具	9	破損品あり	
飾金具類	10	鍍金されているものあり	
留め金具類	9	破損品あり	
その他製品	6	鈎金、簪など	
板材	3		
板材の切れ端等	39	折り畳まれているもの多い	
棒状	3		
銅塊	1		



第61図 坩堝の内径と深さ（口縁残存値1/6以上）

に大きく分類できる。前者が付着した坩堝は掲載番号93・94と整理番号51・67・68を除くすべての坩堝であり、その法量は、口縁内径が55～80mm、深さが15～20mmに集中し（第61図）、器壁の厚さが8～10mmのものが多い。これらの坩堝で熔融できる金属量は、20～30cm³である。口縁部までスラグが付着しているものも多く、中には口縁部の器壁が発泡したスラグと一体化しているものも認められる。一方後者が付着した坩堝は、93を除きその法量が前者と大差がないものの、器壁の厚さが5～7mmと薄いのが特徴である。またスラグの付着範囲も底部から体部中央までであり、熔融量が少なかったことが想定される。なお蛍光X線成分分析の結果、93と94はそのほかの坩堝と含有する元素成分の組成が異なっている⁽¹⁰⁾。

銅製品について

銅銭を除く銅製品には、小柄の柄、鉏や切羽などの刀装具、毛彫りで描いた文様の周囲に魚々子を打ち込んだ飾金具、割鋌や鳩目鋌状の留め金具類などがある。これらには、鍍金されているものも存在する。

銅の板材やその切れ端について

地金を薄く叩き延ばして（長）方形を呈している板材は、その厚さが1mm以下であり、中には鋸の痕跡らしき凹みが認められるものもある。板材を目的とする形態にするため鋏などで整形した際に産出されたものと想定している切れ端は、三角形、長方形、くると丸まった状態のものなど様々な形状を呈している。これらには折り畳まれたり、折り曲げられたりしているものが多い。

作業内容

調査地近隣では、坩堝に残されたスラグから銅の熔融を行っていたことは確実であるが、出土した坩堝の熔融量が20～30cm³と少量であることから、鑄造品を製作していたとは考えにくい⁽¹¹⁾。もちろん小型の鑄物であれば鑄込むことも可能と思われるが、鑄込まれた製品や明瞭な鑄型が認められないことから、その可能性は低いと考える。一方で鋸、鑿、鋏などが出土していないものの、銅板や銅板整形の際に切断された切れ端、銅板から製作された刀装具・飾金具・留め金具などが認められることから、少量の銅を熔融し、その銅を薄く叩き延ばした銅板及びその銅板を素材とした製品を製作していた可能性が高い。

さて、製品を製作するにはその原料となる銅地金が必要となるが、今回の調査ではナマコ状を呈したM32以外、銅の塊が認められない。その代わり、坩堝内に収まるように折り畳まれたり、折り曲げられたりしている切れ端や、破損している銅製品が出土している。もしかしたら、これらを再熔融することで地金の代わりとしていた可能性も指摘できる。

おわりに

今回出土した銅製品製作関連遺物から、近世Ⅰ期に調査地近隣で銅製の刀装具や飾金具などを製作していたと想定した。その製作は、坩堝の耐用回数が不明なものの坩堝の出土量を見る限り、職人集団が行ったというよりも、小規模な工房を構えた若干名の職人が行っていたと考えたい。

さて、近世Ⅱ期以降調査地周辺では銅製品製作が行われなくなるが、その要因として考えられるものの一つに「町替え」がある。この「町替え」について森氏は、文禄年間に身分の明確化や家臣の統制強化と城下集住を目的とした城下全域を対象とした居住区の再編と指摘する⁽¹²⁾。おそらく秀家期に行われた城下町整備（東壁21層や西壁30層の真砂土造成）により、調査地は武家屋敷地として割り当てられたため、それまで当地周辺に居住していた職人が他の場所へ移住した結果なのであろう。

3 城下町の形成とその町割

近世Ⅰ期

この地への本格的な居住は、沖積層上への造成から始まる。この造成に用いられた土は、純粋な真砂土ではないものの粗砂～小礫を含む土で、さらに地盤を安定させるため、所々に草木を用いた粗朶（図版9-3）や三之曲輪跡で確認されたような拳大以下の円礫を敷き詰めたり（図版9-2）していた。この造成土中には第48図のように風化・摩滅していない弥生時代から中世にかけての土器のほか、円筒埴輪片も包含しており、城下町整備に際して古墳などが所在した丘陵地を切り崩した土を利用して示唆する。

遺構には掘立柱建物・井戸・土坑・柱穴のほかに、東西・南北方向を指向する区画溝もしくは雨落ち溝と思われる溝群や石列などがある。これらには先後関係や重複があり、さらに2区内では検出レベルの差が著しいことから、この時期の中でも幾度か生活面の嵩上げが行われたと考えられる。そして詳細な時期は不明なものの、溝群や石列が示すとおり東西・南北に沿った屋敷地が形成されていたようである。そこに建てられた建物は、1区の屋敷地造成土内には近世瓦が含まれず、さらに遺構から出土する瓦の量も少ないため、瓦葺建物が主体であったとは考えにくい。

近世Ⅱ期

厚さ10cm以上の真砂土造成（東壁第21層や西壁第30層）によって生活面を形成した当期は、石列1や柱穴列7から、近世Ⅰ期と同様に東西・南北に沿った町割であったと想定される。そこに建てられた建物は、径25cm前後の丸太材や一辺20cmを超える角材が残された柱穴を複数検出していることから掘立柱建物が主体であったと思われるが、西壁断面で礎石と思われる石が認められることやこの生活面を覆う東壁17層に瓦が多数含まれていることから、瓦葺建物も存在していたのであろう。

近世Ⅲ期

この時期になると、調査地東部には東西両側に側溝を備えた道路が、調査地西部には屋敷地が整備された。その整備は、それまで屋敷地であった場所が道路となるなど、従来の町割を一変させるものであったようで、東壁第17層に含まれている瓦や土坑15の瓦などは、その過程で廃棄されたものであろう。

屋敷地内で検出された遺構は、洪水による大削平により、わずかに礎石列・柱穴列・土坑・溝などが認められるのみである。そのため、建物配置等は不明である。屋敷地内の土層を見ると、第25・26層（その上面は海拔3.3m～3.4m）などの真砂土層が認められることから、屋敷地整備以降も幾度か生活面の嵩上げがあったようである。それに併せて道路面上昇したようで、平面では確認できなかったものの、第12層を切り込む第10・11層の存在から、第12層上面（海拔3.3m前後）にある時期の機能面があったことを窺わせる。ちなみに道路造成土中の遺物量が少なく断定できないものの、肥前磁器を包含するのは第12層より上部（海拔3.35m以上）であった。

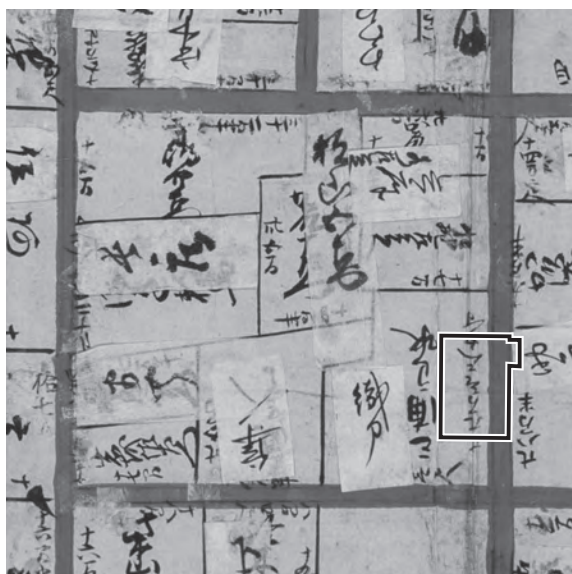
さて、岡山県教育委員会が警察本部庁舎整備事業に伴い発掘調査した岡山城二の丸跡⁽¹³⁾では、小早川秀秋（詮）もしくは監国期の池田利隆により行われたと想定している堀の埋立てと、それに連動した『岡山古図』（寛永9年）に描かれた町割とほぼ一致する新たな屋敷地造成が確認されている⁽¹⁵⁾。今回検出した道路及び屋敷地も、その年代観や従来の町割を一変させるという状況から、この新たな屋敷地造成の一環として整備されたと推測される。ところで『岡山古図』は、寛永9（1632）年に池

田光政が岡山に入封するにあたって家臣の屋敷割りに使ったもので、その原図は池田忠雄が元和初年（1610年代後半）に屋敷割りを行った絵図であるという⁽¹⁵⁾。となれば、この整備時期は1615年頃まで遡るかもしれない。

近世IV期

周辺の調査成果から、海拔4.0m付近にあったものと想定されるこの時期の生活面⁽¹⁶⁾は、近・現代造成による削平により失われており、当期の遺構は海拔3.6m以深まで掘削されたもののみが検出されている。その中で注目すべき遺構として、近世III期には道路であった調査区東部を南北に貫いている柱穴列1～5が挙げられる。これらは塀に伴う柱穴と思われることから、この時期になると屋敷地東側の境界が東へと移動したことを示しているのであろう。ところで『岡山古図』（寛永9年）では、今回の調査地が所在する屋敷地区画の榎馬場通りに面した長さが57間半となっているが、洪水から約50年後の姿を描いた『岡山内曲輪絵図』（宝永5年頃）では60間2尺と記載されており、屋敷地の東西長が2間5尺（約5.1m）長くなっている。この長さは、近世III期の屋敷地東辺を画す溝1西壁の石積みから柱穴列1～5までの距離と近似しており、絵図に示された屋敷地区画の拡張は今回の成果により東側に向かってのものであったと考えたい。

以上のように近世I期からIV期における当調査地での城下町の形成とその町割について述べたが、18世紀以降の利用状況については削平のため明らかにできなかった。しかし『岡山内曲輪絵図』（宝永5年頃）には、生坂藩初代藩主池田輝録（幼名八ノ丞）が延宝1（1672）年に任じられた「丹波守」⁽¹⁷⁾を示すと思われる「丹波殿」・「丹波殿ノ内へ入」の文字が見え、文久3（1863）年の『備前岡山地理家宅一枚図』には、生坂藩8代藩主池田政禮の幼名の「日升丸」⁽¹⁸⁾とも読める「昇丸」が書かれており、当調査地は幕末まで生坂藩主屋敷地として利用されていたと推測される。



第62図 『岡山古図』（寛永9年）
における調査区位置（推定）



第63図 『岡山内曲輪絵図』（宝永5年頃）
における調査区位置（推定）

※岡山大学附属図書館所蔵の絵図に調査地外形を加筆

註

- (1) 乗岡 実編『岡山城三之曲輪跡－表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査』岡山市教育委員会 2002
- (2) 乗岡 実編『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会 1997
- (3) 大阪歴史博物館・大阪文化財研究所編『大坂 豊臣と徳川の時代』2015
- (4) 註1文献
- (5) 註3文献
- (6) 出土位置は、X=-148408、Y=-36800を中心とした約1mの範囲であるが、この場所は溝8の流路上にあたるため、溝8埋土に包含されていた可能性が高い。
- (7) ちなみに近世Ⅱ期以降の遺構埋土等からも出土しているが、少量であり、混入品と考える。
- (8) しかし埴塼の大きさから、地床炉ではなく火鉢や焔炉のような耐火性を持った道具を用いて埴塼を加熱していた可能性も考えられ、被熱遺構が検出されていないことのみで調査地内で作業を行っていないと考えるのは早計かもしれない。
- (9) 本書第4章第1節「岡山城二の丸跡金属加工関連遺物の自然科学分析」
- (10) 註9文献
- (11) 伊藤氏によると、「小さい埴塼はその溶解量から推し量れば、鑄型に溶湯を流し込むような「鑄造」で用いられたものではないことが明白であり、そのほかの”金属を溶かす”作業を想定しなければならない⁽¹⁹⁾とする。
- (12) 森 俊弘「岡山城とその城下町の形成過程－地誌「吉備前鑑」の検討を中心に－」『岡山地方史研究』118 岡山地方史研究会 2009
- (13) 高田恭一郎編「岡山城二の丸跡－警察本部庁舎整備事業に伴う発掘調査－」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』245 岡山県教育委員会 2018
- (14) 和田 剛「第4章第1節 遺構・遺物について」『岡山城二の丸跡－警察本部庁舎整備事業に伴う発掘調査－』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』245 岡山県教育委員会 2018
- (15) 倉地克直・乗岡 実「歩きはじめる前に」『絵図で歩く岡山城下町』岡山大学附属図書館 2009
- (16) 承応の洪水によって堆積した砂の上面の海拔は、岡山県教育委員会が岡山県庁舎増築工事に伴って調査を行った岡山城二の丸跡⁽²⁰⁾では約3.9m、中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会が中国電力内山下変電所建設に伴って調査を行った岡山城二の丸跡⁽²¹⁾では約3.8m、調査地の約100m北西で岡山市教育委員会が行った中国銀行本店建設に伴う調査では約4.0mである⁽²²⁾。岡山県庁舎増築工事に伴って調査を行った岡山城二の丸跡⁽²³⁾では、この洪水砂の上にさらに造成土を敷き、生活面を形成している。
- (17) 岡山県歴史人物事典編集委員会『岡山県歴史人物事典』山陽新聞社 1994
- (18) 註17文献
- (19) 伊藤幸司「鑄造関連遺物の自然科学分析」『鷺山遺跡群 第5分冊 分析・総括』公益財団法人岐阜市教育文化振興事業団報告書第19集 公益財団法人岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財事務所 2012
- (20) 河本 清編「岡山城二の丸跡－岡山県庁舎増築工事に伴う発掘調査－」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』78 岡山県教育委員会 1991
- (21) 松本和夫編『岡山城二の丸跡－中国電力内山下変電所建設に伴う調査報告－』中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会 1998
- (22) 乗岡 実「第V章 調査成果の整理と展望」『岡山城三之曲輪跡－表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査』岡山市教育委員会 2002
- (23) 註20文献

参考文献

- 伊藤幸司「黒崎城跡出土金属加工関連遺物の科学的調査」『黒崎城跡3』北九州市埋蔵文化財調査報告書第375集 財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2007
- 亀山行雄編「岡山城二の丸跡－県立図書館建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』175 岡山県教育委員会 2003
- 乗岡 実編『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』岡山市教育委員会 2001
- 鈴木正貴・蔭山誠一「清洲城下町における銅製品生産－愛知県における金属製品生産(7)－」『研究紀要』第5号 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター 2004
- 乗岡 実「岡山城下町の国産陶磁器の出現時期について」『関西近世考古学研究』18 関西近世考古学研究会 2010
- 乗岡 実「宇喜多秀家の岡山城と豊臣秀吉の大坂城－その相似性－」『西国城館論集Ⅱ』中国・四国地区城館調査検討会 2012

遺構一覧表・遺物観察表・種子同定結果凡例

1 遺構一覧表

- ・「平面形」は検出面での形状を示す。
- ・「規模」等の数値は検出値である。

2 遺物観察表

陶磁器・土器

- ・「計測値」について、器高の「()」は残存値を表した。また、白抜きは計測不能を示した。
- ・陶磁器「備考」欄の文頭に※を付しているものは、佐賀県立九州陶磁文化館家田淳一氏及び大橋康二氏の教示である。

瓦

- ・「珠文」の()は推定個数。

土製品、石製品、木製品、角・貝製品、金属製品

- ・「計測値」、「重量」は、現状の最大値を示した。
- ・計測値の「-」は計測不能を表している。
- ・石製品の「石材」については、岡山大学鈴木茂之氏の同定による。
- ・角・貝製品の「素材」は、岡山理科大学富岡直人氏の教示による。

埴埴

- ・「計測値」の()はおおよその推定値、「-」は計測不能を表している。
- ・「内面スラグ付着範囲」の1は体部から口縁部まで、2は体部中央まで、3は口縁部のみを表す。

3 種子同定表

- ・「種子同定表」は、岡山理科大学那須浩郎氏の同定結果をもとに編者が作成した。

1 遺構一覽表

掘立柱建物

遺構名	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	柱穴掘り方	時期	備考	旧遺構名
		桁	梁								
掘立柱建物 1	1 × 3 間	115 ~ 207	145	512	145	74.20	N - 1° - E	円	近世	根石あり	-

礎石列・柱穴列

遺構名	規模	全長 (cm)	柱間距離 (cm)	方向	柱穴掘り方	時期	備考	調査時遺構・包含層名
礎石列 1	3 間	632	150 ~ 220	N - 1° - E		近世		No.25礎石列
柱穴列 1	12間	2124	168 ~ 182	N - 1° - E	円形	近世		No. 7 柱穴列
柱穴列 2	12間	2230	172 ~ 200	N - 1° - E	円形	近世		No. 8 柱穴列
柱穴列 3	(14間)	2740	170 ~ 225	N - 1° - E	円形	近世		
柱穴列 4	27間	2862	94 ~ 114	N - 1° - E	円形	近世		No. 9 柱穴列
柱穴列 5	(12間)	2394	180 ~ 182	N - 1° - E	円形	近世		
柱穴列 6	5 間	1052	189 ~ 213	N - 2° - E	円形	近世	柱材残存、根石有	No.68柱穴列
柱穴列 7	4 間	450	93 ~ 108	N - 2° - E	円形	近世		No.69柱穴列

井戸・土坑・窪地

遺構名	平面形	規模 (cm)			断面形	底面海拔高 (m)	時期	備考	調査時遺構・包含層名
		長さ	幅	深さ					
井戸 1	不整形	400	330	不明	不明	不明	近世	曲物の井筒あり	No.27井戸
井戸 2	円形	140	130	165	U 字形	1.02	近世		No.38井戸
井戸 3	円形	83	74	86	U 字形	1.14	近世		No.18井戸
土坑 1	円形	86	67	21	逆台形	2.55	近世		No.21土坑
土坑 2	楕円形	184	108	26	皿形	2.93	近世		No.20土坑
土坑 3	長楕円形	195	(68)	13	皿形	3.35	近世		No. 4 土坑
土坑 4	不整形	(171)	(96)	23	皿形	2.86	近世		No.28土坑
土坑 5	隅丸長方形	298	124	11	皿形	2.70	近世		No.36土坑
土坑 6	長楕円形	270	133	28	皿形	2.73	近世	細かい木片堆積層あり	No.29土坑
土坑 7	不明	(364)	332	70	逆台形	1.88	近世		No.66土坑
土坑 8	長楕円形	183	116	33	逆台形	2.68	近世		No.63土坑
土坑 9	不整形	215	(195)	7	皿形	3.05	近世		No.64土坑
土坑10	円形	75	(70)	18	皿形	2.85	近世		No.32土坑
土坑11	方形	105	(65)	10	皿形	2.95	近世		No.23土坑
土坑12	円形	88	81	16	皿形	2.95	近世		No.24土坑
土坑13	楕円形	83	70	25	皿形	2.81	近世		No.31土坑
土坑14	円形	83	81	25	逆台形	2.68	近世		No.33土坑
土坑15	円形	(130)	(67)	66	逆台形	2.36	近世		No.13土坑
土坑16	不整形	240	(142)	17	皿形	2.72	近世		No.35土坑
土坑17	不整形	552	287	56	不整形	2.11	近世	細かい木片堆積層あり	No.40土坑
土坑18	隅丸方形	161	119	23	皿形	2.50	近世	細かい木片多量に含む	No.41土坑
土坑19	(長) 方形	(120)	125	15	皿形	3.01	近世		No.12土坑
土坑20	円形	74	67	21	皿形	2.78	近世	曲物の桶あり	No.22埋桶
土坑21	長楕円形	358	215	113	椀形	1.47	近世	細かい木片堆積層あり	No.45土坑
土坑22	不明	(333)	262	54	逆台形	1.94	近世		No.65土坑
土坑23	円形	(262)	(225)	82	逆台形	0.94	近世		No.60土坑
土坑24	長楕円形	403	(130)	36	椀形	2.30	近世	細かい木片堆積層あり	No.46土坑
土坑25	不明	(368)	(156)	42	不整形	2.43	近世	細かい木片堆積層あり	No.39土坑
土坑26	方形	(161)	(63)	72	逆台形	1.78	近世		No.59土坑
土坑27	方形	(120)	(52)	9	皿形	2.89	近世		No.34土坑
土坑28	円形	(143)	(62)	不明	U 字形	不明	近世		No.50土坑
土坑29	楕円形	124	80	14	皿形	2.25	近世		No.51土坑
土坑30	円形	(140)	138	68	逆台形	1.52	近世		No.58土坑
土坑31	楕円形	230	98	43	椀形	2.01	近世	細かい木片堆積層あり	No.49土坑
土坑32	楕円形	145	106	31	椀形	2.40	近世	細かい木片多量に含む	No.42土坑
土坑33	楕円形	(420)	242	23	皿形	1.98	近世		No.57土坑
窪地 1	不整形	—	—	—	—	1.10	近世		No.43土坑

石列・溝

遺構名	規模 (cm)		断面形	流走・走行方向			時期	備考	調査時遺構・包含層名
	幅	深さ		東	西	南			
石列 1	—	—	—	東	—	西	近世		No.26石列
石列 2	—	—	—	東	—	西	近世		No.54石列
溝 1	120	82	U字形	北	—	南	近世	道路側溝	No. 1 溝
溝 2	—	—	—	東	—	西	近世		No. 6 溝
溝 3	152	56	逆台形	北	—	南	近世		No. 3 溝
溝 4	72	76	U字形	北	—	南	近世	道路側溝	No.10溝
溝 5	110	32	逆台形	北	—	南	近世	道路側溝	No. 5 溝
溝 6	40	50	U字形	北	—	南	近世	道路側溝	No.11溝
溝 7	160	70	椀形	北	—	南	近世	底面に厚く木片堆積	No.30溝
溝 8	92	25	不整形	北	—	南	近世	肩部に石列・杭列	No.14・15溝
溝 9	55	10	皿形	東	—	西	近世		No.16・37・52溝
溝10	51	10	皿形	北	—	南	近世		No.47溝
溝11	22	8	逆台形	北	—	南	近世		No.53溝
溝12	20	5	皿形	北	—	南	近世	両肩部に石列	No.55溝
溝13	44	18	逆台形	東	—	西	近世		No.44溝
溝14	55	14	椀形	東	—	西	近世	北肩に石列	No.48溝
溝15	405	70	逆台形	東	—	西	近世	人骨頭部出土	No.56溝
溝16	230	108	逆台形	東	—	西・北	中世		No.19・67溝
溝17	50	18	椀形	東	—	西	中世		No.61溝

2 遺物観察表

陶磁器・土器・炆器

掲載番号	遺構名等	種別	器種	計測値 (cm)			色調 外面	備考	実測番号
				口径	底径	器高			
1	溝 7	磁器	小杯	—	2.2	(2.2)	秘色 (2B8.5/2)	※中国・景德鎮小杯 (17c 前半)	70
2	井戸 2	磁器	碗	14.0	—	(3.1)	秘色 (2B8.5/2)	※中国・景德鎮染付碗 (16c 後半～17c 初頭)	53
3	溝 3	磁器	碗	12.5	—	4.8	灰白 (10Y8/1)	※中国・漳州窯青花碗 (16c 末～17c 第 1 四半期)	94
4	溝 8	磁器	碗	(9.9)	—	(4.2)	明緑灰 (7.5GY8/1)	※中国・景德鎮 (16c 末～17c 初頭)	112
5	柱穴	磁器	碗	—	4.0	(2.5)	秘色 (2B8.5/2)	※中国・景德鎮染付饅頭心碗 (16c 後半)、見込み：樹下人物像	83
6	土坑24	磁器	碗	—	4.0	(1.9)	灰黄褐 (10YR5/2)	※漳州窯染付小皿或碗 (16c 第 4 四半期～17c 第 1 四半期)	45
7	土坑16	磁器	碗	—	4.4	(1.6)	秘色 (2B8.5/2)	※中国・景德鎮染付碗 (1590～1630)	82
8	窪地 1	磁器	小皿	—	—	(3.1)	灰白 (N8/)	※中国・景德鎮染付小皿 (1630～1640)、被熱	43
9	土坑31	磁器	小皿	12.6	—	(2.4)	灰白 (10Y8/1)	※中国・漳州窯小皿 (16c 第 4 四半期～17c 第 1 四半期)	37
10	土坑25	磁器	皿	(9.5)	(5.0)	1.9	明オリブ灰 (2.5GY7/1)	※景德鎮染付小皿 (16c 前半～中葉)、外側面：唐草	99
11	溝 3	磁器	皿	—	4.6	1.7	灰白 (5GY8/1)	※中国・景德鎮芙蓉手皿 (1610～1630)	96
12	土坑16	磁器	小皿	9.8	5.8	2.5	秘色 (2B8.5/2)	※中国・景德鎮染付小皿 (16c 第 4 四半期～17c 第 1 四半期)	81
13	溝 8	磁器	皿	—	6.3	(1.1)	明緑灰 (7.5GY8/1)	※中国・景德鎮 (16c 第 4 四半期～17c 初頭)	113
14	溝 7	磁器	皿	—	6.0	(2.2)	秘色 (2B8.5/2)	※中国・景德鎮染付皿 (1620～1640)、碁笥底	72
15	土坑 8	磁器	大皿	—	—	(2.8)	灰白 (5Y8/1)	※漳州窯大皿 (1590～17c 第 1 四半期)	28
16	土坑 2	磁器	小杯	4.3	1.8	2.9	灰白 (10Y8/1)	※肥前白磁小杯 (1640～1650)	102
17	溝 7	磁器	小杯	6.2	2.9	4.2～4.3	オイスターホワイト (5GY8.5/0.3)	※肥前白磁小杯 (1610～1630)	67
18	土坑 2	磁器	小杯	6.2	2.9	4.0	灰白 (5Y8/1)	※肥前染付小杯 (1650～60)	103
19	土坑 2	磁器	碗	10.2	—	(4.8)	灰白 (5Y8/1)	※有田色絵碗 (1650～1660)、外側面：青海波・山水文、色絵消失	100
20	溝 7	磁器	碗	10.2	4.6	7.5	灰白 (2.5Y7/1)	※肥前染付碗 (1630～1650)	66
21	土坑 6	磁器	碗	10.6	4.8	6.6	明緑灰 (10GY8/1)	※肥前染付碗 (1610～1630)	118
22	井戸 1	磁器	碗	12.3	—	(5.2)	灰白 (N8/) と灰白 (N7/) の中間色	※肥前染付碗 (1640～1660)、外側面：山水文	6
23	土坑 2	磁器	碗	—	5.4	(4.0)	明緑灰 (7.5GY8/1)	※肥前 (有田) 染付碗 (1660～1670)	101
24	土坑 2	磁器	碗	11.2	—	3.5	明緑灰 (7.5GY7/1)	※肥前染付碗 (1660～70)、外側面：蔓草文	104
25	井戸 1	磁器	碗	11.4	4.6	6.6		※肥前染付碗 (1630～1640)、外側面：笹	7
26	溝 7	磁器	碗	12.6	5.6	6.8	灰白 (10Y8/1)	※肥前染付碗 (1610～1630)、焼成不良	69
27	溝 7	磁器	碗	(11.6)	—	(6.7)	灰白 (10Y8/1)	※肥前染付碗 (1610～1630)、外側面：竹?	71

掲載 番号	遺構名等	種別	器種	計測値 (cm)			色調 外面	備考	実測 番号
				口径	底径	器高			
28	土坑6	磁器	香炉	12.8	7.4	9.4	灰白 (5Y8/2)	※肥前染付香炉 (初期伊万里、1610~1640)	120
29	土坑8	陶器	小杯	6.6	2.9	3.8	—	底部糸切、※肥前小杯 (1590~1630)	26
30	溝7	陶器	椀	10.4	8.8	7.8	灰オリーブ (5Y5/2)	高台見込み砂目付着、兜巾	68
31	土坑19	陶器	椀	11.6	4.6	6.1	にぶい赤褐 (5YR5/4)	高台見込み兜巾	115
32	窪地1	陶器	椀	11.0	5.1	7.9	浅黄 (2.5Y8/3)	※肥前具器手碗 (17c後半)	42
33	溝1	陶器	椀	—	—	(4.4)	灰白 (5Y8/1)	※志野碗 (1580~1590)	79
34	溝3	陶器	皿	13.5	5.0	3.9	灰白 (10Y8/1)	内面見込みと高台畳付：砂目と溶着痕	98
35	溝7	陶器	皿	12.2	5.1	3~4.2	にぶい橙 (7.5YR7/4)	砂目、灰釉と鉄釉、※肥前掛分け皿 (1610~1630)	65
36	土坑6	陶器	皿	13.1	9.8	4.0	灰 (10Y6/1)	※肥前 (1600~1630)、砂目	119
37	溝3	陶器	皿	12.5	7.2	3.1	灰白 (7.5Y7/1)	※瀬戸・美濃窯菊皿 (17c前半)	95
38	窪地1	陶器	大皿	—	13.0	(6.7)	灰白 (5Y7/1)	※肥前 (1610~1640)、灰釉or青磁釉、被熱	38
39	土坑3	陶器	大皿	—	11.6	(8.7)	暗オリーブ灰 (2.5GY4/1)	内面見込み：砂目と溶着痕	117
40	溝7	陶器	大皿	39.4	10.8	9.7	灰 (7.5Y5/1)	灰釉大皿、砂目	64
41	柱穴	陶器	片口鉢	9.2	—	(6.7)	極暗赤褐 (5YR2/4)	※福岡or肥前片口鉢 (17c前半)、藁灰釉+鉄釉	125
42	土坑17	陶器	向付	—	—	5.5	灰白 (5Y8/1)	※志野 (1580~1590)	48
43	土坑19	陶器	灯明貝身	8.2	6.0	3.5	オリーブ灰 (10Y4/2)・ 灰白 (2.5Y7/1)	青織部	116
44	溝8	炆器	小皿	(8.8)	(6.2)	1.4	灰赤 (10R4/2)	備前、底部糸切	111
45	井戸3	炆器	鉢	(15.4)	(11.6)	4.4	にぶい赤褐 (7.5R4/3)	備前	126
46	井戸2	炆器	大皿	31.0	19.2	3.7	暗赤灰 (10R3/1)	備前	51
47	溝1	炆器	鉢	13.5	—	(8.7)	赤灰 (7.5R6/1)	備前	80
48	溝3	炆器	すり鉢	27.8~ 30.5	12.8	10.1	にぶい赤褐 (2.5YR4/4)	備前	74
49	土坑33	炆器	すり鉢	—	—	(3.6)	灰赤 (2.5YR4/2)	備前	35
50	溝7	炆器	すり鉢	(44.8)	—	(8.8)	灰赤 (2.5YR4/2)	備前	55
51	土坑31	炆器	瓶	5.2	9.4	25.4	暗赤灰 (7.5R3/1)	備前	36
52	溝8	土師器	椀	9.4	5.2	3.5	黒褐 (10YR3/1)	底部糸切	110
53	土坑33	土師器	皿	7.0	2.8	1.4	にぶい橙 (5YR6/4)	底部ナデ	32
54	土坑22	土師器	皿	(10.2)	(6.0)	1.9	灰黄褐 (10YR5/2)	底部ナデ	5
55	土坑21	土師器	皿	9.4	5.4	2.6	にぶい橙 (7.5YR6/4)	底部糸切、スス	10
56	井戸2	土師器	皿	11.6	8.8	1.8	にぶい赤褐色 (5YR6/3)	底部糸切、板目	52
57	土坑21	土師器	皿	9.4	6.2	1.7	にぶい黄橙 (10YR6/3)	底部糸切、スス	12
58	土坑21	土師器	皿	11.8	7.5	2.5	にぶい黄橙 (10YR6/4)	底部糸切、スス	13
59	土坑21	土師器	皿	11.9	7.7	2.2	にぶい黄橙 (10YR6/3)	底部糸切、スス	11
60	土坑8	土師器	皿	10.3	7.0	2.0	にぶい黄橙 (10YR6/3)	底部糸切、板目	21
61	土坑8	土師器	皿	11.2	6.4	2.1	にぶい黄橙 (10YR7/4)	底部糸切	22
62	土坑8	土師器	皿	10.3	7.9	2.0	灰黄 (2.5Y6/2)	底部糸切、スス	18
63	土坑8	土師器	皿	10.3	6.0	2.1	灰黄 (2.5Y7/2)	底部糸切、板目	20
64	土坑8	土師器	皿	10.7	5.8	2.2	にぶい黄橙 (10YR6/3)	底部糸切、スス	19
65	土坑8	土師器	皿	10.7	5.8	2.2	灰白 (2.5Y8/2)	底部糸切、スス	23
66	土坑8	土師器	皿	10.8	6.5	2.4	にぶい黄橙 (10YR6/3)	底部糸切	17
67	土坑8	土師器	皿	11.3	6.4	2.4	灰黄 (2.5Y7/2)	底部糸切、スス	25
68	土坑8	土師器	皿	11.9	6.2	2.7	にぶい黄橙 (10YR7/2)	底部糸切、スス	24
69	土坑30	土師器	皿	10.0	5.4	2.2	灰黄 (2.5Y7/2)	底部糸切	31
70	溝7	土師器	皿	10.1	5.7	2.8	にぶい黄 (2.5Y6/3)	底部糸切、スス	60
71	溝7	土師器	皿	11.8	6.6	2.8	黄灰 (2.5Y4/1)	底部糸切	61
72	溝7	土師器	皿	10.5	6.3	2.5	灰黄 (2.5Y6/2)	底部糸切、スス	62
73	溝7	土師器	皿	9.9	6.2	2.3	灰黄褐 (10YR6/2)	底部糸切、スス	58
74	溝7	土師器	皿	11.6	6.9	2.2	灰黄 (2.5Y7/2)	底部糸切、板目、スス	57
75	溝7	土師器	皿	9.7	6.0	2.0	黒褐 (10YR3/2)	底部糸切、板目、スス	56
76	溝7	土師器	皿	10.0	5.2	2.2	にぶい黄橙 (10YR7/2)	底部糸切、スス	59
77	土坑6	土師器	皿	10.4	7.0	2.4	灰白 (5Y8/1)	底部糸切、板目、スス	122
78	溝7	土師器	皿	11.4	6.0	2.2	にぶい黄橙 (10YR7/2)	底部糸切、スス	63
79	土坑6	土師器	皿	10.6	6.8	1.8	灰白 (2.5Y7/1)	底部糸切	121
80	土坑6	土師器	皿	10.9	6.9	2.0	にぶい橙 (7.5YR6/4)	底部糸切、スス	123
81	井戸1	土師器	皿	9.5	6.0	1.6	灰白 (2.5Y8/2)	底部糸切、板目	84
82	井戸1	土師器	皿	11.2	7.0	2.1	にぶい黄橙 (10YR7/2)	底部糸切、板目	85
83	井戸1	土師器	皿	11.3	7.3	1.9~2	灰白 (2.5Y8/1)	底部糸切	86
84	土坑8	土師器	焼塩壺蓋	7.0	5.8	1.9	明赤褐 (5YR5/6)		27
85	土坑8	土師器	焼塩壺	5.4	4.8	8.1	灰黄 (2.5Y7/2)		29

掲載番号	遺構名等	種別	器種	計測値 (cm)			色調		備考	実測番号
				口径	底径	器高	外面			
86	土坑2	土師器	焙烙	32.2	—	8.1	黒褐 (10YR3/1)		内耳の痕跡あり	108
87	溝7	土師器	焙烙	(29.2)	—	(8.8)	黒 (N1.5/)			73
88	土坑2	土師器	焙烙	23.0	11.4	6.0	黒褐 (2.5Y3/1)			109
89	土坑2	土師器	焙烙	21.7	—	(4.6)	にふい橙 (7.5YR7/3)			105
90	土坑21	土師器	焙烙	(27.0)	(25.2)	(7.9)	灰黄 (2.5Y6/2)			14
91	土坑24	瓦質土器	火鉢	12.0	—	(3.6)	黒褐 (7.5Y3/1)		外側面：雷文	44
92	凹地1	瓦質土器	火鉢	(22.6)	(22.0)	8.3	褐灰 (10YR4/1)			39
111	溝16	炆器	すり鉢	—	—	(4.6)	赤褐 (10R4/3)		備前	1
112	1区包含層	弥生土器	壺	(24.8)	—	(4.2)	にふい黄橙 (10YR7/3)			156
113	1区包含層	弥生土器	壺	—	—	(4.2)	明赤褐 (5YR5/6)		弧帯文か	141
114	1区包含層	弥生土器	壺	—	—	(3.6)	明赤褐 (5YR5/8)		絵画(シカ)土器か	140
115	2区包含層	弥生土器	壺	—	—	(3.1)	明赤褐 (5YR5/6)		絵画土器か	139
116	1区包含層	弥生土器	甕	—	—	(3.6)	黒褐 (7.5YR3/1)			144
117	2区包含層	弥生土器	甕	—	—	(2.8)	灰白 (5Y7/1)			146
118	1区包含層	弥生土器	高杯	—	—	(3.6)	にふい橙 (7.5YR7/4)			154
119	2区包含層	土師器	甕	—	—	(5.6)	にふい橙 (7.5YR7/4)			145
120	2区包含層	須恵器	杯身	—	—	(2.2)	灰 (N6/)			147
121	1区包含層	埴輪	円筒埴輪	—	—	(7.3)	明赤褐 (5YR5/6)			131
122	2区包含層	埴輪	円筒埴輪	—	—	(9.4)	団十郎茶 (5YR5/5)			129
123	土坑33	埴輪	円筒埴輪	—	—	(6.6)	にふい黄橙 (10YR6/3)			130
124	2区包含層	埴輪	円筒埴輪	—	—	(10.8)	灰白 (2.5Y7/1)			132
125	1区包含層	土師器	杯	(14.3)	—	(3.1)	橙 (2.5YR6/8)			150
126	1区包含層	土師器	杯	(17.8)	—	(2.1)	灰黄褐 (10YR5/2)			151
127	1区包含層	土師器	高杯	—	—	(3.2)	明赤褐 (2.5YR5/6)			152
128	2区包含層	須恵器	杯身	—	9.4	(2.5)	灰白 (N7/)			142
129	2区包含層	青磁	碗	—	—	(4.1)	オリーブ灰 (2.5GY6/1)			149
130	2区包含層	白磁	碗	—	5.5	(2.2)	オリーブ灰 (2.5GY6/1)			143

軒丸瓦

掲載番号	遺構名	種別	文様	珠文	計測値 (cm)			色調			備考	実測番号
					最大長	最大幅	最大厚	外面	内面	断面		
R1	土坑7	軒丸瓦	左三巴	24	3.4	12.3	2.2	灰 (N4/)	暗灰 (N3/)	灰白 (N8/)		2
R2	土坑7	軒丸瓦	左三巴	(22)	2.5	12.8	2.3	灰 (N3/)	灰 (N3/)	黄灰 (2.5Y6/1)		3
R3	土坑21	軒丸瓦	左三巴	(22)	8.4	12.7	1.9	暗灰 (N3/)	暗灰 (N3/)	灰 (N5/)	コビキA	15
R4	土坑19	軒丸瓦	左三巴	21	13.1	14.0	1.5	灰 (N5/)	灰 (N4/)	灰白 (N8/)	コビキB	114
R5	土坑17	軒丸瓦	左三巴	15	7.4	13.9	2.0	灰 (N4/)	灰 (N4/)	灰白 (N7/)		49
R6	溝3	軒丸瓦	左三巴	15	27.7	12.8	1.9	にふい黄橙 (10YR7/3)	にふい黄橙 (10YR6/3)	にふい橙 (7.5YR6/4)	コビキB	124
R7	溝1	軒丸瓦	左三巴	12	2.9	14.7	1.9	灰白 (2.5Y7/1)	灰白 (2.5Y7/1)	灰 (5Y5/1)		76
R8	溝3	軒丸瓦	左三巴	15	2.4	12.7	—	黄灰 (2.5Y6/1)	灰白 (2.5Y7/1)	灰 (N6/)		97
R9	土坑8	軒丸瓦	左三巴	10	2.2	13.3	2.6	黄灰 (2.5Y6/1)	暗灰 (N3/)	灰 (N6/)		30
R10	溝3	軒丸瓦	右三巴	11	9.0	12.3	1.6	暗灰 (N3/)	灰白 (5Y7/1)	灰白 (5Y7/1)		92

軒平瓦

掲載番号	遺構名	種別	中心飾	唐草	計測値 (cm)			色調			備考	実測番号
					最大長	最大幅	最大厚	外面	内面	断面		
R11	土坑7	軒平瓦	三葉	3 転	9.4	20.5	1.8	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	灰白 (5Y7/1)		4
R12	溝1	軒平瓦	三葉	2 転	10.2	(18.2)	1.7	灰 (5Y5/1)	灰 (N4/)	灰白 (5Y7/1)	コビキB	78
R13	溝7	軒平瓦	三葉	2 転	10.0	(16.4)	16.0	黒 (10Y2/1)	オリーブ (10Y3/1)	灰 (7.5Y6/1)		54
R14	溝3	軒平瓦	逆三葉	3 転	10.9	22.8	1.4	灰白 (5Y7/1)	灰 (5Y5/1)	灰白 (5Y7/1)		90
R15	溝3	軒平瓦	逆三葉	3 転	26.0	37.0	2.1	灰 (N4/)	暗灰 (N3/)	—		93
R16	溝3	軒平瓦	逆三葉	3 転	26.4	23.1	1.8	灰黄 (2.5Y6/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	—	コビキA	127
R17	溝3	軒平瓦	逆五葉	2 転	4.2	(14.4)	1.9	灰白 (5Y7/1)	暗灰 (N3/)	灰白 (N7/)	凸線表現	75
R18	窪地1	軒平瓦	宝珠	蔓状	5.2	(13.2)	1.9	暗灰 (N3/)	暗灰 (N3/)	灰白 (N8/)		40
R19	溝3	軒平瓦	桐?	3 転	3.0	(13.5)	1.4	灰白 (5Y7/1)	黒 (N2/)	灰白 (5Y7/1)		91

棟込瓦

掲載番号	遺構名	種別	計測値 (cm)			色調		備考	実測番号
			最大長	最大幅	最大厚	外面	内面		
R20	土坑1	棟込瓦	4.9	11.5	1.6	にぶい黄橙 (10YR7/3)	灰白 (10YR7/1)	左三巴	107
R21	窪地1	棟込瓦	2.4	5.5	2.1	灰白 (5Y7/1)	灰白 (N7/)	左三巴	41
R22	溝1	棟込瓦	2.4	10.4	1.5	灰 (5Y6/1)	黄灰 (2.5Y6/1)	菊花	77

木製品

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			備考	実測番号
			最大長 (径)	最大幅	最大厚 (高)		
W1	土坑31	鞘	385.0	34.0	16.0		W38
W2	土坑25	鞘	371.0	38.0	1.1		W36
W3	溝15	鞘	271.0	34.0	14.5		W37
W4	溝7	椀	104.0	50.0	31.0	内面：赤漆、外面：黒漆に金で家紋	W26
W5	2区包含層	椀	138.0	62.0	52.0	内面：赤漆、外面：黒漆	W12
W6	2区包含層	椀	121.0	64.0	65.0	内面：赤漆、外面：黒漆	W21
W7	2区包含層	椀	-	60.0	(51.0)	内面：赤漆、外面：黒漆に赤漆の絵	W11
W8	柱穴	椀	128.0	64.0	53.0	内面：赤漆、外面：黒漆	W22
W9	土坑7	椀	-	54.0	(41.0)	内面：赤漆、外面：黒漆に赤漆の絵	W34
W10	土坑17	椀	137.0	61.0	63.0	内面：赤漆、外面：黒漆、高台底面釘描	W13
W11	土坑17	椀	137.0	70.0	56.0	内面：赤漆、外面：黒漆、高台底面釘描	W14
W12	土坑17	椀	130.0	65.0	53.0	内面：赤漆、外面：黒漆、高台底面釘描	W15
W13	土坑17	椀	-	66.0	50.0	内面：赤漆、外面：黒漆に赤漆の絵、高台底面釘描	W16
W14	1区包含層	椀	145.0	74.0	88.0	内面：赤漆、外面：黒漆に赤漆の絵	W1
W15	溝7	椀	-	64.0	(65.0)	内面：赤漆、外面：黒漆に赤漆の絵	W32
W16	溝3	椀	-	65.0	(66.0)	内面：赤漆、外面：黒漆に赤漆の絵	W2
W17	土坑17	椀	-	72.0	(65.0)	内面：赤漆、外面：赤漆	W23
W18	溝3	不明部材	479.0	23.0	12.0	貫通していない穴14個あり	W7
W19	土坑16	箸	257.0	6.0	6.0		W9
W20	井戸3	箸	217.0	7.0	6.5		W4
W21	溝9	折敷足板	264.0	43.0	17.5	釘3本残	W6
W22	窪地1	蓋	87.0	292.0	13.5		W20
W23	井戸3	曲物底板	120.5	120.0	6.0		W3
W24	溝7	不明木製品	76.0	61.0	2.0		W33
W25	溝7	蓋栓	42.0	30.0	27.0		W31
W26	溝7	砧	153.0	72.0	62.0		W30
W27	2区包含層	鋤先	269.0	125.5	39.0		W8
W28	溝7	刷毛	121.0	95.0	7.0		W24
W29	土坑17	舟形木製品	125.0	43.5	14.0		W19
W30	土坑32	下駄	199.0	91.5	15.5	歯欠損	W18
W31	溝1	下駄	152.0	85.0	22.0		W5
W32	溝7	下駄	210.5	77.5	41.0		W25
W33	溝7	下駄	290.5	80.5	20.5		W28

金属製品

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	備考	整理番号
			最大長	最大幅	最大厚				
M1	溝7	小柄	183.0	15.0	5.0	30.79	銅・鉄	M36-1	
M2	土坑7	小柄	168.0	10.0	3.0	11.05	鉄	M90	
M3	溝3	柄	52.0	14.0	1.0	7.36	銅	M6-1	
M4	土坑17	環状金具	44.0	56.0	15.0	22.15	鉄	M43-1	
M5	溝8	鎌	94.0	28.0	0.7	14.02	鉄	木質残存 M8	
M6	溝8	切羽	43.0	24.0	0.6	2.83	銅	M9-2	
M7	井戸2	鑑	34.0	29.0	3.0	19.43	銅	M40-1	
M8	井戸1	火箸?	175.0	5.5	6.0	17.19	鉄	M89	
M9	溝1	錠	201.0	13.0	15.0	517.27	鉄	M1①	
M10	柱穴	銃弾	12.0	12.0	12.0	5.05	鉄	M15	
M11	溝9	金具?	42.0	14.0	5.0	2.28	鉄	M52-2	
M12	溝8	釘	26.0	30.0	4.0	6.16	鉄	M10	
M13	溝7	釘	61.0	8.0	3.0	1.99	鉄	M36-11	
M14	溝7	釘	68.0	9.0	4.0	2.07	鉄	M36-10	

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	備考	整理番号
			最大長	最大幅	最大厚				
M15	土坑17	釘	80.0	4.0	3.0	4.31	鉄		M43-7
M16	溝7	釘	89.0	14.0	4.0	5.03	鉄		M36-8
M17	土坑5	釘	98.0	12.0	4.0	4.90	鉄		M39-1
M18	窪地1	釘	112.0	16.0	6.0	9.52	鉄		M48-1
M19	井戸3	釘	118.0	15.0	8.0	14.63	鉄		M11
M20	溝8	飾金具	88.0	15.0	0.5	1.86	銅		M9-1
M21	土坑2	板材	83.0	37.0	0.6	7.65	銅		M34-1
M22	土坑33	板材切れ端	84.0	7.0	0.5	3.81	銅	3片	M55-12
M23	土坑16	板材	58.0	20.0	3.0	5.20	銅		M38
M24	溝9	棒状製品	55.0	5.0	4.0	5.39	銅		M52-3
M25	柱穴	板材切れ端	29.0	9.0	7.0	4.11	銅		M59
M26	土坑24	板材切れ端	18.5	15.0	1.0	2.06	銅	折りたたみ	M49-10
M27	井戸2	板材切れ端	23.0	13.0	1.0	2.43	銅	折り畳み	M40-2
M28	土坑25	板材切れ端	21.0	21.0	0.7	0.85	銅	折り曲げ	M42-2
M29	1区包含層	鳩目鋳	7.0	8.0	0.5	0.53	銅		M18-8
M30	土坑24	飾金具	17.5	15.0	0.4	0.49	銅	円盤状、孔あり	M49-9
M31	土坑24	銅滓	10.0	11.0	6.0	1.20	銅		M49-11
M32	窪地1	銅塊	28.0	19.0	7.0	10.78	銅		M48-17
M33	1区包含層	割鋳	12.0	13.0	4.5	1.61	銅	春	M18-7 ①
M34	1区包含層	割鋳	11.5	13.0	2.0	1.31	銅	月	M18-7 ②
M35	1区包含層	金具	7.0	22.0	3.0	1.80	銅	彫金、鍍金	M18-6
M36	1区包含層	金具	16.0	7.0	7.5	1.65	銅	彫金、鍍金	M18-5 ①
M37	1区包含層	金具	14.0	7.0	7.0	1.53	銅	彫金、鍍金	M18-5 ②
M38	1区包含層	金具	41.5	15.5	0.7	2.60	銅	彫金、鍍金	M18-4
M39	溝1	銭	48.0	32.0	2.7	19.87	銅	天保通寶・當百銭	M2
M40	土坑33	銭	24.0	24.0	1.0	2.60	銅	開元通寶	M55-10
M41	溝1	銭	24.0	24.0	2.0	2.96	銅	景德元寶 (北宋1004年)	M4-2
M42	溝7	銭	24.0	24.0	1.2	3.31	銅	元豊通寶	M36-3
M43	柱穴	銭	24.0	24.0	2.0	2.77	銅	大観通寶	M58
M44	溝3	銭	24.0	24.0	2.0	3.09	銅	政和通寶	M6-6
M45	溝7	銭	23.0	23.0	1.9	3.11	銅	洪武通寶	M36-2
M46	土坑33	銭	24.0	24.0	15.0	3.43	銅	洪武通寶	M55-11
M47	窪地1	銭	25.0	25.0	1.3	2.80	銅	永樂通寶	M48-16
M48	溝7	銭	24.0	25.0	1.5	2.86	銅	寛永通寶	M36-4
M49	窪地1	銭	24.0	24.0	1.2	3.04	銅	寛永通寶	M48-14

石製品

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	備考	整理番号
			最大長	最大幅	最大厚				
S1	溝6	碁石	18.0	12.0	6.0	1.95	チャート		S2
S2	土坑11	碁石	18.0	19.0	7.5	3.27	泥岩 (ホルンフェルス)	董青石あり	S7
S3	土坑33	碁石	17.5	18.5	4.0	2.08	玄武岩		S17
S4	土坑32	駒	16.0	14.0	7.5	3.61	流紋岩		S12
S5	土坑6	砥石	45.5	42.0	6.0	14.87	珪質泥岩	コノドンド化石含まれることから、鳴滝石と思われる	S8
S6	溝7	砥石	37.0	43.0	7.5	21.34	珪質泥岩	コノドンド化石含まれることから、鳴滝石と思われる	S9
S7	土坑2	砥石	57.0	34.0	11.0	39.98	珪質泥岩		S4
S8	窪地1	砥石	72.0	37.0	15.5	61.99	流紋岩		S13
S9	井戸2	砥石	98.0	78.0	43.0	530.79	珪質泥岩		S11

角・貝製品

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	素材	備考	実測番号
			最大長	最大幅	最大厚				
B1	溝9	オメガ	205.0	32.0	17.5	64.44	鹿角		B2
B2	土坑25	不明角製品	161.0	10.5	10.5	22.25	鹿角	サイコロの素材か?	B1
B3	井戸2	貝杓子	84.0	77.0	4.5	29.88	イタヤガイ	銅製の鋳2個あり	M41

土製品

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	色調	備考	整理番号
			最大長	最大幅	最大厚 (高)				
C 1	土坑33	土錘	5.9	0.8	0.9	3.83	にふい赤褐 (5YR5/3)		C11
C 2	土坑17	土錘	48	11.5	11	4.95	明赤褐 (2.5YR5/6)		C 9
C 3	溝 9	土錘	4.1	1	9.5	4.48	灰黄 (2.5Y6/2)		C 4
C 4	溝 9	土錘	4.6	1	1	3.97	明赤褐 (2.5YR5/8)		C 6
C 5	土坑17	土錘	46.5	9.5	10	3.74	灰赤 (2.5Y4/2)		C 8
C 6	土坑33	土錘	3.75	0.9	0.9	2.66	にふい赤褐 (5YR5/4)		C12
C 7	溝 4	土錘	3.6	1	1.05	3.39	にふい赤褐 (2.5YR5/4)		C 2
C 8	溝 9	円板形土製品	5.2	5.5	1.9	56.87	黒 (5Y2/ 1)	瓦素材	C 3
C 9	土坑17	円板形土製品	30	30	11.5	12.45	暗赤褐 (5YR3/2)	備前焼素材	C 7
C10	土坑 2	円板形土製品	3	2.5	1.8	18.03	にふい赤褐 (2.5YR5/4)	備前焼素材	C 5
C11	土坑33	人形	3.5	4.1	1.9	22.07	にふい黄橙 (10YR7/2)		C10
C12	溝 3	人形	3.85	2.9	1.8	16.99	褐灰 (10YR4/1)		C 1
C13	溝 9	羽口	46	45.0	12.0	46.0	灰黄褐 (10YR6/2)		87
C14	井戸 2	羽口	77	49.5	14.0	110.7	にふい赤褐 (5YR5/4)		88
C15	井戸 2	不明土製品	53.5	43.0	31.0	66.0	灰黄 (2.5Y7/2)	内面被熱	89

埴埴

掲載番号	遺構名	残存値	外面口径	内面口径	器高	深さ	器壁厚	内面スラグ付着範囲	内面付着スラグの色調			銅滴の有無	外面被熱		外面スラグの有無	備考	調査時遺構・包含層名	整理番号
									黒色系 (光沢無)	黒色系 (光沢有)	赤色系		酸化色	還元色				
93	井戸 2	1/1	32	30	16	10	6	2	○			×		○	×	小さい	No.38井戸	61
94	井戸 2	2/3	69	68	(23)	(18)	5	1	○			○	○	○	×	内面緑青あり、外面口縁赤化	No.38井戸	59
95	井戸 2	1/2	60	58	23	16	7	1		○	○	×		○	×		No.38井戸	64
96	井戸 2	1/1	52	52	25	15	9	1		○	○	×		○	○	外面口縁にスラグ付着	No.38井戸	60
97	井戸 2	2/3	66	60	29	17	12	1		○		×		○	×		No.38井戸	58
98	1区包含層	2/3	73	70	27	17	9	1		○	○	○		○	○	外面口縁の一方にスラグ付着	1区2.85mまで掘り下げ	9
99	溝 8	1/4	86	76	(38)	(27)	11	1			○	×		○	×		No.14溝	22
100	1区包含層	1/8	(74)	(74)	(31)	(20)	11	1		○		○		○	×		1区2.95mまで掘り下げ	4
101	井戸 2	1/4	70	70	(32)	(22)	9	1		○	○	×		○	○	外面口縁にスラグ付着	No.38井戸	70
102	井戸 2	1/4	70	62	(34)	(24)	9	2		○		×		○	×		No.38井戸	66
103	柱穴	1/3	66	66	(29)	(20)	10	1		○	○	×	○	○	○	外面口縁スラグ付着、口縁部発泡	P117	77
104	溝 9	1/4	63	60	(24)	(15)	10	1		○	○	○		○	×	緑青あり	No.37溝	44
105	溝 9	1/4	58	56	(25)	(19)	7	1		○	○	×		○	×		No.37溝	37
106	2区包含層	1/8	(62)	(60)	(23)	(15)	10	1		○	○	×		○	×		2区2.8mまで掘り下げ	34
107	井戸 2	1/4	70	60	(30)	(21)	10	1		○	○	×		○	×		No.37溝	71
108	土坑24	1/2	54	54	(28)	(19)	9	1		○	○	×		○	×		No.46土坑	79
109	溝 9	1/6	64	60	(30)	(20)	9	1		○	○	×		○	×		No.37溝	43
110	1区包含層	1/8	(80)	(70)	(25)	(18)	11	1		○	○	○		○	×		1区2.85mまで掘り下げ	10
	井戸 2	1/6	72	58	(20)	(15)	9	1			○	×		○	×		No.38井戸	63
	井戸 2	1/6	60	52	(34)	(15)	8	1	○			×	○	○	○	滓を覆うように浅黄色の土?が付着	No.38井戸	67
	井戸 2	1/6	60	52	(20)	(13)	8	1	○			×		○	×	滓を覆うように浅黄色の土?が付着	No.38井戸	68
	井戸 2	1/6	76	70	(25)	(16)	10	1		○	○	×	○	○	×	外面底部赤化	No.38井戸	69
	井戸 2	1/6	60	54	(20)	(15)	8	1		○	○	×		○	×		No.38井戸	72
	井戸 2	1/8	(80)	(70)	(30)	(15)	11	1		○		×		○	×		No.38井戸	62
	井戸 2	1/8	(80)	(70)	(25)	(15)	12	1		○	○	×	○	○	○		No.38井戸	65
	井戸 2	1/8	(80)	(70)	-	-	8	1		○	○	×		○	×		No.38井戸	73
	井戸 2	1/8	-	-	-	-	8	-				×		○	×	口縁部のみ残	No.38井戸	74
	井戸 2	1/8	(80)	(70)	(25)	(13)	9	1		○	○	×		○	○	外面口縁スラグ付着	No.38井戸	75
	井戸 2	1/10	(80)	(70)	-	-	13	1		○	○	○		○	○	緑青あり、器壁が他のものより厚い	No.38井戸	57
	土坑17	1/8	(80)	(70)	-	-	8	1		○	○	×		○	○	外面に赤色系スラグ付着	No.40土坑	76
	土坑24	1/8	(80)	(70)	-	-	13	1		○		×	○	○	×	外面口縁赤化	No.46土坑	80
	土坑24	1/8	(90)	(80)	(30)	(15)	12	1		○	○	×		○	×	緑青あり	No.46土坑	82
	土坑24	1/8	-	-	-	-	13	1		○	○	×		○	×	口縁部発泡	No.46土坑	83
	土坑24	1/10	-	-	-	-	7	1		○		×	○	○	○	外面口縁スラグ付着	No.46土坑	85

掲載 番号	遺構名	残存 値	外面 口径	内面 口径	器高	深さ	器壁 厚	内面ス ラグ付 着範囲	内面付着スラグの色調			銅滴の 有無	外面被熱		外面ス ラグの 有無	備考	調査時遺構・ 包含層名	整理 番号
									黒色系 (光沢無)	黒色系 (光沢有)	赤色系		酸化色	還元色				
	溝8	1/4	88	74	-	-	11	1		○	○	×		○	○	口縁に切り込みあり(注ぎ口か)、緑青あり	No.14溝	19
	溝8	1/4	86	74	(28)	(15)	13	1		○	○	×	○	○	○	外面に緑青あり	No.14溝	21
	溝8	1/4	100	88	(35)	(22)	11	1		○		×		○	×	深い増場か?、器壁薄い	No.14溝	25
	溝8	1/6	108	92	(30)	(18)	12	2		○		○		○	×	口縁部発泡	No.14溝	18
	溝8	1/8	(90)	(80)	-	-	12	1		○		×		○	×	緑青あり	No.14溝	16
	溝8	1/8	(90)	(80)	(35)	(22)	12	2			○	×		○	×	スラグらしいスラグ認められず	No.14溝	17
	溝8	1/8	(90)	(80)	-	-	10	1		○		×		○	×	緑青あり	No.14溝	20
	溝8	1/8	(80)	(70)	-	-	8	1		○	○	○		○	×	緑青あり	No.14溝	23
	溝8	1/8	-	-	-	-	9	1			○	×		○	×		No.14溝	24
	溝8	1/8	-	-	-	-	7	1		○		×		○	×	深い増場か?、器壁薄い	No.14溝	26
	溝9	1/4	140	130	(45)	(35)	13	1		○	○	×		○	○	外面の一部分に垂れたようなスラグ付着	No.37溝	36
	溝9	1/4	80	75	(25)	(17)	10	1			○	×		○	○	外面口縁にスラグ付着	No.37溝	42
	溝9	1/6	76	60	(15)	(13)	9	1		○	○	×	○	○	×		No.37溝	41
	溝9	1/6	62	52	(20)	(13)	8	1		○		×	○	○	×	外面口縁赤化、内側はスラグが口縁部まで詰まっている	No.37溝	52
	溝9	1/8	(80)	(70)	(25)	(19)	9	3		○	○	×		○	×	口縁部のみにスラグ付着	No.37溝	38
	溝9	1/8	(80)	(70)	-	-	9	1		○	○	×		○	×		No.37溝	39
	溝9	1/8	-	-	-	-	7	2		○		×		○	×	器壁やや薄い	No.37溝	40
	溝9	1/8	-	-	-	-	10	1		○	○	×		○	○	外面口縁にスラグ付着	No.37溝	45
	溝9	1/8	(80)	(70)	(25)	(13)	7	1		○		×		○	×	外面口縁赤化、器壁やや薄い	No.37溝	46
	溝9	1/8	(66)	(58)	(25)	(15)	10	1		○		×		○	×		No.37溝	47
	溝9	1/8	(80)	(70)	-	-	9	1		○		×		○	○	外面口縁スラグ付着	No.37溝	48
	溝9	1/8	(80)	(70)	(20)	(10)	8	1		○	○	×		○	×		No.37溝	49
	溝9	1/8	(80)	(70)	-	-	8	1		○	○	×		○	×		No.37溝	53
	溝9	1/10	-	-	-	-	8	1		○	○	×		○	×		No.37溝	50
	溝9	1/10	-	-	-	-	6	1	○			×		○	×	器壁やや薄い	No.37溝	51
	柱穴	1/6	70	62	-	-	10	1		○	○	×		○	×		P136	87
	柱穴	1/8	-	-	-	-	10	1		○	○	×		○	×		P138	88
	1区包含層	1/4	80	68	(25)	(15)	8	1		○		×		○	○		1区2.95mまで掘り下げ	3
	1区包含層	1/6	70	62	(25)	(18)	10	1		○	○	×		○	×		1区2.95mまで掘り下げ	2
	1区包含層	1/6	76	72	(20)	(14)	8	2		○	○	×		○	×	口縁部発泡	1区2.85mまで掘り下げ	8
	1区包含層	1/6	76	72	(25)	(18)	10	1		○	○	×		○	×		1区2.85mまで掘り下げ	12
	1区包含層	1/8	(80)	(70)	-	-	10	1		○	○	×		○	×		1区2.95mまで掘り下げ	1
	1区包含層	1/8	-	-	-	(10)	7	2		○		×		○	×		1区2.95mまで掘り下げ	5
	1区包含層	1/8	-	-	-	-	7	1		○	○	×		○	○		1区2.95mまで掘り下げ	6
	1区包含層	1/8	(80)	(70)	-	-	8	1		○	○	×		○	○		1区2.95mまで掘り下げ	7
	1区包含層	1/8	(80)	(68)	-	-	9	1		○	○	×		○	×		1区2.85mまで掘り下げ	11
	1区包含層	1/8	-	-	-	-	9	1		○	○	×		○	×		1区2.85mまで掘り下げ	13
	1区包含層	1/8	(80)	(70)	(30)	(20)	10	1		○	○	○		○	×	緑青あり	1区2.85mまで掘り下げ	14
	1区包含層	1/8	(80)	(70)	-	-	15	1			○	○		○	×	緑青あり	1区2.85mまで掘り下げ	15
	2区包含層	1/4	70	59	(20)	(14)	9	1		○	○	×		○	×		2区2.8mまで掘り下げ	32
	2区包含層	1/4	78	66	(25)	(15)	8	1			○	×		○	○	外面口縁付近のみスラグ付着	2区2.8mまで掘り下げ	33
	2区包含層	1/6	90	78	(34)	22	12	1		○	○	×		○	×	内側スラグ多く付着	2区2.5mまで掘り下げ	78
	1区包含層	1/8	-	-	-	-	10	1		○		×		○	×	緑青あり	1区2.75mまで掘り下げ	27
	1区包含層	1/8	-	-	-	-	9	1		○		×		○	×		1区2.75mまで掘り下げ	28
	2区包含層	1/8	(90)	(80)	-	-	12	3			○	×		○	×	内面の口縁部の一部にスラグ付着	2区3.1mまで掘り下げ	29
	2区包含層	1/8	-	-	-	-	6	1		○	○	×		○	×	器壁薄い	2区3.0mまで掘り下げ	30
	2区包含層	1/8	(80)	(70)	-	-	10	1			○	×		○	×		2区2.9mまで掘り下げ	31
	2区包含層	1/8	(90)	(80)	(30)	(20)	7	1		○		○		○	○	外面口縁付近のみ垂れたようなスラグ付着、器壁薄い	2区2.8mまで掘り下げ	35
	2区包含層	1/8	(80)	(70)	(20)	(14)	7	1		○	○	×		○	×	器壁やや薄い	2区2.6mまで掘り下げ	54
	2区包含層	1/10	-	-	-	-	9	1			○	×		○	○	外面は口縁から体部中程までスラグ付着	2区2.6mまで掘り下げ	55
	3区包含層	1/6	80	62	(35)	(20)	14	1		○	○	×		○	×	口縁部発泡	3区2.5mまで掘り下げ	86

3 種子同定表

遺構・包含層名	種名	オニグルミ	オニグルミ	モモ	モモ	モモ	ウメ	ヒヨウタン	ヒヨウタン	ヒヨウタン	メロン仲間 (81mm以上)	メロン仲間 (61~80mm)	メロン仲間 (50mm以下)	合計	備考	調査時遺構・包含層名
	部位	核	核	核	核	核	核	種子	種子	種子	種子	種子	種子			
	状態	半割れ	破片	完形	半割れ	破片	完形	完形	一部割れ	未熟	完形	破片	完形			
井戸 1							1							1		No.62井筒 171025
土坑 8		3												3	一部炭化, 食痕あり	No.63土坑 171025
土坑24				7	1		1							9	モモ 1点先端がピンと尖るタイプ	No.46土坑 171005
土坑27				1										1		No.34土坑 170905
土坑31								14	40	37	1			92		No.49土坑 171011
溝 1				1										1	磨耗	No. 1 溝 170616
溝 8				2	1									3		No.14溝 170712
溝13				1	1									2		No.44溝 170921
溝16				2										2	磨耗, ネズミ食痕	No.19溝 170724
柱穴				1										1		P46 170629
柱穴			1											1	磨耗? 打撃痕?	P133 171025
柱穴				1										1	磨耗, 細長タイプ	P141 171025
1区包含層					2									2	磨耗	1区L=2.65mまで掘下げ 170721
1区包含層				1	1	1								3	磨耗	1区L=2.65mまで掘下げ 170726
1区包含層					2									2	1点磨耗	1区L=2.75mまで掘下げ 170713
1区包含層					1									1	磨耗	1区L=2.75mまで掘下げ 170714
1区包含層					3		1							4		1区L=2.85mまで掘下げ 170710
1区包含層				1	3									4	磨耗	1区L=2.85mまで掘下げ 170711
1区包含層					3									3	磨耗, 1点細長タイプ	1区L=2.95mまで掘下げ 170703
1区包含層				2	6									8		1区L=2.95mまで掘下げ 170706
1区包含層				1	1									2	磨耗	1区L=3.05mまで掘下げ 170626
1区北半包含層				2										2	磨耗	1区北半L=3.25mまで掘下げ 170615
1区清掃中					2	1								3	磨耗	1区清掃中 170721
1区清掃中				3		3								6	3点磨耗	1区清掃中 170728
1区西部清掃中					2									2	磨耗	1区西部清掃中 170720
2区包含層									3		80	2	6	91		2区L=2.70mまで掘下げ 170915
2区包含層				1	2									3	完形は磨耗	2区L=2.90mまで掘下げ 170906
2区西側溝					2									2	種皮残存	2区西側溝 170904
合計		3	1	27	33	5	3	14	43	37	81	2	6	255		



1 柱穴列1~5・溝1（南から）



2 溝1石積み（北東から）

図版 2



1 溝1石積み
(南東から)



2 溝2・3断面
(南から)



3 礎石列1
(南東から)

1 土坑6
(東から)



2 溝7
(北東から)



3 溝7断面
(北から)



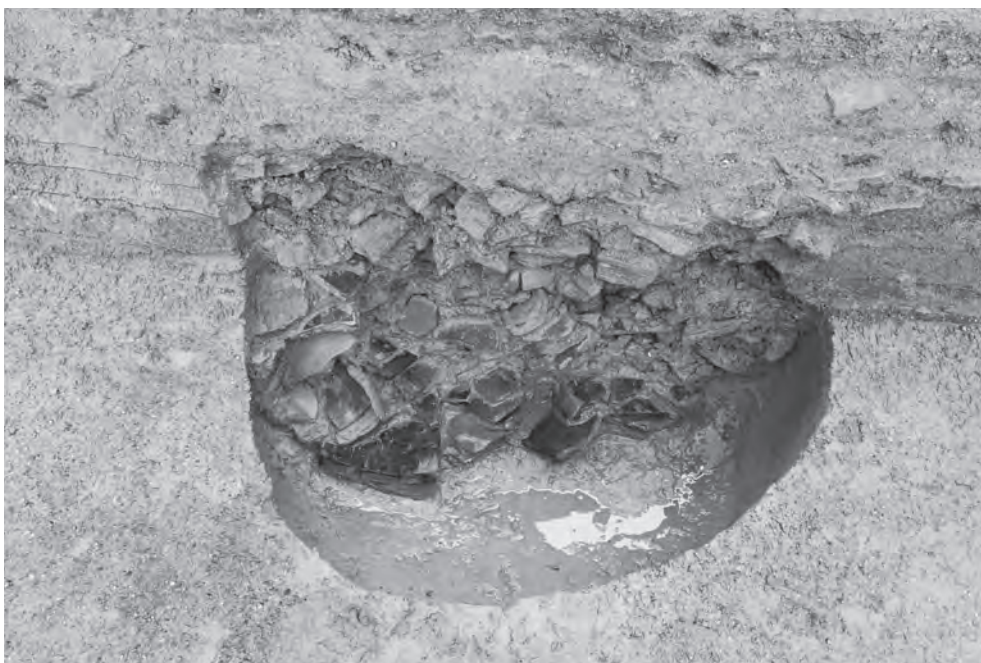
図版4



1 近世Ⅰ・Ⅱ期全景
(北から)



2 石列1
(北西から)



3 土坑15断面
(西から)

1 土坑17断面
(北西から)



2 土坑20桶出土状況
(南から)



3 井戸2
(北から)





1 井戸3
(東から)



2 土坑24
(南西から)



3 土坑30
(南から)

1 土坑31
(北から)



2 土坑33
(東から)



3 溝 8
(北から)





1 溝8東肩部石列
(北西から)



2 溝9東半
(南から)



3 溝12・石列2
(北西から)

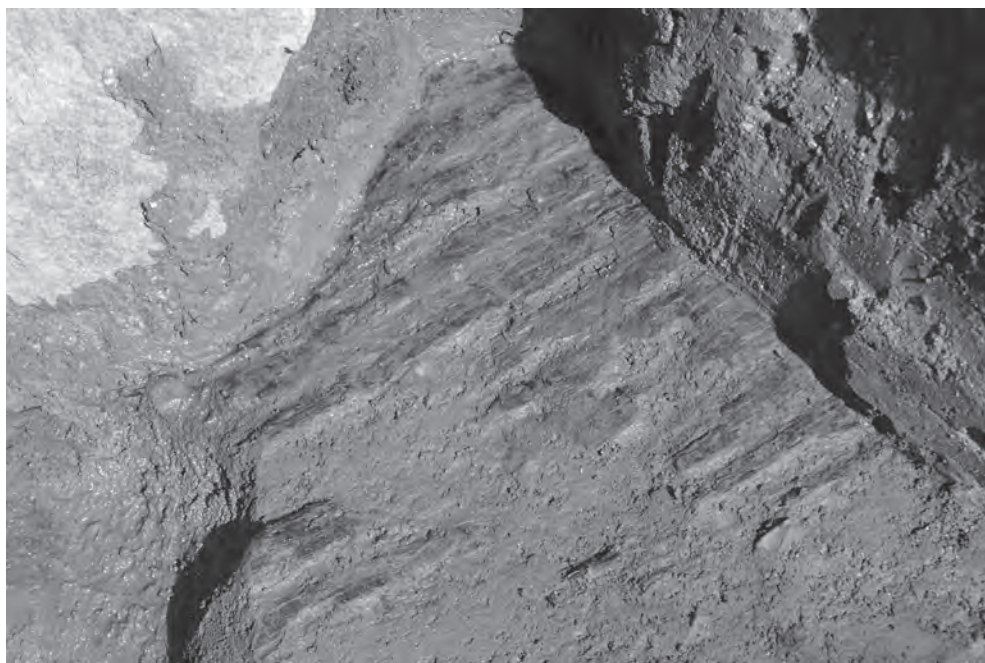
1 溝15出土人骨
(南から)



2 造成土敷石
(北から)



3 造成土敷粗朶
(南西から)





1 溝16・17
(西から)



2 東壁断面
(北西から)



3 道路造成土及び屋敷地造成土(北端)
(西から)

1 北壁断面〈東側〉
(南から)

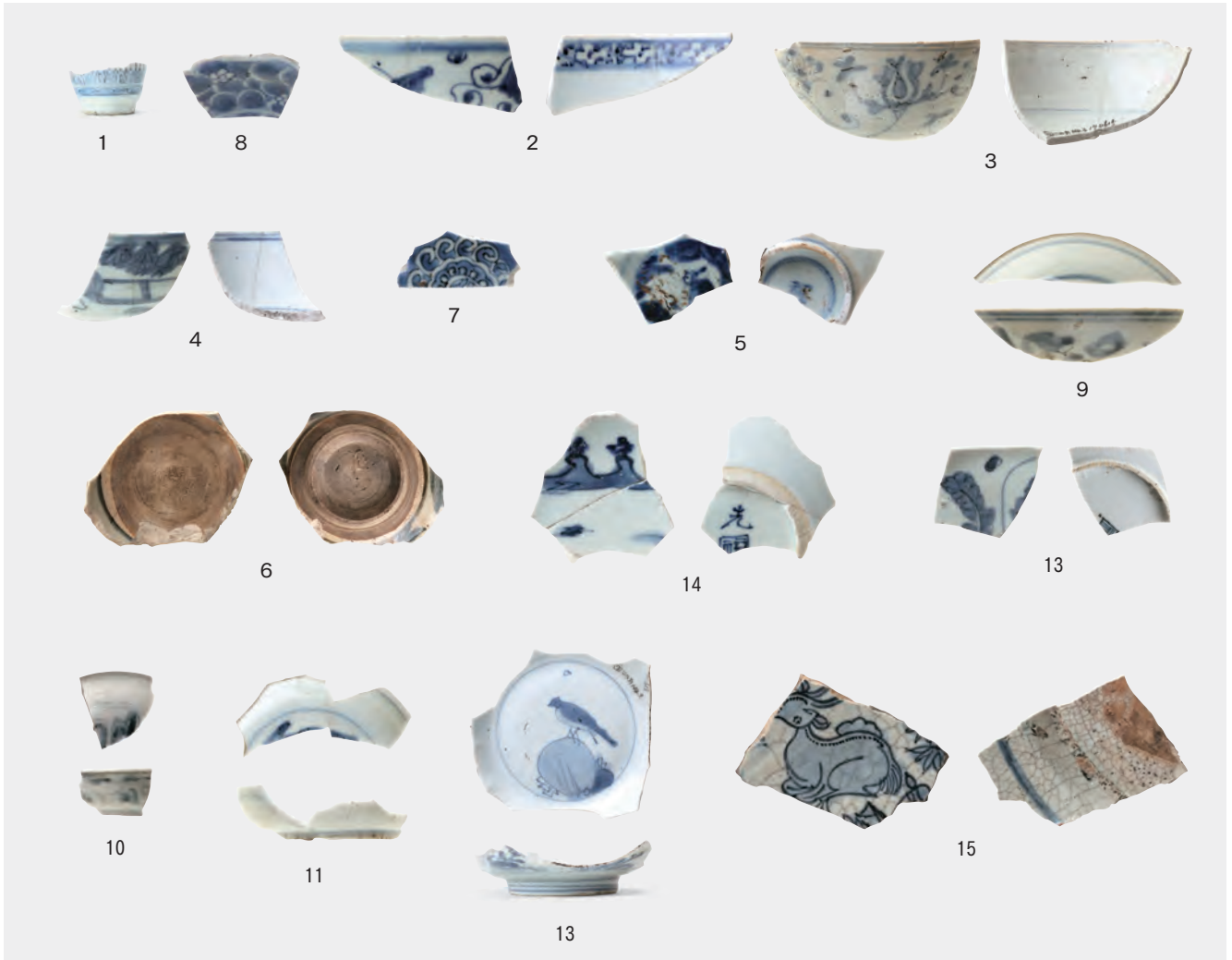


2 西壁断面〈北側〉
(東から)



3 西壁断面〈中央〉
(南東から)

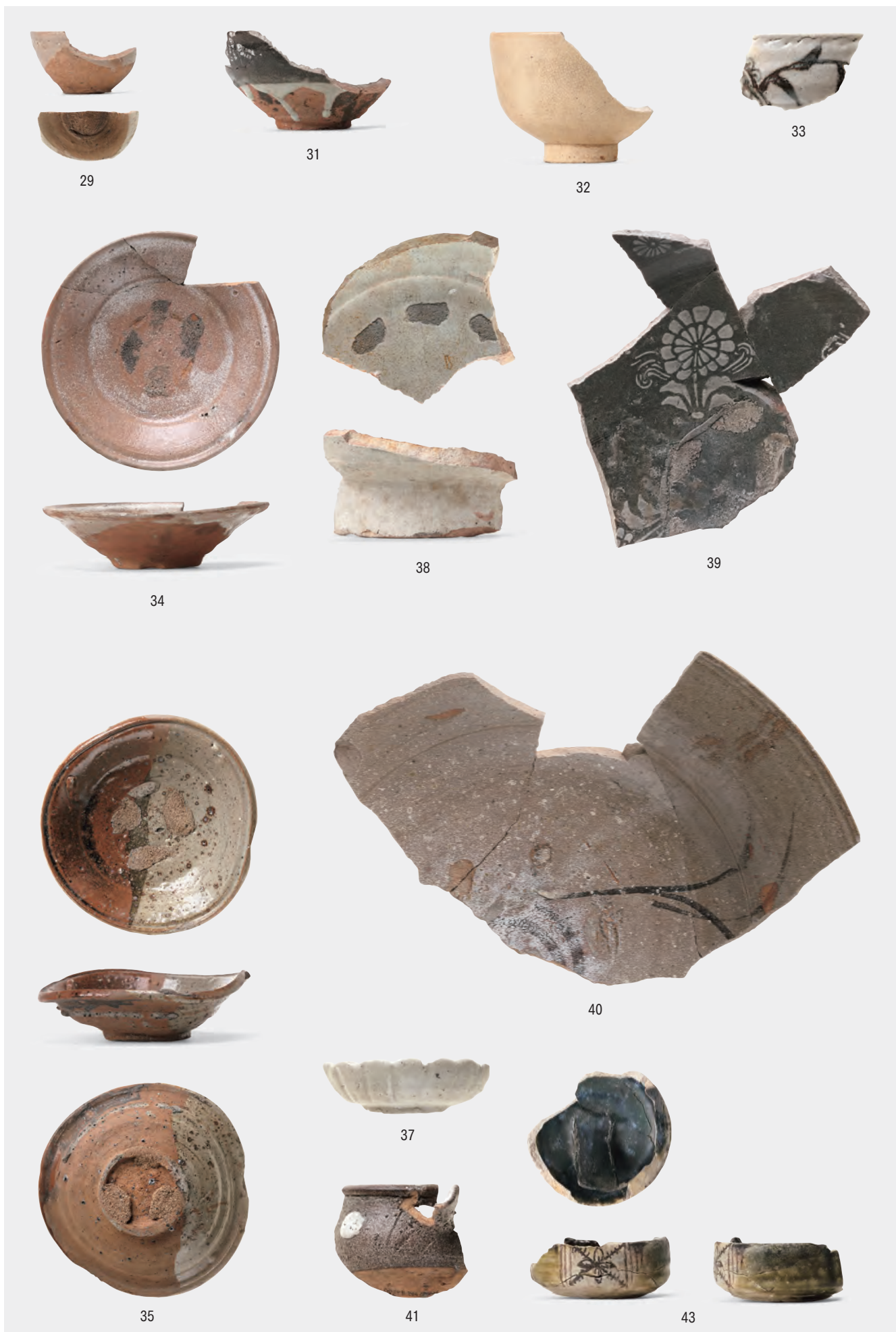




1 輸入磁器



2 国産磁器

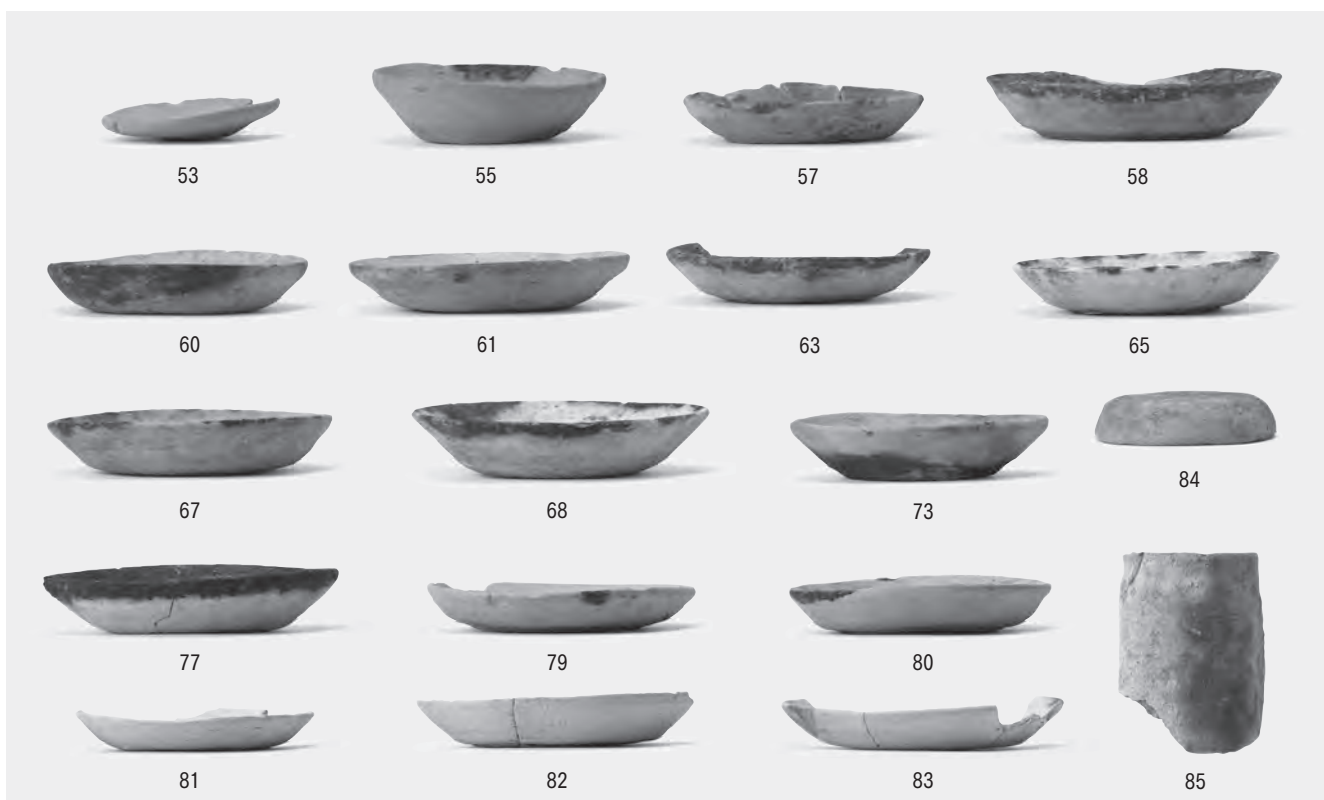




1 銅製品製作関連遺物



1 炆器



2 土器 1



1 土器 2



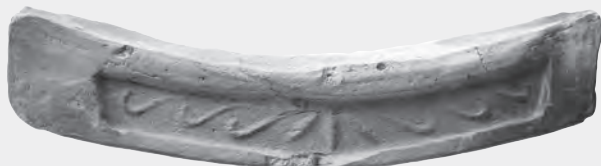
2 軒丸瓦



R11



R12



R14



R13



R15



R17



R16



R18



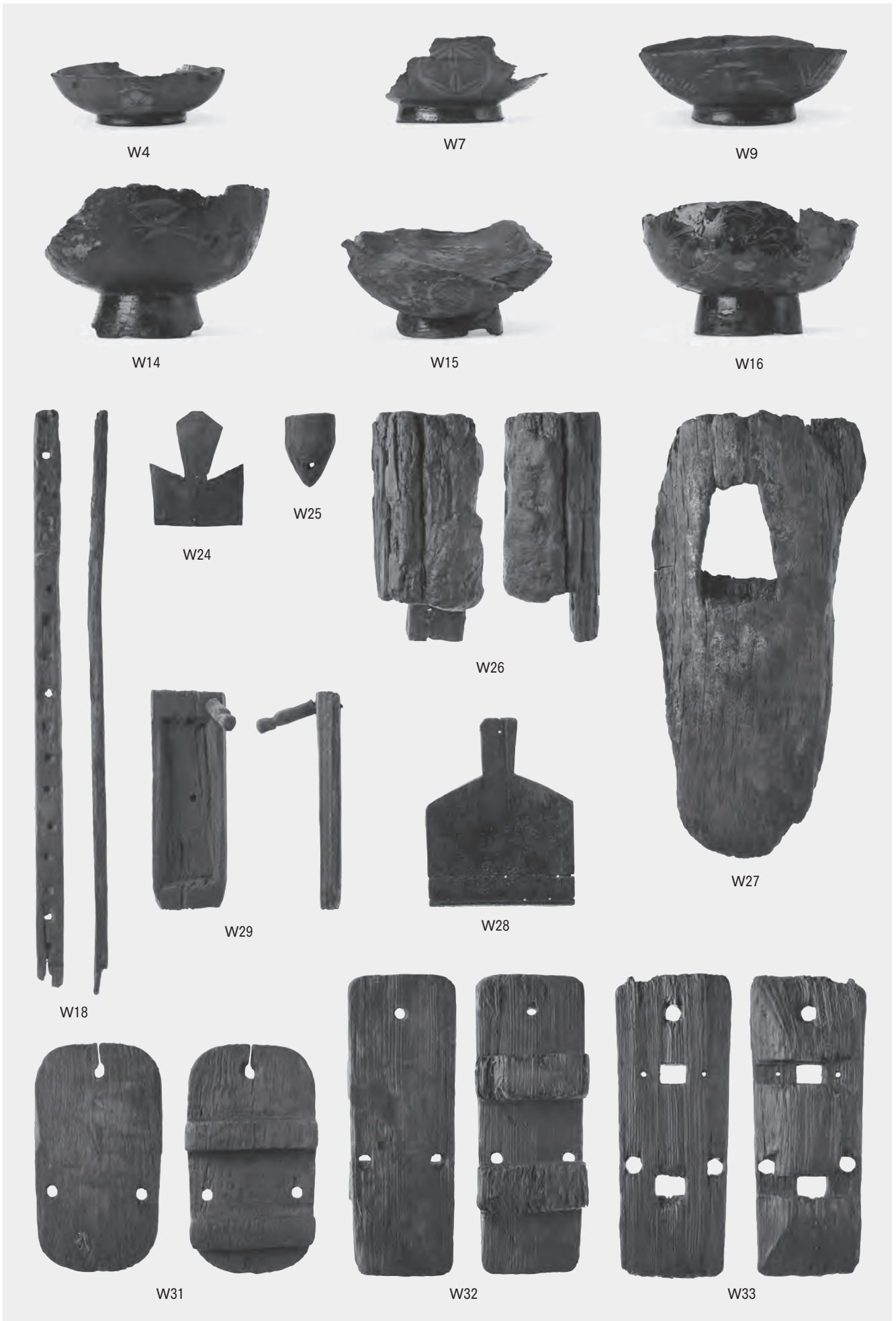
R19

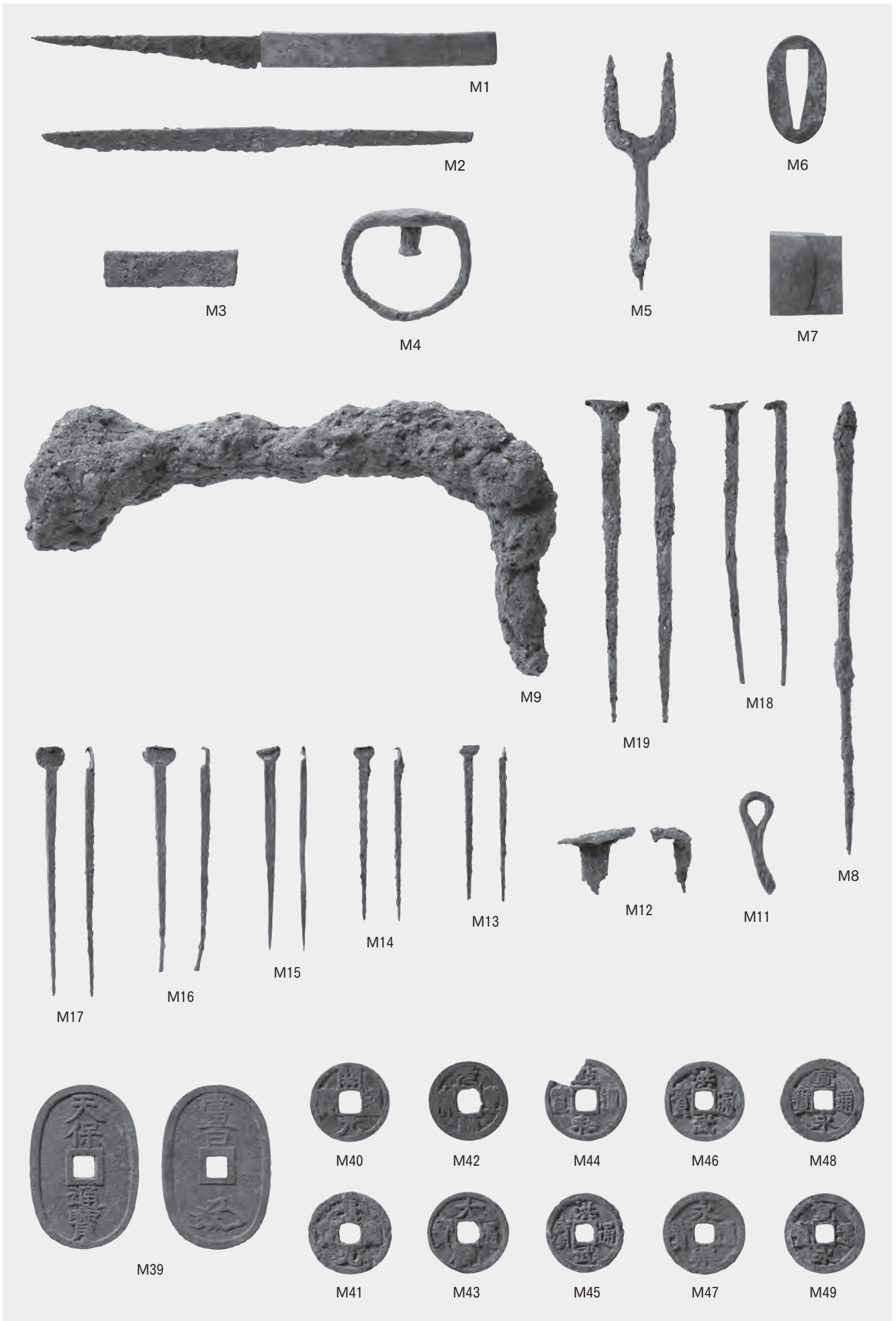


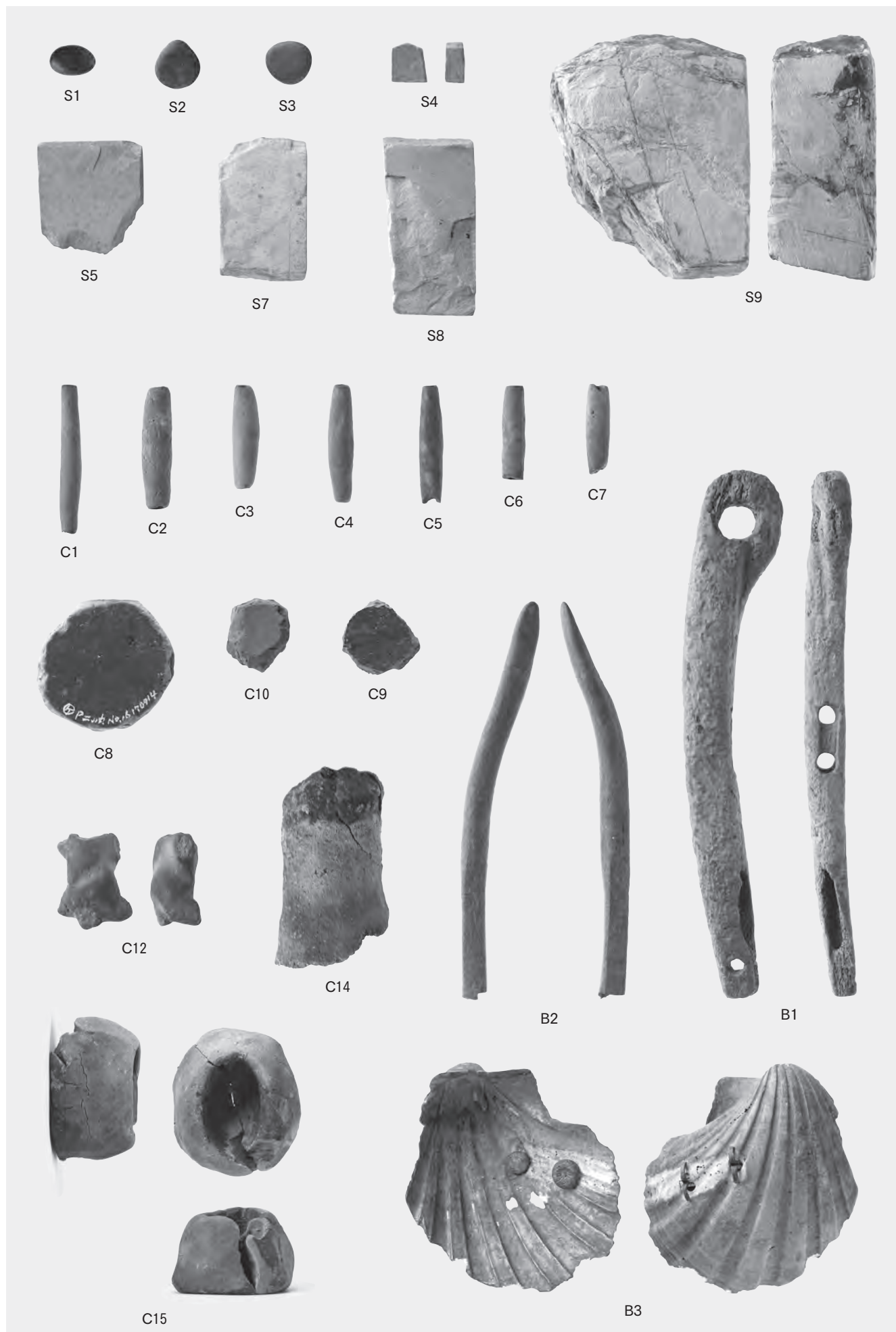
R20



R22







1 石製品、角・貝製品、土製品

報告書抄録

ふりがな	おかやまじょうにのまるあと							
書名	岡山城二の丸跡							
副書名	警察本部庁舎車庫整備事業に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	247							
編著者名	小嶋善邦 大橋雅也 伊藤幸司 坂上和弘 富岡直人							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3 TEL 086-293-3211 FAX 086-293-0142 URL http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6 TEL 086-224-2111							
発行年月日	2019年3月8日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	発掘期間	発掘 面積	発掘原因
おかやまじょう 岡山城 にのまるあと 二の丸跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 きたくうちさんげ 北区内山下 1-5-5	市町村	遺跡番号	34° 39' 41"	133° 55' 54"	20170601 ～ 20171031	780㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
岡山城 二の丸跡	城館	江戸時代		道路・礎石列・柱穴列・石 列・土坑・溝など		輸入磁器・国産陶 磁器・炆器・土器・ 瓦類・埴塼・木製 品(鞘・漆椀・部材・ 折敷・刷毛・下駄 など)・金属製品(小 柄・鉄鍬・切羽・鋸・ 鏝・鉄釘・銅製板 材・銅製飾金具・ 銅銭など)・石製品 (碁石・砥石など)・ 骨製品(オモゲー・ 貝杓子など)・土製 品(土錘・人形・ 羽口など)		侍屋敷・ 道路
		安土桃山時代		掘立柱建物・土坑・溝など				
	集落	室町時代		溝		炆器		
要約	<p>江戸時代の城下絵図によると調査地は、藩の重臣や上級藩士の屋敷地である岡山城二の丸の中央やや西より位置する。調査の結果、近世Ⅰ期～Ⅳ期の4時期に分けた近世の遺構は重層的に検出され、それらからは16世紀後半から17世紀後半までの遺物が多く出土している。</p> <p>宇喜多直家～秀家期にあたる近世Ⅰ期は、東西・南北に沿った溝などが検出されているほか、土坑・柱穴などが確認された。また、出土した銅製品製作関連遺物から、調査地近隣に銅細工職人の工房があったと考えられる。</p> <p>近世Ⅱ期は宇喜多秀家期から前期池田期までで、「町替え」に伴うと想定する厚い真砂土層の上に残された遺構を主体とする。この時期の遺構には、大形のものが目立つ。</p> <p>近世Ⅲ期では、両側に側溝を伴い南北に走る道路を調査区東部で確認した。この道路は、『岡山古図』（寛永9年）に描かれた道路とほぼ一致しており、現在に至る岡山市街地の町割りがこの時期にほぼ形成されていたことが分かった。</p> <p>承応3（1654）年の洪水を上限とする近世Ⅳ期には、屋敷地の塀に伴うと想定される柱穴列がそれまで道路であった場所から検出された。このことは、『岡山中曲輪絵図』（宝永5年）に見える屋敷地の拡張が東側であったことを示すものと思われ、それに伴って道路も東へ付け替えられたことが想定される。</p> <p>このように、16世紀後半から17世紀後半までの遺構・遺物を多く確認した今回の調査は、城下町整備の変遷をとらえる上で、大変貴重である。</p>							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 247

岡山城二の丸跡

警察本部庁舎車庫整備事業に伴う発掘調査

平成31年3月8日 印刷

平成31年3月8日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市北区西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市北区内山下2-4-6

印刷 株式会社中野コロタイプ
岡山県岡山市北区玉柏390